女神アイレスの冒険　ー幻想怪物シリーズー

アサオ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
女神アイレスの冒険　ー幻想怪物シリーズー

【Ｎコード】
Ｎ５３０４ＨＫ

【作者名】
アサオ

【あらすじ】
かつて巨神達が地上に君臨していた、古の時代。巨大なる怪物ー竜どもを率いて世界を独り占めしようと目論んだ、邪悪なる女神がいた。
その名はガンジャ。
無敵の肉体を持つ「竜どもの母」から世界を守らんと、神々は恐るべき魔神に立ち向かう。
繰り広げられる壮絶なる戦いの行方は今、１柱（はしら）の幼き女神に託された。

ガンジャを倒す秘策。それは、彼女の唯一無敵では無い部分を狙い撃つ事だった。
小さな女神の手による、決死の作戦は無事に成功。囚われの身となった魔神は、穢れと罪、そして罰を司る忌まわしき不浄の女神、デイオスの手により永遠の苦痛と恐怖とを与えられ続ける事になるのだが…。
どす黒い野望を胸に秘めるデイオスは、魔神ガンジャの強大な力を利用して、魔神に成り代わり世界を脅かそうと企むのだった。

そしてー。

ファンタジーの皮を被った、巨大ヒロイン物…の装いをした大怪獣物デス。
身長２４メートルのお転婆な女神様（巨大ヒロイン）が、剣と魔法の世界を舞台に巨大な竜（怪獣）や恐ろしい邪神（悪の女巨人）を相手に大暴れ！物語を彩る、様々な怪物達も登場予定！

※一部リョナ描写を含みます。

※Ｒ－１８描写が存在するページの、サブタイトル部に☆マーク追加。

神竜大戦　☆

煌々と燃え上がる焔の明かりが、夜の空をまるで昼間のように照らす。

人々が長い年月をかけて築いた街は業火に包まれ、焼かれていた。

辺りにはおびただしい数の骸が転がり、親とはぐれた子が泣き叫ぶ。地上は、地獄と化していた。

無数の、おぞましい姿をした巨大な爬虫類―竜達が、建物という建物を破壊して回る。

そして、火の海と化した街の中央に彼等を従える者が佇んでいた。

巨大な角を生やし、身体を鱗に覆われた異形の巨人。乳房を持つその者は、どうやら女性であるらしかった。焔に照らされ、闇夜に浮かぶその姿は、まさに悪鬼そのもの。

「フハハハハハハ！」

巨人は勝利を確信し、夜空へ向かって火炎を吐いた。まさにその時。

「ギャオォォォォォォン！？」

風に乗って、竜達の悲鳴が聞こえた。

「何事だ！？」

巨人は、悲鳴が聞こえてきた方向を見た。

いつの間にかもうひとりの巨人が現れ、竜の群れと戦っていた。

光り輝く美しい髪を持ち、黄金の鎧兜を身に纏う。手にした雷（いかずち）でできた矛を振るい、無数の竜どもを一撃のもとに次々と打ち倒していく。

凛とした中にも気品の漂う、美しい顔。どうやら、この巨人も女性のようだ。

「これ以上罪を重ねる事は、余（よ）が許さぬ！竜どもと共に世界の果て、混沌の地へと立ち去れ！貴様の居場所はそこだけだ！！」

鎧兜を纏った女巨人が、異形の女巨人の前に躍り出て、その眼前に矛の切っ先を突きつける。

「小娘ごときが…。調子に乗りおって！」

異形の女巨人は、全く動じる事無く鼻で嗤い飛ばした。

「徹底的にやるぞ！」

「ほざけ！返り討ちにしてくれるわ！」

鎧兜を纏った女巨人は、自分の体格を遥かに上回る巨大な相手にも臆せずに勇猛果敢に突っ込んでいった。

「ハアァァァァァァッ！！」

鎧兜の女巨人が矛を振るい、異形の女巨人を打ち据える。

ガキィィン！という金属同士がぶつかり合う音が、辺りに響いた。

異形の女巨人はビクともせず、痛みを感じる素振りも見せない。

「ほう？」

異形の女巨人が、ニヤリと嗤う。

「イヤァァァァァァァァッ！！」

鎧兜の女巨人は矛の切っ先で、何度も異形の女巨人の、青銅色の肌を突いた。しかし、攻撃の全てが金属音と共に跳ね返されてしまう。

「どうした？蚊に刺された程も感じぬぞ？」

「くっ…！」

―やはり、此奴（こやつ）に武器は効かぬのか…。

「…ならば！」

鎧兜の女巨人は、矛を地面に突き立てた。

「我が拳のみで、貴様を倒す！」

鎧兜の女巨人は、異形の女巨人に拳を向けた。

「ギャゴオオオオオオ！！」

背後から一頭の竜が、仲間の仇とばかりに鎧兜の女巨人に飛びかかった。

「邪魔だ！！」

鎧兜の女巨人は、すかさず裏拳を放って竜の頭を叩き潰した。

ただの一撃で頭を砕かれた巨大なトカゲの姿をした怪物は、地響きと共に瓦礫の山の上に崩れ落ちた。

「下がれ」

異形の女巨人——「竜どもの母」が、我が子であり配下である怪物達を制した。

「其奴（そやつ）は、汝等が束になっても敵う相手ではない…」

「うおぉぉぉぉぉ！！」

鎧兜の女巨人が雄叫びを上げながら、「竜どもの母」の頬に拳を叩き込む。

「ふんっ！！」

同時に「竜どもの母」も、相手の頬に拳をぶつけた。

「ぐふうっ！？」

魔神の一撃を食らった、鎧兜の女巨人が自身の頬を押さえた。美しい顔には血がにじみ、歯が1本欠けてしまっている。相手の顔には、傷1つついていない。

鎧兜の女巨人は、魔神を殴った拳を押さえた。内出血を起こしたのか、青紫色に染まっている。

「どうした？今ので、拳が砕けたか？」

異形の女巨人がせせら嗤った。

「次は、こちらから行くぞ！？」

魔神は、口を開けた。凄まじい量の炎が吹き出る。

「竜どもの母」は、鎧兜の女巨人に火焔を吐きつけた。

「ぐああああああっ！？」

美しき女巨人の身体が、炎に包まれた。黄金の鎧装束の、純白の絹でできた布の部分が、見る見るうちに焼け落ちていく。

魔神の吐き出す炎が、さらに勢いを増す。焼け残った黄金の鎧や兜が真っ赤に熱せられる。灼熱の金属と炎とが、美しき女巨人の肌を焼いていく。

「このまま、丸焼きにしてくれるわ！！」

「竜どもの母」が女巨人に向かって火炎を吐き続ける。

ー焼ける…！余の肌が、焼かれてしまう…！かくなる上は…！！

美しき女巨人は、全身の気を溜めた。そして。

「ハァッ！！」

溜めた気を、一気に放出した。鎧と兜が吹き飛び、女巨人の全てが露わになった。

短めに刈られた、光り輝く黄金色の髪。磨き抜かれた玉のように、白く美しく艶やかな肌。しなやかさと力強さを兼ね備えた手足。鮮やかな桃色の乳首を持つ、たわわに実った2つの乳房。柔らかな脂肪に包まれ、うっすらと浮き出た腹筋。大きく丸く、豊かな尻。下腹部には、髪と同じく黄金に光り輝く叢がほど良く生い茂り、秘部を守っている。

「その頸、縊り倒してやる！」

裸体になった女巨人が魔神に飛びかかろうとした、まさにその時。

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っっっ！？」

美しき女巨人が、悲痛な叫び声を上げた。

彼女の前に突如、1頭の竜が地面から顔を出したのだ。

頭頂部に巨大な1本角を持つ、一際体格の大きい金色の竜。その角は、女巨人の秘部に深々と突き刺さっていた。

「や…やめ…あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ！！」
竜が頭を振るって、角をグリグリと突き動かした。太く硬い角によって押し広げられた女性器から、紅い血が滴り落ちる。
「ピギャァァァゴォォォ！！」
竜はひと声吠えると、大きく頭を振って女巨人を投げ棄てた。
女巨人の身体が魔神の眼前に、うつ伏せになって投げ出される。
「ガロン、よくやった！」
魔神が眼を細めて、一角竜に賛辞の言葉を贈る。
「グワオォォォ…」
金色の一角巨竜は唸りながら、魔神に向かって恭(うやうや)しく頭を垂れた。
「ひ…卑怯な…！！」
大地に倒れ伏した女巨人は魔神を見上げ、睨みつけた。もはや彼女には、立ち上がる力は残されていない。
「我は奴等に『下がれ』とは言ったが、『加勢するな』などとは一言も発しておらぬ…」
魔神は不敵に笑い、女巨人の背を踏みつけた。
「斯様(かよう)な脆い肉体しか持たぬ癖に。畏れ多くも、この我に歯向か

ったのが、汝の敗因よ…！」

「グルル…」

「ガルルル！」

無数の竜どもが牙を向き唸り声を上げながら、踏まれ倒れ伏す女巨人を取り囲む。

―奴等の長たる此奴（こやつ）さえ討ち取れば、我に歯向かう者はもうおらぬ…。残りの連中など、とるに足らぬ烏合の衆よ！

「グァンギャァアアアアアアアオォォォォオン！！」

「竜どもの母」の、勝利の咆吼が大気を揺さぶり、真っ赤に染まる夜空に響き渡ったのだった―。

＊

これは、まだ巨神達（タイタン）が地上に君臨していた古き時代の物語である。

１柱（はしら）の魔神がこの世を脅かし、世界を守らんとする神々と壮絶な戦いを繰り広げていた。

その名はガンジャ。

彼女は古参の神の１柱（はしら）であり、最も邪悪で好戦的な、「竜どもの母」の異名を持つ女神であった。筋骨隆々の巨大な体躯は、岩よりも頑丈な黄金の鱗と、どんな武器も通用しない青銅の肌とに覆われていた。針金のように硬く、燃え盛る炎のように真っ赤な体毛、頭

には２本の巨大な漆黒の角。そしてどんな剣よりも鋭い、鋼の牙と爪。そして、口からは猛火を絶え間なく吐き散らす。

世界を独り占めしようと目論んだ彼女は、大地と交わる事によりおびただしい数の竜を次々と産み出し、この世の全ての者達に戦いを挑んだ。神々は先陣を切って懸命に応戦したが、無数の竜を従える不死身の魔神には歯が立たず、次第に追い詰められていった。

神々の女王にして最強の戦士、主神オルディナは果敢にもガンジャに挑むものの、善戦空しく敗れ、囚われの身となった。

他の多くの神々も捕らえられ、僅かに残った者達は世界の片隅の僅かな土地へと追いやられた。この世に生きとし生けるもの達の大半が死に絶えた。

魔神がこの世の覇権を握るのも、もはや時間の問題であったー

＊

「残ったの、たったこれだけ…？」

岩石と砂ばかりの荒涼とした土地。辛うじて逃げ延びた、４柱（はしら）の神々ー知恵と美徳の女神ブーボー、酒の女神カルーナ、戦（いくさ）の女神ゴガドル、そして冥府の主たる闇の女神フォーリスが息を潜め、身を寄せ合っていた。皆、長きに渡る戦いに疲弊し、希望を失いつつあった。

「…何か無い？あれを倒す方法…。酔っぱらわせたところを不意討ちするとかさ？」

蜂蜜色のボサボサ頭でおちゃらけた性格をした酒の女神、カルーナが疲れきった顔で力無くぼやいた。

「それが出来れば、苦労などせぬッ！！」

酒の女神のぼやきを、背中まで届く翡翠色の長髪に朱塗りの盆のように艶やかな赤い肌を持つ、青銅製の鎧兜を身に付けた大柄な女神がバッサリと切り捨てた。戦（いくさ）の女神ゴガドルだ。

「よいか！？彼奴（あやつ）の身体は剣も槍も通さぬ！酒を飲んでも酔い潰れぬ！毒も効かぬ！おまけに、口からは全てを焼き払う焔（ほのお）！…打つ手無しとは、この事ぞ！！」

中性的な美しい顔を煤と土埃で汚し、疲弊と苛立ち、焦りにより怒鳴り散らす戦（いくさ）の女神に首をすくめながら、酒の女神はボソッと呟いた。

「あんなのでも、何かしら弱みはあるでしょうに…」

「あ、あのっ！」

すかさず手を挙げた者がいた。

知恵と美徳の女神、ブーボー。フワフワとした柔らかな白銀色の髪を持ち、小柄で幼い顔立ちをした彼女は、まさに神々の知恵袋的存在であった。

「私、気づいてしまいました！！…ガンジャめにも、あるかもしれません、弱みが！」

一体どういう事かと他の3柱が問う前に、ブーボーは発言した。

「ガンジャめは、不死身の肉体を持つ。そうでしたね？」

「今更、分かりきった事を！！貴公の知恵とやらも、いざという時には全く役に立たぬではないか！！」

戦の女神が野次を飛ばす。激情家だが、普段は気さくで誠実な彼女がここまで荒れるのは珍しい。状況はそこまで追い詰められているのだ。

「ゴガドル！！」

彼女達の中央に座す、艶やかな短めの黒髪に青黒い肌をし、漆黒の布を身に纏った女神が戦の女神を諌めた。

彼女こそ、地の底に存在する世界、冥府を統べる闇の女神フォーリス。双子の妹である神々の最高君主、光明の女神オルディナがガンジャの軍勢により囚われの身となった今では、彼女が神々の臨時の指導者であった。

「構わぬ。続けよ、ブーボー」

「はい。恐れながら申し上げます」

知恵の女神は、冥府の女神に頭を下げ、発言を続けた。

「故にガンジャめは、常に裸です。守る必要が無いのですから。むしろ、鎧や衣服の類いはあれにとっては邪魔にしかならないでしょう。…一カ所を除いては」

「…貴公は、何が言いたいのだ？」

「皆さん、お気づきになられてませんか？ガンジャめは、えーと、その…お…お股のところにま…前貼りを…」

純潔の誓いを立てている知恵と美徳の女神は、羞恥で顔を赤らめながら意見を述べた。

「…ああ！そう言われてみれば！」

４柱(はしら)の女神達は、猛り狂う魔神の禍々しい姿を思い浮かべた。そして、思い出した。

ガンジャは常に股間を、天空より叩き落とした星屑にて作られた前貼りで覆い隠し、それを片時も外す事は無かった。

「そんな事、考えてもみなかったよ…」

酒の女神が、大きくため息をつきながら呟いた。

「では、彼奴(あやつ)はその…、女陰(ほと)が泣き所だというのか？」

「そ、そういう事になると思われます…」

知恵の女神は、戦(いくさ)の女神からの問いに答えた。

「むう…。では、彼奴(あやつ)が女陰(ほと)を晒す隙を狙えばよいというわけか…！」

戦（いくさ）の女神ゴガドルが顎に手を添え、感嘆しながら呟く。

「でもさぁ…」

酒の女神が発言した。

「仮にそうだとしても、あんなに肌身離さず着けている物を、どうやって外させるのさ？仮に外させたとしても、確実に泣き所攻めて仕留めないと。１回こっきりしか使えない手なんだから、ねえ？」

「そ、それは…」

カルーナからの反論に、ブーボーは困った表情を浮かべた。

否。彼女はより一層顔を赤らめ、モジモジとより一層恥ずかしそうにしている。

「ブーボーよ、そなたには何かしらの策があるのだろう？遠慮なく申してみよ」

フォーリスが、ブーボーに優しく語りかける。

「えーと…。それは、そのぅ…」

知恵の女神はますます顔を赤らめ、挙動不審となった。

「…分かった！申さずとも良い！」

何かを察した冥府の女神は、慌ててブーボーを制した。

「問題は、それを誰がやるかだよ…」

カルーナが、首を振りながら力なく呟いた。

「フォーリス様！その役目、是非この私にお任せを！」

ゴガドルが、勇んで名乗り出た。

「…私が！！」

ブーボーが、大声で叫んだ。女神達は、水を打ったように静まり返った。

「策を立てたこの私が、ひとりで行きます！大勢だと目立ちますし、何よりこれ以上の犠牲は出せません！」

小さな女神の大きな決意に、３柱(はしら)の女神達は、顔を見合せ動揺した。

「貴公が行く事は無かろう！私が行く！」

「そーだよ！ここは、ゴガちゃんに任せなよ！何てったたってゴガちゃんは、神々(わたしら)の中でも陛下に次ぐ腕っ節の持ち主…！」

「…本当に、良いのか？」

フォーリスが、２柱(はしら)の女神を手で制しながらブーボーに尋ねた。

最年少の小さき女神に、このような危険極まりない任務を課すの

は気が引ける。だが、知恵の女神が決意を翻す事はまず無いだろう。
彼女には、良くも悪くも頑固なところがあるのだ。

「やります！」

ブーボーは、力強く即答した。

ー妹、いや女王陛下は、彼奴の本拠地に囚われているはず…。

押し黙っていたフォーリスは、重々しく口を開いた。

「…もう、何も言うまい。此度(こたび)の計、全てそなたに託す。頼んだぞ！」

「有り難うございます！！このブーボー、どんな事があろうとも必ずや魔神めを討ち果たします！」

ブーボーは冥府の女神と2柱(はしら)の女神達とに、深々と頭を下げた。

＊

夜—草木はおろか、石や土すらも眠りこける一時。

知恵の女神は月明かりの元、ただひとり敵陣に乗り込むための準備をしていた。

漆黒の空に煌めく、満天の星々。この世界に「夜」が生まれて以来、月と星々は常に「夜」の訪れにより闇に閉ざされる地上を、優しく照らし続けてきた。それは、魔神によって世界が破壊しつくされようとしている今も変わらなかった。

小さな背中をさらに小さく丸め、出陣のための支度を整えているブーボーの背後から、２つの影が覆い被さった。

「お弁当と水筒、それにおやつ、ちゃんと持った？」

酒の女神が声を掛けた。

ブーボーは、振り向いた。

「ブーボー殿、先刻は済まぬ…。私も頭に血が昇ってしまって、つい…」

戦（いくさ）の女神が、知恵の女神に深々と頭を下げた。

「大丈夫です。どうか、お気になさらずに」

「その…本当に、貴公ひとりで行くのか？この私も共に…」

「だーかーらー！あんたがついてったらそのデカイ図体のおかげで、あっという間に見つかっちゃうっての！」

「何だと！？」

「なにさ！？」

在りし日と変わらぬ、相変わらずなふたりのやり取りに、ブーボーは、クスクスと笑った。

「…ブーボー、無事に帰ってきなよ？」

カルーナが、ブーボーの肩を叩いた。

「終わったら、祝杯挙げよ？ワリカンで」

「貴公は自分で酒を作れるというのに、わざわざ金を取るのか…？」

ゴガドルは、呆れて首を振った。

「ありがとう、ふたりとも…。大丈夫、ご心配なく。私、やります！」

「…また、会おうな？」

3柱（はしら）の女神は、肩を寄せ合い抱き合った

＊

知恵と美徳を司る、女神ブーボー。彼女は、神々と全ての生きとし生けるもの達の希望を、その小さな背中に背負い、たったひとりで敵陣に乗り込んでいったのだった。

神竜大戦　　　☆（後書き）

より良い作品作りを目指しております。
よろしければ、感想及び改善点（ダメ出し）を書いて頂けると励みになります。

魔神討伐　☆

世界の中心にそびえ立つ、聖なる山がある。その山の頂きには、純白の大理石でできた大神殿があった。

その大神殿こそ、かつての神々の住まい。ガンジャに攻め込まれ、占領された美しき神々の家は、今や魔神の本拠地となり、聖なる山は無数の竜どもが彷徨く魔境と化していた。

色とりどりの花が咲き乱れる、緑豊かな大神殿の美しき庭園も、竜達がたむろする場と成り果てている。

そんな庭園の中を、１羽の白いの小さな梟（ふくろう）が舞う。

その梟（ふくろう）こそ、女神ブーボー。知恵の女神は梟（ふくろう）に身を変えて、敵の本拠地に殴り込みをかけたのだった。

「酷い…！酷すぎる！」

女神は、我が家だった場所の惨状を目の当たりにして、嘆いた。

そして、彼女はもっと残酷な、悍ましい光景を見てしまった。

１柱（はしら）の女神が、岩石でできた枷により一糸纏わぬあられも無い姿で地面に拘束されていた。光り輝く髪と玉のように滑らかな白い肌。気品に満ちたその顔は、冥府の女神と瓜二つであった。

美しい裸体を無残に晒している彼女こそが、女神フォーリスの双子の妹。神々の女王、そして巨神（タイタン）一の強者である光明の女神オルデ

ィナであった。仰向けに、大の字に縛められた彼女の表情は絶望に満ちていた。

「そんな…そんな…！」

ブーボーに突きつけられた残酷な、あまりにも残酷な現実。だが、それを上回る凄惨な出来事が、知恵の女神を待っていた。

「…ひっ！！」

怯えきったオルディナが、小さく悲鳴を上げた。1頭の竜が、光明の女神に近づいてきた。巨大な1本角を持つ、一際大きな体格をした金色の竜だ。彼女に不意討ちを仕掛けて負傷させ敗北に導いた、忘れたくとも決して忘れられぬ相手ー。

オルディナの脳裏に、先の戦いでのあの悪夢のような出来事が甦る。囚われの身となった巨神(タイタン)の女戦士の歯の根が、カチカチと音を立てた。

「やめろ！来るな！…くるな！」

弱々しく呟くオルディナを嘲(あざ)笑うかのように、金色の一角竜はのそりのそりと囚われの女神に歩み寄っていく。

「グルルルルルル…」

甘えるような唸り声を上げながら、一角竜は細長い舌でオルディナの顔を舐め回した。そして。

彼女の美しい乳房の、片方に齧り付いた。そして、あっという間

に食いちぎった。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！」

オルディナの絶叫とともに、真っ赤な鮮血が迸(ほとばし)る。一角竜は、苦痛に悶えのたうち回る女神を尻目に、肉塊を美味そうに咀嚼し呑み込んでいった。

一角竜は、女神の身体の柔らかい部分ー残ったもう片方の乳房と腸(はらわた)、そして子宮を次々と貪った。オルディナは身体を食いちぎられる度に狂わんばかりに絶叫し、釣り上げられた魚のようにのたうち回った。

食事を終えた一角竜は、満足そうに血で汚れた口の周りを舐め回しながら去っていった。

「…うう」

身体の各所を喰われ、血にまみれたオルディナが、惨たらしい姿を晒す。

「殺してくれ…殺してくれぇ…」

オルディナの虚しい懇願。特別な力を持ち、この世のありとあらゆる事象を司る神々は、不老不死の存在だ。どのような目に合わされても、死ぬ事が出来ない。無残に食いちぎられた身体も夜明けまでには傷が癒え、再生し、元のままの身体に戻るのだ。そして、また身体を竜に貪られるー。これが、何度も何度も繰り返される。

彼女は、永遠に尽きぬ竜の生き餌として魔神に飼われているのだ。

囚われの身となった他の神々も、恐らくは世界の各地で竜達に日々喰われ続けているのだろう。

ブーボーは、あまりの光景に言葉を失った。あどけない少女のような愛らしい顔は蒼白となり、激しい怒りと悲しみと悔しさとで、小さな身体を震わせた。

「ガンジャめ…！」

知恵の女神は唇を噛み締め、改めて必ず魔神を倒す事を誓ったのだった。

「お労しや、陛下…。私めが、必ずやお助けします。どうか、それまで堪えて下さい！」

梟(ふくろう)に身を変えたブーボーは、魔神の姿を探す為に庭園のさらに奥へと進んで行く。

＊

「グワォオオオ…」

敵の首魁、魔神ガンジャの姿を追い求め飛んで行く知恵の女神の小さな背中を、あの巨大なる一角竜が空を仰ぎながら、金色の瞳でじっと見つめていた。

「ピギャアアアアアゴボォオオオ。ピヤァアアアアゴォ…」

—この様な場所に、鳥が飛んで来る筈が無い。あれは大方、鳥に化けた巨神(タイタン)といったところだろう。それにしても、単身で乗り込ん

でくるとは…。剛胆と言うべきか、或いは只（ただ）の馬鹿と言うべきか…。

竜はそう言いたげに、唸り声を上げた。

「グワォォォォォォォォオ？グオォォォォォォォォオ…」

―もしや彼奴（あやつ）、あの女の弱みを見つけたというのか？とあれば、勝算あっての単騎突入か…。

「ピギャピギャア！ピヤァアアアゴォオオオオオオ！」

―面白い！あの牝豚（メスブタ）を、討てるものなら討ってみろ！貴様の手並み、この俺がとくと拝見してやる！

金色の一角竜は、眼を細めて含み笑いをした。「力」で押さえつけられているが故に、従っているだけ。「あの女」への忠誠心など、端から持ち合わせてなどいない。誰にも縛られず、ただひたすら強者を追い求め、ただひたすら戦いと殺戮、そして破壊に明け暮れたいという野心を秘めた彼は、母であり主である魔神ガンジャを討ち取らんとするブーボーを、敢えて見逃すのであった。

＊

かつて神々が遊び戯れた、噴水の広場。魔神ガンジャはそこにいた。魔神は地べたに寝そべり、大地に接吻した。

すると、ガンジャが接吻した場所が盛り上がり、ニョキニョキと筍のように伸びていった。

「フフ…」

ガンジャは、微笑みを浮かべながら立ち上がった。人間よりも巨大な身体を持つ神々の、その倍近くはあろうかという、青銅色に輝く巨大な体躯。

頭には三日月のような形をした、漆黒の巨大な角が生え、燃え盛る炎のような髪は、まるで獅子の鬣（たてがみ）のように逆立っている。

ほどよく歳を重ねた、熟れた女の色香を漂わせるガンジャの顔。金色の目は爛々と輝き、刺すような鋭い眼光を放っている。すっきりとした鼻筋。そして、厚みのある蠱惑的な黒い唇に収まりきらない程長く、鋭い鋼の牙。

黄金の鱗に覆われた、ガンジャの大木のように太く逞（たくま）しい四肢は、同時に女性特有のしなやかさも備えていた。

幅広く、隆々と盛り上がったガンジャの両肩。その下の両腋には真っ赤な剛毛が豪快に生い茂る。

両の乳房は魔神自身の頭程もあり、その頂きにはくすんだ金色をした乳首が、ツンと鎮座している。

くっきりと6つに割れ、まるで岩石のようにゴツゴツとした腹筋。筋肉で引き締まった巨大な尻。両の尻たぶには、くっきりとえくぼが浮き出ている。

森のように濃いガンジャの陰毛。それは髪と同じく逆立ち、まるでふんどしのように広がり彼女の下腹部を守っている。

赤い密林のすぐ下に位置する、ガンジャの秘裂。

そこには、　銀色に鈍く輝く金属製の小さな板が張り付いていた。

普段から裸体を惜しげなく晒す魔神だったが、大切な割れ目だけは竜の頭を象った前張りでしっかりと覆い隠し、守っていたのだった。

上気したガンジャは前張りをそっと外し、傍らに置いた。魔神は遂に、完全に無防備な姿を晒した。

赤銅色の分厚く大きな2枚の肉の花弁が、割れ目に収まりきらず盛大にはみ出ている。そして秘裂の上部、花弁が合流する小さな頂きは、厚い包皮が最後の守りとして、中のモノをしっかりと包み込んでいた。

「愛しき大地よ、目合い(まぐわ)を始めようぞ…」

ガンジャは大股を開き、指で秘裂を押し広げた。まるで奈落のような赤銅色の膣口がぱっくりと口を開け、そこから淫水が滴り落ちる。

そして、そのまま腰を下ろし、地面の盛り上がった部分―大地の陰茎を秘裂にゆっくりと挿し入れた。

ズブズブズブ…。

魔神の秘裂が、地面から生えた、節くれ立った筍のような土塊を咥え込んでいく。

「あんっ…！」

魔神は顔を紅潮させながら悦びの声を上げた。そして、腰を上下にゆっくりと動かし始めた。

ヌチョヌチョと、淫らな水音を立てながら魔神は自身の膣内(なか)を土塊で抉り、掻き回す。

大地との性交。それは、ガンジャにとって最高の愉しみであると同時に、手勢たる竜を出産する為の儀式でもあった。大地から放たれる精—煮えたぎる溶岩を胎内で受けとると同時に魔神は妊娠し、僅かな時間で腹が膨らみ、１度に十数頭の子竜を産む。

「…うぅっっ！？」

魔神を発見したブーボー。梟(ふくろう)の姿のまま、敵に見つからぬよう近くの茂みに身を隠したままでは良かったのだがー。

ーな…何と悍ましい！！

醜悪極まりない魔神の女性器が、ゴツゴツとした岩石と土塊でできた巨大な柱を貪欲に頬張り、上下に動いて摩擦する。針金のような剛毛に守られた魔神の秘裂は、分厚く大きな２枚の肉ビラをはみ出させながら不気味に蠢動し、その動きに釣られて柱もまたビクビクと脈動する。それは純潔の誓いを立てた知恵と美徳の女神にとって、正視に耐えない光景であった。

ー耐えよ、ブーボー…！…耐えるんだ！！

何度も嘔吐(えづ)き、眼を背けそうになりながらも知恵の女神は己の使

命を思いだし、自らを励ましながら死にものぐるいで耐えたのだった。

　ガンジャは平時も戦いの時も、その秘所を鉄壁の前張りで守り、決して外す事は無いのだが、例外的にそれを外す時が2つだけある。

　1つは入浴の時。もう1つは、大地と目合（まぐわ）う時。

　特に、無防備な股間を大っぴらにさらけ出す性交の瞬間は魔神の弱みを狙う、絶好の機会だった。

　知恵の女神は、まさにこの瞬間を狙っていたのだ。

「まだだ、機会は一度、ほんの一瞬だけ…！」

　ブーボーは必死で嫌悪と羞恥に耐えつつ、反撃のための準備をしながらその時を待った。

　ガンジャの腰の動きが、早く激しくなっていく。そして、大地と交わる魔神の秘裂に変化が訪れた。

　小さな頂きから、「それ」が赤銅色の鞘（さや）を押しのけ、僅かに薄い桃色の顔を覗かせたのだ。

＊

　かつて、世界は太陽を2つ持っていた。魔神ガンジャはそのうちの1つから、その体内を喰い破ってこの世に生まれ落ちた。

　ガンジャは、この世で初めて「性」を持って生まれた神であり、

最古の「女性」でもあった。

　彼女はこの世にひり出される際、太陽の血を全身に浴び、青銅や黄金などの金属でできた無敵の肉体を手に入れた。

　ただ1ヶ所、ほんの小さな部分だけを除いて。

「性」を得た者の宿命（さだめ）。それは、他の「性」の者とお互いの力を合わせて子を成し、栄える事。そしてその為に必要な行為であり、儀式でもある「性交」。それは、互いの性器を結合させる事であった。

　大いなる宇宙の意思は、この世の「性」を持つ者に「性交」を促す為に、「女性」の身体にある仕掛けを施した。それは、原初の「女性」であるガンジャも例外では無かった。

　性交を促しつつも邪魔にならぬよう、「女性」が「男性」を受け入れる部分―秘裂の頂きに、小さな小さな肉の突起を生えさせたのだ。

　非常に繊細で敏感な「それ」は、外界からの無用な刺激で傷ついてしまわぬよう、普段は皮膚でできた鞘（さや）の中に納まっている。

　だが来るべき時を迎えると、血が昇って漲（みなぎ）り、ぷっくりと膨（ふく）れて固くしこる。この姿に変化した「それ」は、適度な刺激を受ける事により、持ち主たる「女性」に大きな悦びをもたらすのだ。

　一度でも悦びを味わってしまった「女性」は、それを求めて積極的に「性交」を求めるようになる―。

それこそが、「それ」の存在意義。劣情に駆られ、ただただ快楽を貪るためだけの器官。

「それ」は淫らな欲望の権化であり、穢れきった罪の象徴――しかし、無くてはならない大切なものであった。

魔神ガンジャは全身にくまなく太陽の血を浴びたが、ガンジャの「女性」としての、穢れと罪を体現したそこだけは、聖なる血の加護を受ける事が出来なかった。

故に彼女のそこだけがか弱い生身のままであり、恐るべき魔神の、唯一の泣き所だったのだ。

そのままでは巨大な魔神の体躯に合わせてそこも大粒に育ち、そして軟らかい肉でできた無防備な姿を晒し、外界の脅威に晒される恐れがあった。だが、ガンジャの身体は精一杯ガンジャを守った。そこが青銅製の皮膚の鞘（さや）の中に完全に納まるよう、そこの成長のみを止めてそこだけを小さな幼子のモノのままにしたのだ。

だが、魔神が性行為をする際、性的興奮と刺激とにより、どうしても血が昇り漲（みなぎ）って、つまりは勃起してしまう。そして、鞘（さや）から小さな顔を覗かせて、可憐で繊細なその身を僅かばかり晒してしまうのだった。

＊

「ああ…いい…ああぁ…！」

ガンジャは夢中になって腰を振り、快楽を貪った。

一番の性感帯である「それ」は、過敏過ぎる故に直接刺激してやらずとも、魔神に快楽をもたらす。

周りの皮膚や組織、筋肉の動きに合わせて、自身を柔らかく包み込む鞘（さや）に引っ張られ、扱かれ、揉みしだかれる。

膣内（なか）からのジワジワと染みわたるような快感と、外陰部からの刺すような激しい快感とが、ガンジャを悦びの頂きへと導いていく。

「あっ！あっ！んあぁぁぁ！」

ガンジャの顔が、恍惚に染まっていく。

魔神は大地に貫かれながら乳房を揉みしだき、もう一つの性感帯である乳首を摘まんで刺激した。狂ったように腰を振り、子をひり出すための穴で大地の陰茎をしゃぶり尽くし、子を育てるための乳を出す器官を弄ぶ。

「…果てる…果てる…！」

ガンジャの肉体が、悦びの頂きに登りつめようとしている。大地もまた、「竜どもの母」の胎内に子種―灼熱の溶岩を放とうと熱く滾り、より一層膨れ上がった。

「あっ…あはぁ！！」

ガンジャの上半身が、大きく仰け反った。そして「女性」の本能のまま、大地の精を胎内にしっかりと受け取るために、指で秘裂をより一層押し広げた。魔神の動きが一瞬だけ止まった。

「今だ！」

ブーボーは用意してきた細い筒を口に当てて、この機をずっと待っていた。筒の中には、髪の毛のように細く鋭い針。それには、強力な痺れ薬と眠り薬とを混ぜ合わせた物が塗り込めらている。

大地を咥え込みながら秘裂を押し広げたために、無防備なそこはさらに無防備になり、その半身を曝け出してしまった。

知恵の女神は大きく息を吸い、その小さな標的に目がけて針を吹きつけた。

鋭い針の先端が、生身の過敏な粘膜を貫いた。

「いぎぃ！？」

ガンジャは、その痛みに思わず腰を浮かせた。その拍子に、秘裂から土塊が抜けた。土塊の先端から、煮えたぎる溶岩が噴出する。大地の射精は、無駄撃ちに終わった。

「な、何だ！？」

魔神は、股間をまさぐった。そこには、１本の小さな針が突き刺さっていた。ガンジャは針を抜くと、ゆっくりと立ち上がった。

「誰だ！！」

ガンジャは、怒りに燃えていた。不届きな侵入者により最高の愉しみを邪魔されたばかりか、身体に傷を付けられた。火焔のような頭髪はますます逆立ち、魔神の美しい顔はより凶悪に歪んだ。

だが。

「う……」

魔神の身体に変化が起こった。猛烈な痺れと眠気。手足の自由が利かない。瞼も、開けていられないほど重い。

ガンジャの、生身のままの部分を通して体内に注入された薬が、ガンジャを侵す。

恐るべき「竜どもの母」はふらつき、そして遂に地面に倒れ伏したのだった―。

罰　☆

魔神ガンジャは、暗く何も無い空間の中で、ようやく目を覚ました。

あれから、何がどうなったのか。ガンジャは、まだ朦朧とする頭で懸命に考えた。

大地との性交のため、無防備に曝け出した股間に薬を仕込んだ針を打ち込まれ、動きを封じられた。その隙をついて、あの忌々しい餓鬼（ガキ）どもに攻め込まれ、奪い取った居城を奪い返された。そして、我が子であり手駒でもある竜達は、大将である自分を失って総崩れとなり、散り散りとなった―。

―負けたというのか？この我が…。

ガンジャは捕らえられ、地下深くにある「冥府」に幽閉されていた。そこは、死者の魂達がたむろする世界。そして、彼女を庇護する大地の力も及ばぬ場所であった。

宙に浮いた幾つもの巨大な松明に火が灯り、魔神の姿を漆黒の闇より照らし出した。

かつて「竜どもの母」と呼ばれ恐れられた女神は、２度と暴れる事が出来ぬように繋がれ、縛められていた。

上とも下とも、縦とも横ともつかぬ空間の中、組み合わさった無数の骨によって。手足を大きく広げられ、厳重に固定されていた。

拘束具を形作る骨は、全て魔神の為に命を落とした全ての生き物達の骨であった。

大切な女性器を守る、星屑の前張りは剥ぎ取られたまま。世界を相手に暴れまわった女は、今や文字通りの丸裸だった。

そんなガンジャの目の前に現れた、３つの影。それは、彼女を降した神々のうちの３柱のものだった。

「全く、見れば見るほど可愛らしいおばさまですこと！」

影のうちの中で最も背の高い影が、皮肉たっぷりに呟きガンジャを見下ろした。

穢れと罪、そして罰を司る不浄の女神、ディオス。闇の女神フォーリスに仕える彼女は、まるで腐りかけの死体のようなどす黒い肌に覆われた長身痩躯の身に、薄汚れたボロ布を纏い踵まで届く長い黒髪を持つ。顔の半分は髪に隠れ、その表情を窺い知る事は困難だ。

ディオスは冥府の刑務官として、生前罪を犯した者達の魂に罰を下し、罪を償わせる役目を受け負っていた。ただ、彼女が罪人に科す刑の数々というのが、思わず目を覆いたくなるほど残虐なものばかり。生まれながらの穢れの化身という忌まわしき身である事に加え、極めて加虐的な性格の持ち主である彼女は、神々の中でも疎まれている存在だった。

「只の１度も出陣しなかった臆病者の分際で…！どの口が言うか！？」

２つ目の影―青銅でできた鎧装束を身に纏った戦（いくさ）の女神ゴガドルが、不浄の女神を忌々しそうに睨みつけた。

「冥府（ここ）を留守にするわけにはいかないじゃないですか？ねぇ、我が主様」

３つ目の影―漆黒の布を纏った闇の女神フォーリスは、デイオスの言葉に答えなかった。

―あれ程までに我等を苦しめた、あの「巨大なる魔神」が…。これ程までに呆気なく…。

闇の女神は無言で、何とも言えぬ複雑な表情を浮かべて世界を制しようとした女を見下ろした。

「…出来る事なら、この手であの首をはねてやりたかった！」

そう叫んだゴガドルは、魔神を睨みながら悔しそうに歯軋りをした。

「こうして、この世の終わりまで冥府（ここ）に幽閉するしかできぬとは…！」

―小賢しい餓鬼（ガキ）どもめ！

ガンジャは、好き勝手に喚き散らす女神達にそう吐き捨てようとした。いや、できなかった。

ガンジャの口は強力なトリモチを貼り付けられ、　塞がれていたのだった。

「冥府で火を吹かれては、堪りませんからねえ」

デイオスが、肩をすくめておどけた。

「ゴガドル様。貴女の鬱憤、私めが晴らして差し上げましょう。このおばさまは、私がたっぷり可愛がってやりますわ」

「貴様の下卑た趣味趣向には、付き合いきれぬ！」

ゴガドルは、デイオスの身体から放たれる強烈な腐臭に顔を歪ませながら、不浄の女神である彼女に軽蔑の眼差しを向けた。

「我等は、破壊し尽くされた地上の再建を成さねばならぬ！其奴など、煮るなり焼くなり、勝手にせい！！」

戦の女神は、デイオスに向かって汚らわしい奴め、と毒づくと踵を反し、地上へと向かう。

フォーリスがそれに続こうとしたが、一瞬歩みを止めた。

「…デイオスよ。我が妹が受けた屈辱、その者にも存分に味わせてやってくれ！」

闇の女神は後ろを向いたまま、不浄の女神に告げた。

「はいはい。承知致しましたよ、母上」

デイオスは恭しく頭を垂れ、主人であり母でもあるフォーリスを、姿が見えなくなるまで見送った。

＊

「さて、と。これでようやくふたりだけになりましたね？愛しいおばさま、存分に戯れましょう？」

不浄の女神はそう言うと、魔神に近寄り、その頬にそっと触れた。デイオスはクスッと小さく笑い、巨大な魔神の体躯―乳房に、そして腹筋に次々と触れながら、下半身を目指した。

ガンジャの下腹部。そこには赤く堅牢な剛毛が、茨のように複雑に絡み合って生い茂っていた。

茂みによって覆い隠された秘密の花園に触れようとすると、硬く鋭い陰毛の先端がデイオスの柔肌に突き刺さる。

「いたた…。邪魔ですね、この毛。では、こうしましょう」

不浄の女神は自分の長い髪を1本引き抜くと、それにふうっと息を吹きかけた。

「『鋼よりも強く、絹糸よりもしなやか』…」

デイオスは鼻歌混じりにそう言うと、ガンジャの剛毛を引き抜いた髪で束ねた。

厄介な剛毛は、まるで麦の束のように纏められてしまった。

「ムグウッ…！！」

塞がれた魔神の口から、羞恥と怒りの声が漏れた。
体毛によって守られていたガンジャの秘裂が、剥き出しになってしまった。
露になった秘裂の先端。そこは、そここそが、不浄の女神が探し求めていたものだった。だが、そこは包皮の鞘に埋もれ、完全に隠れてしまっている。
「まずは、下ごしらえを。これを、勃せて貰いましょう」
デイオスはそこをそっと摘まみ、ゆっくり優しく擦り始めた。
「ウウッ！？ウッ…ウウン…！」
ガンジャはその魔手から逃れようと、激しく腰を揺さぶって抵抗した。だが、何処からともなく無数の骨が飛んできて２つの巨大な手となり、魔神の腰をがっちりと押さえ、動かせぬよう固定してしまった。
「ウウゥゥ…ウフゥゥッ…」
愛撫を受けるそこから、次第に快感が広がっていく。
ガンジャの肉体は、与えられる悦びに抗えず、そこをるみるうちに芽吹かせていく。膨れて大きさを増し、固くしこり、そして。
「出てきた、出てきた」
「それ」は赤銅色の鞘からそっと、恥ずかしそうに薄桃色の顔を

覗かせた。

「おばさまに、贈り物があります。貴女が失くされた前張りの代わりです。遠慮なく、是非受け取って下さい」

デイオスが取り出したのは、真鍮（しんちゅう）でできた前張り。それは、愛用していたものとは似ても似つかないものであった。

以前の物よりもはるかに小さい、逆三角形をしたそれは、羽を広げた蝶を模した細工がなされていた。そして、蝶の腹に当たる下部先端近くに穴が空けられていた。穴の淵は丁寧に角を削られ、丸みを帯びるよう加工がなされていた。

—何かを括り出し、そのまま固定するための穴。

それの用途が何であるかを察したガンジャは、呻き声を上げながら頭を激しく振って拒絶した。

「そんなに遠慮なさらずに。さあ」

デイオスが、前張りを魔神の股間に近づける。そして、穴を薄桃色の顔を覗かせる小さな頂きにそっと挿し込みゆっくりと装着した。

ぷりっ

頂きを覆う鞘（さや）が剥かれた。遂に、魔神を悩ませ敗北の原因となった「それ」が、完全に剥き出しにされてしまった。

「ウグゥッ！？」

生まれて初めて「それ」が外界の空気に晒された。
過敏な粘膜を、ひんやりと染みるような感覚が襲う。ガンジャはその刺激に戸惑い、悶えた。

魔神ガンジャの淫核。

薄桃色に輝き、幼く可憐な少女のままであるその突起は、巨大な魔神の体躯には極めて不釣り合いに小さかった。しかしそれでも、我々人間の目から見れば李(スモモ)ほどもあった。
「ああ、これがあの『竜どもの母』と呼ばれ恐れられた貴女の…！この世で最初の『女』の…！」
ディオスは、初めて見る魔神の穢れと欲望、そして罪の証し―淫核に感嘆した。
「…あら、ずいぶんと汚れておりますね？」
太陽より生まれ出てから1度も剥かれる事の無かった、ガンジャの淫核包皮。勃起時に僅かばかり顔を覗かせる部分を除いて、魔神の肉芽には長い年月を経て溜まりに溜まった白いチーズのような恥垢が、びっしりとまとわりついていた。
「ああ…。生まれてからずっと、ここを剥いて洗い清める事もしなかったのですね？このすえた匂い、…堪らない！臭い！臭いです！！」
「ウーッ！ウーッ！」

自分にとっては年端もいかない小娘に、唯一にして最大の泣き所を強制的に勃起させられ剥き出しにされ、あげくに臭い汚いと罵られる。ガンジャはあまりの屈辱に身を震わせ、涙を流した。

「こんなに穢れて、皆に疎まれて…。私と同じ…」

不浄の女神は魔神の顔と淫核とを、憐れみと共感の目で交互に見た。そして、その突起に顔を近づけ軽く接吻をした。過敏なそこに、デイオスの唇がそっと触れる。その柔らかな感触に、ガンジャの身体はビクンと痙攣した。

「私が、清めて差し上げますね？」

デイオスは慈愛を込めてそう言うとガンジャの淫核を労るように、優しく舐め始めた。

ヌロヌロ、チロチロ…

不浄の女神は舌先を尖らせ、可憐な肉の突起にこびりついた汚れを舐めとっていく。

ガンジャは生まれて初めて味わう淫核への直接愛撫に戸惑い、何とか逃れようと虚しい抵抗を続けた。しかしその力は次第に弱まり、おとなしくなっていった。

「…気持ちいいのですね？どうか、もっともっと気持ちよくなって下さい」

デイオスの口淫が過激さを増していく。

口をすぼめて啜りあげ、コリコリと前歯で軽く擦る。まるで飴玉のようにゆっくりと舌でねぶり、口の中で転がす。時折口を離し、軽く息を吹きかけてやる。

淫核に与えられる多彩な刺激に、口を塞がれたガンジャはくぐもった嬌声を上げ続けた。

幾多もの竜をひり出した秘裂は、ぱっくりとだらしなく口を開け、白濁した淫水をダラダラとよだれのように溢れさせた。

魔神は、快楽の種をまったりとねちっこくねぶられる悦びに悶えた。

―は…果てるッ！！

ガンジャは、来るべき快楽の頂点に備えた。だが。

―なッ…？うあああっっ！？

悦びの頂きに、登りつめる事ができない。

果てる間近のあのもどかしい快感が、何時まで経っても延々と続いているのだ。

「果てる事ができないのでしょう？貴女が着けた、その前張りのせいです」

ディオスは口淫を止め、ガンジャに残酷な真実を告げた。

「それは、私が腕によりを掛けてこしらえた、特別な品でして。

装着した者の快楽を、果てる間近でせき止めて長引かせる魔力が込められているのです」

不浄の女神の真意。それは甘く切なくも、惨たらしい罰を魔神に科す事だった。

「グウォォォォォォッ！！」

魔神は何とかして縛めから逃れようとして、再び激しい抵抗を始めた。

だが暴れれば暴れるほど、拘束具を形作る骨は複雑に絡み合い、縛めを強固なものにしていった。

「すぐに果ててしまっては、勿体ないでしょう？焦らされれば焦らされるほど、果てる時に最高の悦びを得る事ができる…。さあ、たぁ～っぷりと気持ちよくして差し上げますね？」

快楽で昇りつめる寸前の状態が延々と続く。それは、苦痛でしかない。恐るべき拷問だった。

罪人自身の肉体その物を拷問具とし、当人に苛烈な拷問を科す。加虐的な不浄の女神は、哀れな魔神を責め嬲るための新たな一手を用意した。

それは、デイオス自身の髪を使う事だった。

「ほら、サラサラしてて気持ちいいでしょう？」

デイオスは、ガンジャの太腿を髪でくすぐった。

「これで貴女の敏感なモノをくすぐったら、もっと気持ちいいでしょうねぇ？」

不浄の女神は毛先で魔神の淫核をゆっくりと、表面をなぞるようにくすぐり、撫であげた。極めて微弱な、しかし強烈過ぎる刺激が過敏な粘膜を襲う。

ーこ、焦げるうぅぅぅぅぅ！？

ガンジャは下半身が焼けつくような凄まじい快感に悶え狂い、咽（むせ）び泣いた。

いつ終わるとも知れぬ、髪によるくすぐり責め。ディオスは魔神の、頑強な金属製の身体の中で唯一、肉のままのその突起に執拗に罰を下し続けた。

「ほうら、コチョコチョ」

刷毛のように束ねた髪の毛先で肉芽の根元、青銅の肌と繊細な粘膜との境い目、小さなカリ首をクルクルとなぞる。最も過敏な裏側の部分を、蛇が這うようにくねくねと撫であげる。そしてぷっくりと尖った先端を、ツンツンと優しくつつく。

苦悶する魔神の肌から、滝のように汗が吹き出す。それは松明の明かりによってキラキラと輝き、恐ろしいガンジャの姿を美しく飾り立てた。

「果てたいのですか？」

淫核への責めを続けながら、不浄の女神は魔神に尋ねた。
ガンジャは、懇願するような目でディオスを見る。
「まだまだ駄目ですよ？」
ディオスはクスクスと笑いながら、拷問を続けた。
「ちょっと、趣向を変えてみましょうか？」
ディオスは、次の手を繰り出した。
身に纏っていたボロ布を脱ぎ捨て、裸となった。
不浄の女神の、どす黒く潤いの無い荒れた肌をした、痩せた貧相な体躯が露になった。
細長いだけの、棒のような手足。ただただ灰色の乳首が2つ張り付いただけの、乳房とも呼べないまっ平らな乳房。その下には、あばらが浮き出ている。乳房同様、色気に欠ける小さく扁平な尻。下腹部には、黒い滑らかな陰毛が、控えめに生えている。
「見て下さい、私のモノ」
ディオスは魔神の顔を跨いで大股を開き、指で自分の秘裂を押し広げた。
女神ディオスの女性器。灰色をした、薄い2枚の肉襞の合わせ目。秘裂の頂きに、「それ」は鎮座していた。

ディオスは、実に大きな淫核を持っていた。彼女自身の親指の先端ほどもある灰色のそれは、包皮に納まる事もできず、隆々とそびえ勃っていた。その凶悪な姿はまるで小さな男根のようであり、穢れと罪を司る、不浄の女神である彼女に相応しい持ち物だった。

「大きいでしょう？」

ディオスは、自分の淫核をそっと摘まみあげた。そしてゆっくりと扱きだした。

「うんっ…うふぅっ！き…きもちいい…」

不浄の女神は、魔神の眼前で自涜行為をし始めた。

収穫　☆

クチュクチュ、チュコチュコ…。

不浄の女神が自身の淫核を愛撫する。湿り気を帯びた淫やらしい音が、漆黒の闇の中で響き渡った。

細長い指を巧みにくねらせ、魔神への加虐により興奮し、猛るそこをつねり、こねくり回し、擦り立てる。ディオスは、これ見よがしに自分で自分を汚し快楽を貪る。

「あはぁ…いい！とても…いいです…！」

ディオスの秘裂からねばつく淫らな水が滴り、ガンジャの顔を汚した。魔神は眼を見開き、心おきなく存分に自らを悦ばせる不浄の女神の姿を、羨望の眼差しで凝視し続けた。

「ああ…も…もう、とろけそう…果てそうです！」

ディオスの指に力がこもる。淫核への扱きが激しくなった。

「はてる…果てます…！ごらんになって…私の…昇りつめる…姿を…！」

次の瞬間。

「い…いくうぅっ！？」

ディオスは、腰をビクビクと震わせながら果てた。秘裂を激しく痙攣させせ、白濁した粘液をドロリと吐き出した。

「はあ、はあ、はあ」

至福の瞬間を味わったディオスの身体から力が抜け、魔神の顔面にへたりこんだ。ガンジャの顔に、ディオスの女性器が密着する。

「ンーッ！！ンーッ！！」

魔神は感極まって呻き、腰を激しく揺すった。

—果てたい…！！あの素晴らしい心地よさを、存分に味わいたい！！

ガンジャの頭はもう、それしか考える事ができなかった。

「果てたくて、堪らないのですね?可哀想に」

不浄の女神は魔神の頬をそっと撫で回すと、接吻した。そして、自分の秘裂をガンジャのそれに近づけた。

「次は、一緒に気持ちよくなりましょう？」

ディオスは、そのまま股間を押しつけ、腰を揺さぶりくねらせ始めた。

「ああ…果てたばかりなのに…すごいい…気持ちいい！」

秘裂同士が擦れ合う。ディオスは、擦れ合う部分を一点に定めた。

「ああっ！？」

「ンンッ！？」

ふたりの嬌声が、重なった。

ふたりの淫核が、過敏な突起同士が衝突し、刺激し合った。

「こ、擦れあって…！」

「ムグウゥッ！」

互いの罪深き肉芽が互いを責め嬲り、辱め合う。ふたりは、互いの快感が反響し合うかのような錯覚に陥った。

「ウーッ！？ウグゥ！？グゥォォォォォォォォ！？」

普段から露出し、自涜（じとく）によって性的刺激に慣れているデイオスの淫核。それに対して、生まれて初めて皮を剥かれ、刺激に晒されたガンジャの淫核。幼子そのものの魔神の「それ」は、経験豊かなデイオスの「それ」以上に苛烈な刺激を受けさせられていた。

自分よりも遥かに大きなデイオスに擦り上げられ、グリグリと押し潰され、転がされる。ただでさえ根元を括られて疼痛を感じる小さなガンジャは、その身を小さいながらも精一杯膨らませた。そして、窮屈な穴に根元を、今にももげて落ちてしまいそうになるほど締めつけられた。

焼け焦げるような苛烈な快感と、敏感な根元を襲う鈍い痛みに、

ガンジャは気が狂ってしまいそうになった。

「ああ！また果てる…！果ててしまう！」

デイオスは、限界を迎えようとしている。だが、ガンジャの身体は未だに果てる間近のまま。

否。非常に緩やかではあるが、どうやら先ほどよりも悦びの頂きに近づいている。あと一歩、ほんのあと一歩で果ててしまえる。ただ、その一歩が踏み出される速度が、あまりにもおそいのだ。

「ああ…だめ！もう…だ…め…」

不浄の女神は、２度目の絶頂を迎えた。

「ふあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

デイオスは、弓のように仰け反った。そして恍惚とした笑みを浮かべると、そのまま魔神の股ぐらにぺたんと尻餅をついた。

「ウーッ！ウーッ！ウーッ！！」

「…まだ、果てる事ができずにいるのですね？」

デイオスは、ガンジャの淫核に手を伸ばした。

「でも大丈夫、もうそろそろのはずです。最後は、私のこの手で流(けが)して差し上げましょう。…私の妙技、とくと味わって下さい」

不浄の女神は、小さなガンジャを摘まもうとした。

「小さすぎて、うまくいきませんね…。これならば、いかがですか？」

デイオスは、指先で魔神の淫核を軽く引っかき始めた。

カリカリ、コリコリ

ゆっくりと、じんわりとガンジャの肉体が昇りつめていく。

「ンッッ…！ンフゥ…」

ほんの小さな肉のままの部分を、細い指先で翻弄され続ける。魔神はデイオスの指責めに酔いしれ、完全に身を任せてされるがままでいた。

「これなど、いかがでしょう」

グリグリと親指で捏ねくり、押し潰す。人差し指の先でトントンと軽く叩く。その度に、ガンジャの腰がビクンと跳ね上がった。

「ウーッ…フーッ！フーッ！」

魔神の目が宙を泳ぐ。顔が上気し、恍惚に染まる。その時が、近づいているのだ。

「そろそろですかね？では、仕上げとしましょう」

デイオスは、ガンジャの淫核を上下に激しく擦った。魔神の身体が、硬直する。巨大な尻が引き締まり、えくぼを一層くっきりと浮

き上がらせる。そして、ビクビクと戦慄（わなな）いた。

ー果てる…いく…イク…！！

「ンウゥゥゥゥウウウウウゥゥゥン！？」

ようやく、魔神ガンジャに至福の瞬間が訪れた。

今まで味わった中で、最も深い深い絶頂。

ぷしゃあっ

「キャッ！」

ガンジャは、潮を噴いた。銀色の飛沫が、キラキラと煌めきながら股間から噴き出る。そして、ディオスの手と顔を汚した。

ヒクッ！ヒクヒクッ！

秘裂を激しくヒクつかせ、大量の淫水を溢れさせ、垂れ流す。

ガンジャの可愛らしい肉芽は、至高の悦びにうち震えた。

「ンウッ！？ウフゥ…フゥッ！フウゥッ！！」

散々焦らされ、快楽を溜めさせられていた分、至福の瞬間は、延々と続いた。魔神はその悦楽に歓喜し、心ゆくまで堪能した。

長い長い絶頂が終わり、ガンジャの身体から力が抜ける。暫しの休息が訪れる、かと思われた。

「さて、『収穫』を始めましょう…」

不浄の女神ディオスが、何処からか鉄(くろがね)でできた小さな刃物を取り出した。鎌のような形をしたそれは、何かを刈り取るための物だった。

「渇望と満足を両方とも味わう事により、穢れと罪を溜め込んだ貴女の淫核。誠に無礼ながら、その極上の肉の欠片を、これより私の糧とさせていただきます」

大切な突起を刈り取られ、喰われる。ガンジャの顔が、恐怖に歪んだ。やめてくれ！とディオスに目で懇願し、激しく頭を振り、呻き声を上げた。

「大丈夫ですよ？生身の、肉のままとはいえ神の肉体。1日もすれば傷も癒え、また新しく生えてきましょう…」

ディオスは、哀れな魔神の淫核の根元に小剣の刃を当てた。

「一瞬で、終わりますからね？」

ガンジャの股間に、刺すような鋭い痛みが走った。切り取られた傷口から、鮮血がしたたり落ちる。

「ングオォォォォオオオオオオオォォォォォォォォォオオオオオオォォォォ！？」

魔神は凄まじい悲鳴を上げた。ガンジャの絶叫は、冥府全体を揺るがした。その震動は地震として、地上まで伝わった。

デイオスは、切り落としたガンジャの快楽器官だった肉片を拾い上げ、口の中に落とすと旨そうに飲み込んだ。

「穢れと罪に塗れた、『竜達の母』の血肉…。何たる美味…！！」

「食事」を終えた不浄の女神は、満足そうな笑みを浮かべた。

過敏な突起を失った魔神は、あまりの苦痛にのたうち回り、悶え狂った。

「フフフ…ほんの小さな肉を切られただけだというのに、何とだらしの無い！」

これが、あの「竜達の母」と恐れられた女なのですか？と、不浄の女神は嘲り嗤った。

ガンジャは凄まじい激痛の中、遂に気を失った。

＊

ガンジャは、頬を叩かれて目を覚ました。

「朝ですよ？起きて下さい」

デイオスが、魔神に告げる。

常闇の世界、冥府に朝は無い。ただただ、時だけが流れるのだ。

「ほうら、元通り。生えてきたじゃないですか」

傷が癒え再生し、生まれ変わったガンジャの淫核。デイオスは、そこをくりくりと指で転がし始めた。

「さあ、昨日の続きを致しましょう？」

泣き所である小さな肉の突起を責め嬲られ、延々と焦らされ続けた果てに、ようやく絶頂を与えられる。果ててより感度の増したそこを刈られ、不浄の女神デイオスの糧にされる。それが、気の遠くなるほど長い年月をかけて繰り返されるのだ。

「グゥッ！ムゥッ！グォオオオオオオオ！？」

死者の魂が集う闇の国、冥府に幽閉された「竜達の母」。魔神ガンジャは今日も泣き叫び、悶え狂う。

「私は、もっと力を付けなければならない…。貴女の血肉、穢れと罪が、もっと必要なのです。そして、力を得た暁（あかつき）には…」

女神デイオスは青ざめた唇を歪め、暗い笑みを浮かべたのだった――。

誕生

魔神と神々との長きに渡る戦いが終わり、ようやく世界に平和が訪れた。全ての生きとし生けるもの達は、魔神を討ち取り世界を救った神々に感謝を捧げ、復興への大きな1歩を踏み出し始めた。

そして、幾つかの月日が流れた。

＊

神々が住まう、聖なる山の大神殿。その広大な敷地の一角にある、知恵の女神の邸宅。

女神ブーボーは書斎にて、ある儀式の最中であった。

小さな銀製の像をこしらえ、ふうっと息を吹きかける。幼くあどけない少女を象ったそれは、ピクリと動いた。

「これでよし。あとは…」

「神産みの儀」。先の戦（いくさ）「神竜大戦（じんりゅうたいせん）」による戦火は、世界のあちこちを焼きつくし、破壊しつくしたが神々の陣営が受けた打撃もまた深刻であった。

囚われ、裸に剥かれて、生きながらにして竜の餌にされた者達の心の傷の治療を筆頭に、破壊された大神殿とその敷地にある神々の邸宅の修復、各種事務手続き、飢えに苦しむ者達への食料の配給な

ど、やらなければならない事があまりにも多かった。
「新たに神を産む事」も、そうした復興事業の一環であったのだ。
ブーボーは傍らに置かれた、銀でできた大きな針を手に取り、それで指先を突いた。
「つっ…！」
女神の指先から血が数滴、小さな像の上に滴り落ちた。
すると、像はみるみるうちに血の気を帯び、銀製の身体が本物の肉体となり、動きだした。
母に似た白銀色の、柔らかな髪とミルク色の滑らかな肌を持つ、生まれたばかりの少女。
少女は、生みの親である女神を見上げた。
「ここは、どこ？あなた、だあれ？」
生まれたばかりの幼子は、きょとんとした顔で女神を見つめる。
「ここは、私の家。私は、ブーボー。貴女の母ですよ」
ブーボーは優しく微笑み、我が子の誕生を祝った。
「貴女の名は…アイレス！勇気と武の女神、アイレス。よろしくね？アイレス」

「はーい！おかあさん！」

新たに誕生した女神、アイレスは母に向かって、無邪気にペコリと頷いたのだった。

＊

「この娘(こ)が貴公の娘か！なんと愛らしい…」

緑色の布を身に纏った戦(いくさ)の女神ゴガドルが、感嘆の声を上げた。

女神アイレスが、この世に生を受けてから幾つかの月日が経った、ある日の事。ここは、大神殿の庭園。その最も奥にある「噴水の広場」。

竜どもが神々を生きたまま貪り、魔神ガンジャが淫らな性行為に耽っていた、あの凄惨な光景は今はもう影も形も無い。

オリーブやイチジク、ブドウといった木々が植えられ、中央にある泉は清らかな水を湛えている。そして、水晶のような澄んだ水が常に吹き上げられ、陽光を浴びてキラキラとダイヤのように煌めいていた。

泉の回りで盃を片手に、何やら議論の真っ最中である壮年の神々。木陰で弁当を広げ、野掛け(ピクニック)に興じる、若い恋人同士の神々。竪琴を奏でながら歌を唄う、音楽と芸術の女神。聖なる山の大神殿は、かつての平穏を取り戻しつつあった。

「こんにちは、ゴガドルおばちゃん」

母とお揃いの空色の布を纏い、銀色の髪を馬の尾のように結わえた少女ーアイレスが、あどけない笑みを浮かべて戦の女神にペコリとお辞儀をした。

「お、おばちゃ…！？」

カルーナが、私はまだそのような歳ではない！とむくれながら言いかけたゴガドルの脇腹を突いた。

「そりゃーそうだよ。ちっちゃい子から見れば、大人はみんなおじちゃんおばちゃんだもの。私はカルーナおばちゃん！よろしくね！」

「よろしく、おばちゃん！」

「ははは、かわいいなー！」

幼いアイレスがカルーナに向かって、ぺこりとお辞儀をする。そのあまりにも可愛らしい仕草に、酒の女神は顔を綻ばせた。

「ねー、ゴガドルおばちゃん、あたし、『ぶ』のめがみなんだ。だからいっぱいいっぱいいっぱいつよくなって、いつかおばちゃんよりつよくなるんだ！」

「こ、これ！アイレス！」

彼女の母ブーボーが、慌てて娘を窘める。

「この子ったら、調子に乗って…」

「まあ、良いではないか！ははは！元気だな、アイレス殿は！よし、戦（いくさ）女神の私が稽古をつけてやろう。だが、私の稽古は少々厳しいぞ？貴公はついて来られるかな？」

ゴガドルが、小さな女神に屈託無く笑いかけた。

「気をつけなよー。このおばちゃんはね、脳みそも筋肉でできてるんだ。だから、アタマの鍛練まではしてくれないぞぉ？」

酒の女神がおどけながら、小さな女神に耳打ちをする。

「貴公こそ、アタマの中身がカルーナではないか！」

戦（いくさ）の女神が、酒の女神の後頭部を思い切りはたいた。

「やったな！？」

「やったが、それが如何致した！？」

ふたりの女神が面白おかしく顔を歪ませながら掴み合い、どつき合う。

まるで漫才のようなふたりのやり取りを見て、ブーボー親子は楽しげに笑った。

幼く純粋な女神アイレスは、３柱（はしら）の女神に大切に大切に育てられた。

アイレスはすくすくと育ち、強く美しく、正義感溢れる少女に成長していった。そして、さらに月日が流れた―。

逃亡　☆

死者達が集う、静寂なる地下の世界、冥府。

その暗闇に閉ざされた空間には、巨大なる魔神、「竜どもの母」ガンジャが囚われている。

魔神は世界を崩壊させかけた罪で、恐ろしい罰を科せられていた。

魔神に罰を下す者、その名は一。

「ご機嫌は如何ですか、おばさま？」

無数の骨によって拘束されているガンジャの元に、ふらりと現れた不浄の女神ディオス。

彼女は、数刻ほど魔神の元から姿を消していた。一体、何処へ行っていたというのか？

「可哀想な貴女様へのせめてもの慰みに、地上より貢ぎ物を持って参りました」

ディオスが魔神の目の前に差し出したのは、筍のように節くれ立った岩塊。

「大地の欠片です。フフ、懐かしいでしょう？」

ディオスは、岩塊の先端をペロリと舐めた。

「ウウウウウゥゥゥゥゥゥッ！？」

「欲しくて、堪らないのですね？」

コクコクと、必死に頷く魔神。ガンジャの秘裂がもの欲しそうにパクパクと蠢き、淫水をだらしなく溢れさせた。

「ああ…、美味しい…」

不浄の女神は魔神の顔を横目でチラリと見ながら、岩塊を咥え旨そうにしゃぶった。

もう2度と目合う事が出来ないと思っていた、愛しい大地。その欠片が、今ここにある。

┃欲しい！ほしい！ホシイ！

「ウウ…！フーッ！フーッッッ！！」

ガンジャは、必死で腰を振った。それで思い切り自分を犯してくれ！それは、彼女の魂の叫びだった。

「そんなにがっつかなくても、ちゃあんと差し上げますよ？さあ、存分にその下のお口で咥えてむしゃぶりついて丈夫なお子さんをたぁくさん、産んで下さいね？」

ニヤニヤと、品の無い笑みを浮かべるディオス。そして、不浄の女神は魔神を苦しめている前貼りに指を掛けた。

「…今日くらいは、これを外して差し上げますね？」

ガンジャの股間から、前貼りが外された。

「さあ、行きますよ？」

ディオスは、ガンジャの秘裂に岩塊の先端を、そっと押し当てた。

「ウッ！？」

魔神の身体が、ビクンと震える。

不浄の女神は岩塊でできた張り形を、魔神の膣内(なか)に一気に突き入れた。

「そぉら、ぬぽぬぽ、じゅぽじゅぽ！」

ディオスは、張り形でガンジャを激しく突いた。

魔神が、暗い地下世界に囚われの身となって以来、ずっとずっと恋い焦がれ絶望的ながらも待ち望んでいた快楽。

女にとって、最高の悦び。男と交わり、犯し犯される悦び。膣内(なか)を抉られ、擦り上げられる悦び。

ガンジャは、久方ぶりの性交を心おきなく愉しむ。

子宮の入り口を逞しい男根で突かれ、突き上げられる。膣壁を、グリグリと摩擦される。胎内をメチャクチャに掻き回される。

在りし日の快楽。
絶対的な王者として傍若無人に振る舞っていたあの頃の記憶が、一瞬思い出されては消えていく。
ガンジャの瞳が潤む。顔が紅潮し、鼻息が荒くなる。
「果てそうなのですね？ さあ、遠慮無く至高の快楽を味わって下さいね？」
デイオスが、より一層激しくガンジャを突く。
魔神の身体が強張り。
「ンフウゥゥゥゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥウゥウッ！？」
ガンジャは、果てた。魔神の膣がヒクヒクと収縮し。
ビュルッ！！ビュッ！！ビュウゥゥッ！！
岩塊の先端から熱い溶岩が放たれ、魔神の子宮に流れ込んでいった。
ものの数分もしないうちに、魔神の腹が膨れていく。子を、孕んだのだ。
ーこれで私のための、新たな軍勢が手に入る。
デイオスが、ほくそ笑んだその時だった。

「…うわっと！？」

自分と魔神の他には、もの言わぬ魂しかいないはずの空間から、響くはずの無い声が響いた。

年頃の、少女の声。

「誰です！？」

不浄の女神は、声がした方向に向かって叫んだ。ディオスの目の前に、ひとりの少女が転がり落ちてきた。

「いたた…、おシリ打っちゃった！」

少女は、呆気にとられて自分を見つめるディオスに気が付くと、臀部をさすりながらバツが悪そうに立ち上がった。

銀色の髪を馬の尾のように束ね、銀色の鎧を着た美少女。年の頃は人間でいうところの14〜5といったところか。身につけた鎧は、今日我々がビキニアーマーと呼んでいる露出の高いものだ。彼女の母はそんな破廉恥な格好などするな、と再三注意しているのだが、彼女自身は格好いいからという理由で愛用している。

白銀色の、母親譲りの美しい髪。まだ幼さの残る顔立ち。キリッとした形の良い眉と、空色をした切れ長の吊り目は、負けん気の強い彼女の性格をよく表している。への字に結んだ、ぷりっとした桃色の唇。ミルク色の滑らかな肌。背は、彼女の母よりも頭1つ分ほど高い。

彼女が身につけた銀色に光り輝く鎧は、彼女の最も守るべき場所

ー胸と腰回りをしっかりと覆っている。鎧の上からながらも、彼女の発育具合が良く分かる。母と、その友人達の愛を一身に受けて大きく豊かに育まれた、乳房と尻。戦の女神からの鍛練によって、強くしなやかに育まれた四肢、そして腹筋。

勇気と武の女神、アイレス。知恵と美徳の女神、ブーボーの娘だ。

アイレスは咳払いしてその場を取り繕うと、腰に手を当て、ディオスを指さした。

「普段、冥府にずーっと引きこもってるお前が、ノコノコ地上に出てきたからおかしいと思って後をつけてたんだ…！そしたら、やっぱり！何か良からぬ事を、企んでいたんだ！！」

「このような子ネズミを引き入れてしまうとは…。私とした事が…！」

デイオスが、若き女神を、錆色の濁った目で憎々しげに睨みつける。

「オルディィナ様の御前に引きずり出してやる！神妙にお縄につけ！この陰険腹黒変態ババア！！」

「…貴女に、何が解るというのです！？皆に祝福されながら生まれ、何も知らずにぬくぬくと育った貴女に…！？」

不浄の女神は生意気な小娘、アイレスへの憎悪で身体を震わせ、絞り出すような声で絶叫した。

「…フフフ。アハハハハ！」

デイオスが、不意に笑い出した。

「何が可笑しい！？」

「ご覧なさいな？」

ガンジャの腹が大きく膨れ上がっている。魔神は、呻き声を上げ続けている。

「竜が産まれる…！」

「えっ！？」

「ウグウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！？」

魔神の身体が、大きく仰け反った。

「ククク…。愚かな小娘よ…、竜どもに喰われてしまえ！」

デイオスが、アイレスに向かって愉快そうに叫んだ。

ゴボリ！

ガンジャの膣口が大きく広がり、何かが顔を覗かせる。

鱗に覆われたそれは、ゆっくりと魔神の産道からひり出された。

ドサッ。

「ギャアァァ！」

それは、下へと落ちて不気味な産声を上げた。

ドサ、ドサドサ…。

ガンジャの女性器から、次々とまるでトカゲのような子竜が産み落とされた。

「ギャア、ギャア！」

子竜達は、産声を上げながら見る見るうちに身体が大きくなり、成長していく。

そして、アイレスを取り囲んだ。

「こ、コイツら…」

武の女神は、自分と同じくらいの背丈にまで成長した怪物の群れを相手に身構えた。

「シャアアアアアア！！」

そのうちの1頭が、少女に飛びかかった。

「だぁッッ！！」

アイレスの拳が、子竜の腹に叩き込まれる。そのまま不運な生まれたての怪物の腹をぶち抜いた。怪物は甲高い断末魔を上げ、倒れ込むと小刻みに痙攣しやがて動かなくなった。

「グルルルルルル！」

「キシャァアアアアアアア！！」

子竜達が次々と若き女神に襲いかかるも、彼女は一撃のもとに次々と怪物どもを打ち倒していく。

「ま、まずい！このままでは…！！」

想像以上に腕っぷしの強い小娘に、ディオスは焦った。だが。

ー折角の手勢を失うのは惜しいですが、逃げるための時間稼ぎくらいにはなるでしょう。身を潜めてさらに力を蓄えれば、こんな小娘など…。

「フフフ、アハハ！アハハハハ！」

不浄の女神の身体が、すうっと宙へ浮き上がった。

「貴女は、その子達のお守りでもしていなさい！」

ディオスは、地上へ逃げ延びようとしていた。

「逃げるな、卑怯者！」

襲い来る子竜達を叩きのめしながら、アイレスが叫んだ。

「アハハハ！アハハハハハ！！」

不浄の女神は、地上を目指して上へ上へと昇っていき、そのまま姿が見えなくなった―。

冒険者達

「あった、あれだ！」

ここは森の奥深く。古代王国の遺跡が眠るとされる場所だった。

地図を片手に、遺跡の入り口らしき洞窟を発見した２人の少女。

２人とも、年の頃は１０代半ばのようだ。

１人は美しいブロンドの髪をお下げにした、青い瞳の少女。まるで、人形のように愛らしい顔をしている。緑色のローブを身に纏い、指揮棒のような小さい捻れた杖―魔法の杖を持っている。どうやら、魔術師のようだ。

もう１人はプラチナブロンドの髪をポニーテールに纏めた、剣士（ファイター）。なかなか気の強そうな顔をした、こちらも美少女だ。中古のくたびれた革製の鎧と盾、そしてこれまた中古の、使い古されたショートソードを携えている。

「間違いない。入り口の、あの羊の頭の紋章…。あれは、アルゴ王国の紋章だよ！」

金髪の少女が、洞窟の入り口を指差しながら言った。

「じゃ、イアソン王が隠したという財宝が、あそこに！？」

銀髪の少女が、金髪の少女を見ながら言った。

「行こう！」

金髪の少女が、心を弾ませながら銀髪の少女に言う。

「もちのろんよ！」

銀髪の少女は、力強く頷いた。

そして、2人の少女は洞窟の中に入って行った。

＊

光明の魔法により、杖の先端に灯した明かりを頼りに、2人は洞窟の奥へ奥へと進んでいく。銀髪の少女は剣を構え、辺りを用心深く見回しながら金髪の少女に付き添っている。どうやら、危険な生き物—例えば、熊のような—はいないようだ。魔法による光は、ふつうの松明よりも暗闇を明るく照らす。

「着いちゃった…」

以外にあっさりと、宝が眠っている場所であろう明らかに人の手によって掘られた「小部屋」にたどり着いた。

こういった、宝が隠された洞窟なり迷宮(ダンジョン)なりというのは大抵宝を守るための罠が仕掛けてあるものなのだが、それらしい物も全く無い。

「お宝、誰かに先に取られちゃったのかなあ…？」

銀髪の少女がしょんぼりとする。

「そんな事無いと思うよ？　ほら、あれ！」

金髪の少女が指差した先に、それはあった。

愛と美の女神、ウィナスの像。白く美しい大理石でできたそれは、一糸纏わぬ姿で台座の上に寝そべっている。そして、女性の象徴とされるイチジクの実を手にし、唇を寄せていた。古代の高名な彫刻家が彫り上げたのだろう。柔らかくしなやかな女神の美体を、ほぼ完璧に再現していた。その大きさは、仮に立ち上がれば少女達の身長の倍近くはあるだろう。かなり大きな像だった。

「…あのおばちゃんは、こんな下ぶくれじゃない」

銀髪の少女が、ボソッと呟いた。

「えっ！？」

金髪の少女が、怪訝そうな顔をする。

「あっ！？な、何でもない！」

「でさ、この台座のとこ！」

金髪の少女が指差す先―女神像の台座の下部に、青銅でできた小さな扉のような物が付けられている。

「開かないよ！」

銀髪の少女が、扉に手を掛ける。だが扉は、押しても引いてもびくともしない。

「きっと、魔法で鍵が掛かっているんだ！」

金髪の少女はしゃがみ込んで魔法の杖を青銅の扉にかざし、解錠の呪文を唱え始めた。

ゴリゴリゴリ…

岩石が擦れ合うような音がした。

「ねえ！」

銀髪の少女が、金髪の少女の肩を揺さぶった。

「何か変だよ！」

「今呪文唱えてる最中！邪魔しないで！」

「像が、こっち向いてる！」

「元からじゃないの？」

「動いてるんだよ！」

「柔らかい石でできてるんでしょ？」

「そんなわけ、無かろ！？」

銀髪の少女が叫んだ、その時だったー。

ガリガリガリ！ゴリゴリゴリ！

岩石が擦れ合う音を響かせながら、女神像が立ち上がった！

「「うわあ！？」」

ー動くはずの無いモノが動く。目の前にて起こるあり得ない現象に、２人の少女は抱き合いながら悲鳴を上げた。

石像はゆっくりと首を振り、２人の不届きな侵入者を交互に睨みつけた。そして、硬い石でできた大きな尻を少女達に向け、台座から降りだした。

—動く像（リビングスタチュー）。

ヒトの手により生み出された怪物。魔法により、「もの」である像に仮初めの命を与え、命令通り動くように仕立て上げた存在。本来、無から生命を生み出す事は、神々にしかできない行為である。ヒトがいくら真似しようとしても、これが限界であった。

ゴリゴリゴリ！

石でできた巨大な裸婦が、ギクシャクとしたぎこちない動きで２人の侵入者に手を伸ばす。

「あっち行け、シッシッ！」

主—イアソン王から宝の番を仰せつかっているウィナスの像は、

泥棒２人組を断じて逃がすまいと執拗に彼女達を追い回した。

「このやろーッ！！」

銀髪の少女が、女神像の尻に斬りつけた。カキン！と音がして、大事な剣の刃先がこぼれてしまった。

「ああっ！？」

剣士（ファイター）の少女が、欠けてしまった刃先を見つめる。

「高かったのに…」

ガリガリガリガリ！

女神像が、剣士（ファイター）の少女を振り返った。捕らえ、捻り上げようと銀髪の少女に掴みかかろうとする。

「…大いなる魔神の焔よ、我が敵を焼きつくせ！」

魔術師の少女が、石像の背後から攻撃魔法の呪文を唱えた。

杖の先から炎が迸（ほとばし）り、女神像を包み込んだ。しかし、石でできた怪物はびくともしない。

ゴリゴリゴリゴリ！

「きゃあああっ！？」

女神像が振り返り、金髪の少女の首根っこを掴むとそのまま持ち

上げた。

「ルーサ！？」

銀髪の少女が叫んだ。

—ルーサが危ない！！助けなきゃ！こんな奴、本当なら…でも…！…一体どうすればいい？考えるんだ！だって、あたしは…！

「そうだ！！」

銀髪の少女は目の前に転がっていた手頃な石を拾い、女神像に向かって投げつけた。

石は、カチン！という音と共に女神像に当たった。

女神像は金髪の少女を地面に落とし、銀髪の少女に振り返った。

「この石ころババア！悔しかったら、ここまでおいで！」

銀髪の少女が、自分の尻を叩いて石像を挑発した。そして、石の台座によじ登った。ウィナスの像も、少女を追いかけて台座の上に手をかけた。

「今だ！！」

石像が台座に完全に登りきり、立ち上がったのを見はらかった銀髪の少女は、女神像を力の限り押した。

「へあぁぁぁぁぁッツッ！！」

凄まじい力により押された女神像は、大きくよろめいた。そのままバランスを崩して落下し、硬い地面に激突した。そして、バラバラに砕けた。

「助かった…！」

銀髪の少女は台座から降りると、地面に倒れ込む金髪の少女＝ルーサに駆け寄った。

「大丈夫？」

剣士（ファイター）の少女が、魔術師の少女を抱き起こす。

「大丈夫じゃない…」

魔術師の少女が、ローブに付いた土埃を払い落としながら立ち上がった。

「それにしても…」

魔術師の少女が、剣士（ファイター）の少女に尋ねた。

「アイナ…。あなた、どうしてあんな事出来たの？あんなに重そうな像を…」

剣士（ファイター）の少女は、大きな重たい石像を軽々と押し倒した。それは、例え怪力自慢の大男でもなかなか出来る事では無い。

「そ、それは…」

銀髪の少女＝アイナは少し俯くと、顔を上げて一気にまくし立てた。

「あれだよ、あれ！　ほら、火事場のクソ力ってやつ！！　それよりさ、早く見ようよ、お宝！！」

「うん…。そうだね！」

2人の少女は、目を輝かせた。もう、魔法の解錠は済んでいるはずだ。

「よし、いっせーの！」

2人は、希望に胸を膨らませて扉に手を掛けた。金属が軋む音を立てながら、扉が開いた。

そしてその中に、それらはあった—。

「…なに、これ？」

大理石でできた隠し場所の中に、厳重に保管されていた品の数々。

それは、陶製の板だった。それが、何枚も。中にあったのは、それだけだった。そして全ての板に、あられもない姿をした女性が描かれていたのだった。

「…えっちな、絵だね」

ルーサが、呟いた。

「うん。いかがわしい、絵だ…」

アイナが、頷いた。

2人は、がっくりと肩を落とした。

古代の、それも王秘蔵の春画。現代の考古学からすればまたとない大発見なのだろうが、彼女達の—この時代の人々の価値観は、まだそこまで進んでいなかったのだ。

「確かに、『お宝』には違いないんだろうけどさあ…」

2人の若い冒険者は脱力し、地面にへたりこんだのだった—。

アイナとルーサ

「あはは！　あはははははは！」

女のけたたましい笑い声が、店内に響き渡る。

ここは聖レイハル王国の王都、シュニア。

笑い声の主は、都の下町にこの大衆食堂兼宿屋「うわばみ亭」を構える若女将、カレンだった。

＊

神々と、魔神及び竜達との戦争から長い長い年月が経ち、世界は今日我々が「中世」と呼んでいる時代を迎えていた。人々は、万物から神々の力の極一端を引き出し利用する術ー魔法を生み出し、大いに栄えた。

この世界に生きるヒトは、人間だけでは無い。エルフ、オーク、ドワーフ、ゴブリンといった様々なヒトが現れ、繁栄を謳歌し、時に手を取り合い、時にいがみ合っていた。

そして、人間の国であるここ聖レイハル王国は、人間の王であるオブライエン５世が治めていた。

＊

「ウィナス様に追い回されて？命からがら見つけたお宝が？…古

代のエロ本！あはは！あーっはっは！！」

蜂蜜色の髪を頭のてっぺんで結わえた、エプロン姿の若干ふくよかな若女将が腹を抱えて笑う。

「あはは、じゃないよ…」

ポニーテールをした銀髪の少女、アイナがむくれてカレンを恨めしそうに見た。

「まーまー、そう腐らずに！」

「おかげで、今日の夕飯代で一文無しだよ…」

アイナが溜め息をつく。

「今夜の宿、どうしよう…」

金髪お下げの少女、ルーサが泣きそうな声で呟いた。

「橋の下にでも、泊まる？」

アイナが、テーブルの上に顔を伏せながら呟く。

すると、２人の前に金貨が数枚入った袋が置かれた。

「…女将よう、こいつで足りるか？」

アイナ達の後ろに、３人の男達が立っていた。

1人は灰色の肌を持ち、獣のような大きな耳を持つ小柄な種族、ゴブリン。残りの2人は緑色の肌に口からイノシシのような牙を生やし、大柄な体格をした種族、オークだった。3人とも、それぞれの国から出稼ぎに来ている労働者だった。

「おっちゃん達は確か…」

「いつも、このお店に来てる…」

まさか、赤の他人が宿代を肩替わりしてくれるなんて…！！アイナとルーサは、驚いた表情で振り返り、3人の男達を見た。

「お嬢ちゃん達だって、ここの常連だろ？」

2人の少女に向かって優しく微笑みながら、ゴブリンの男が言った。

「この金は、何だい？」

カレンは、男達に尋ねた。

「この子達の、今夜の宿代だよ。俺達3人で、出し合ったんだ。せめて今夜だけでもって」

スキンヘッドのオークが、言った。

「だってよう、あんまりじゃねえかよ！こんな小さな女の子2人が、橋の下で野宿だなんてよう…！」

モヒカン頭のオークが、涙ぐむ。厳つい見かけによらず、涙もろ

い性格の人物なのだろう。

「おっちゃん達…」

「ありがとう…」

2人の少女は笑顔を浮かべつつ、申し訳なさそうに男達に礼を述べた。

「…悪いけど、このお金は受け取れないよ？なぜなら、今夜は私が奢るからさ！この子達の夕飯も、宿も！」

カレンが、ゴメスの肩を叩きながら笑顔で言った。

「えっ！？いいの！？」

「ほんとに！？」

「もちのろん！」

驚く2人の少女に向かって、若女将が胸を張る。

「だからさ、このお金はあんた達の仕送りの足しにでもしな！」

カレンは、袋を男達に返した。

「いいのか！？女将！」

「この2人は、私の娘みたいなものだからねえ！」

「…女将、すまねえ！」

３人の男達は、カレンに手を合わせた。

「良かったな！お嬢ちゃん達！」

「おっちゃん達、ありがとう！」

２人の少女が？３人の男達に手を振る。男達はその様子を微笑ましく眺めながら、アイナ達から少し離れた席へと着いた。

「ありがとうございます！あなた様は、天より遣わされた女神様だ！」

「いよっ！救いの女神様！！」

ルーサとアイナは先程の男達の身振りを面白おかしく真似しながら、手を合わせてカレンを拝んだ。

「いやー、…それほどでもあるけどね！」

「え！？」

「…は？」

２人の頭上にクエスチョンマークが浮かんだ。

「いやいや、何でもない！女神様だなんて、とんでもないよ！」

カレンが、２人の肩を叩いた。

「また明日から、お金になりそうな仕事を見つければいいさ！」

カレンが、朗らかに笑った。

そして。

「ちょっと待っててね！」

カレンが厨房に引っ込んだ。

＊

アイナとルーサ。２人は、駆け出しの冒険者である。

年齢は、共に１５歳。主に、このシュニアを拠点に活動する、やんちゃな銀髪の剣士（ファイター）アイナと、金髪をしたおっとり系の魔術師ルーサの凸凹コンビ。

２人とも新人としてはそれなりに実力はあるのだが、やる気が必要以上に空回りしてしまうせいかしばしば依頼を失敗させてしまう。おかげで万年金欠状態であり、彼女達が行きつける「うわばみ亭」の女将、カレンの懇意でどうにか食いつないでいるのであった。

＊

「はい！できたよー！」

熱々の料理が、２人の冒険者の目の前に運ばれてきた。

けっして豪華ではないが、若女将の愛情が籠もった温かい家庭料理の数々。

「はい、いつもの！」

2人の目の前に、木いちごのジュースが満たされた陶製のジョッキが置かれた。

「ねえ、エール頂戴よ！」

アイナが、カレンに酒をねだった。

「あんた達、まだ子どもだろ？」

「一杯くらいいいいじゃん！」

「ダメダメ、お酒は大人になってから！」

カレンは、アイナを窘めた。

ーホントは、ここにいる中ではあたしが、1番年上なのに……。

アイナは、渋々木いちごジュースを口にした。

ルーサが、肉汁たっぷりの焼いた腸詰め(ヴルスト)を頬ばる。

「おいしー！！」

「ホント。おばちゃんの料理、どうしてこんなに美味しいんだろ

？」

アイナが、野菜と豚の塩漬け肉がたっぷり入ったシチューを口に運びながら言った。

「おばちゃんって…。私ゃ、まだ２０代だよ！ま、いいけどさ」

カレンが、口を尖らせた。

「何か、特別な調味料を使ってるの？」

ルーサが、カレンに尋ねた。

「もちのろん！何てったって隠し味に秘伝の…、おっと、ここから先は企業秘密！」

「教えてくれたっていいじゃん、ケチ！」

＊

アイナ達が盛り上がっている傍らで、先ほどの3人の男達が眉間に皺を寄せて何やら噂話をしていた。

「おい、聞いたかよ？」

ゴブリンの男が、ジョッキに入ったエールをあおりながら言った。

「行方知れずになったクルールの王女様、まだ見つからないんだってよ？」

「エルフどもの国のお家騒動か…」
スキンヘッドのオークが首をすくめ、身震いしながら言った。
「肉屋の看板娘が王様に見初められて、王妃になったんだろ？店主の、兄貴の方はそれが縁で将軍様になったんだって？」
「肉屋から、将軍かあ…」
もう1人の、モヒカン頭のオークが羨ましそうに呟いた。
「俺の姉貴も、どっかの国の王様に見初められねえかな…」
「そりゃお前、天地がひっくり返ったって無理ってもんだ。お前の姉君、弟のお前よりごついじゃねえか！」
スキンヘッドのオークが、モヒカンのオークを指差しながら言った。
「だよなあ…」
モヒカンのオークは、ため息をつきながら、エールを啜った。
「でよ、その後妻の王妃が王子を生んだんだが、王妃殿は自分の息子がお世継ぎになるよう、画策してるんだと」
「さすがは、地獄耳の大将！耳がデカいのは伊達じゃねえなあ！」
モヒカンのオークが、感心しながらゴブリンの男に向かって言った。

「その、マルメスって女、見てくれは良いが相当な腹黒らしい。王女様、家出って事になってるけど、裏でグサッ！てやられちまったんじゃねえのかな…？あるいは…。いや、何でもねえ！」

ゴブリンの男が、楽しく語り合うルーサ達を見ながら言っうと、ジョッキのエールを一気にあおった。

「いずれはあの王様も…、って噂だぜ…」

ゴブリンの男が続けて、声をひそめながら2人のオークに言った。

「おいおい！そりゃあほんとかよ大将！？」

モヒカンのオークが、大きな声でゴブリンの男に尋ねた。

「あくまでも、噂だけどな…」

ゴブリンの男は、声がデカい！！とモヒカンのオークを制しながら呟いた。

「それにしてもよ」

スキンヘッドのオークが、エールを1口飲んで溜め息をついた。

「いくらべっぴんったって、中身が腐ってちゃあな…」

「くわばら、くわばら！」

3人の男達はお互いの顔を見合わせ、思わず身震いしたのだった。

＊

「ゆくゆくは、みんなに尊敬されるような大冒険者になりたいなあ！」

ルーサの頭の中に浮かぶ、名だたる冒険者達。「竜を屠る者（ドラゴンスレイヤー）」の異名を持つ、古の大魔導士ゲイレン。「破壊王（デストロイヤー）」コナン、「剣聖」マッドマーティガン、そして「夢想（むそう）の英雄」バスチアンー。

「ねえ！なろうよ、一緒に！私達ならできるって！」

ルーサが、心を躍らせながらアイナに言う。

「ダメだよ…」

アイナが俯きながら、呟いた。

「あたしには、『使命』があるから…」

「えっ？」

「いや、何でもないよ！ほんとに！」

アイナは、自身の呟きに怪訝な表情を浮かべるルーサを慌てて誤魔化した。

「…それにしてもさ！」

アイナが、ドン！とテーブルを叩いた。

「どうしてヒトは、あんな穢れた事が好きなんだ！！男と女で穢れた事して、あんな穢れた絵や彫刻こしらえたりして！！」

アイナの脳裏に、昼間の出来事が思い浮かぶ。わざわざ裸に剥いた女神の彫刻。そして、わざわざ厳重に隠されていたつまらない「お宝」の数々—。

「まるで、自分がヒトじゃないみたいだねぇ？」

カレンの発言に、アイナは言葉を詰まらせた。

「だ、だって…」

カレンは、アイナに諭すように言った。

「そりゃあ、そうだよ。仕方無いよ。とても気持ちがいい事だから。皆、気持ちいい事が大好きだからねぇ」

若女将は、さらに言葉を続ける。

「でもさ、それは子を成して、命を繋いでいく事でもあるのさ。とても大切な事なんだ。あんた達だって、そうやって生まれてきたんだろう？」

アイナは、黙って俯いた。

「ヒトだけじゃない。それもこれも、全ての生きとし生けるものの性(サガ)さ」

「…そういうもん？」

アイナは、納得できない様子でカレンに尋ねる。

「そういうもん！」

いずれ、あんたにも解る時が来るさ！と、若女将は銀髪の少女に答えた。

「さあさ、もう時間だよ？今日はこれで店仕舞いだ！あんた達も、明日に備えて床にお付き！」

カレンに促され、2人の若い冒険者は「うわばみ亭」の2階―今夜の宿へと向かったのだった。

＊

「あなた。お食事が進んでいませんね？」

「ああ…」

大きなテーブルにて向かい合い、晩餐の最中である一組の男女。

「食欲が無いんだ…」

豪華な一室だった。天井からはシャンデリアが下がり、大きな部屋を明るく照らし出している。壁には何枚もの名画が飾られ、大きな暖炉の上には、この時代では非常に珍しく、また大変高価な時間を計る機械＝時計―それも、金銀や宝石で飾られた豪華なもの―が置かれていた。

高価な材木で作られた椅子とテーブル。そのテーブルの上には絹で織られた純白のテーブルクロスが敷かれ、料理が盛られた金の皿が何枚も並べられていた。

海老のビスクスープや、クレソンを添えた仔牛肉のソテーなどの豪華な料理の数々。

だが男性の方は、ほとんど口をつけていない。

頭に金の額冠を頂く、まだ幼い少年の面影を残す男性。金色の美しい髪が肩まで届き、先が尖った特徴的な耳を持つ。まるでサファイアのように、青く済んだ目。そして、白く滑らかな肌。彼は、エルフだった。

「せっかくのお料理が、冷めてしまうわ」

「ああ…」

エルフの男性が、心ここにあらずといった様子でエルフの女性に頷く。

「…あの、放蕩娘の事ですか？」

彼の向かいに座する、エルフの女性が静々と料理を食しながら言った。

「あの娘(こ)ときたら、本当に。家出なんて…」

銀の額冠を頂いた、エルフの女性。その顔は、美形揃いのエルフ

達の中でも、際だって整っていた。まるで、女神がこの世に顕現したかのようなー。

「心配無いわ。すぐに見つかります」

エルフの女性は、表情一つ変えずにエルフの男性に言った。

「神の御加護によって」

エルフの男性は向かいに座す女性の言葉を、上の空で聞いている。

「神は常に、私達を見守っていて下さるー」

「…最近、どうも気分が優れぬ」

エルフの男性は、手にしていた銀製のナイフとフォークをテーブルの上に置いた。

「…私は、少し休む。しばらく、1人にしてほしい」

「疲れが溜まっていらっしゃるのね？あまり、無理をなさらぬよう…」

エルフの女性は、無表情で料理を口に運びながら言った。

「ああ…」

エルフの男性はゆっくりと席を立ち、寝室へと向かった。

＊

エルフの男性は、寝室のバルコニーに立って外を眺めていた。
美しい星空。その下には、空の星々と同じように、街の灯りが輝いている。街の奥には、済んだ水を湛えた、小さな美しい湖。今は夜の闇により黒々としているが、日が昇れば青い空を鮮やかに映し出す。湖の周囲は、豊かな森が広がっているー。

ここはエルフ達の国、クルール。遠く離れた北西に位置する、エルフ達の大国から分かれて新たに興された国である。小国ではあるが、緑豊かな自然を国土に持つ美しい国である。魔法産業が盛んであり、王都はここグレイブだ。

エルフの男性は、この国を治める元首、コルウィン王その人だった。

エルフ達は、ヒトの中でも随一の長寿を誇る種族である。コルウィン王は幼い見た目に反して、齢８０を迎えていた。

「近頃、体調が優れぬ…」

コルウィン王は、夜空を眺めながらもの思いに耽っていた。

ー一目惚れしてしまったというのもあるが、娘には新しい母親が必要だと思った。

彼の娘の母、つまり彼の妻である前王妃は、彼の娘がまだ幼い頃に病没してしまっていた。

ー今の妻、マルメスを娘に紹介した時、彼女は激しく拒絶した。

私のお母さんは1人だけ！と言った。その人は何か冷たい感じがする、お母さんになれない人だ！と言った。なのに、私は耳を貸そうとはしなかった—。

「…だから、君は家を飛び出してしまったのかい？」

コルウィン王は、満天の星々を見ながら呟いた。

「父さんが悪かった…！君は今どこにいて、何をしているんだい？…帰ってきておくれ、サルノ…」

王は、この星空の下にいるであろう娘の身を案じたのだった—。

降臨

翌日の昼。２人はとある岩山の中腹にいた。

ーこんなことしてる場合じゃ無いのに、何やってんだろ、あたし…。

己の「使命」を果たすために、そしてそれを成し遂げる為の情報を、少しでも得るために自分は冒険者となった。だが、この娘（こ）に半ば強引にパーティーを組もうと誘われ、そのままズルズルとここまで来てしまった。そして、いつの間にか一緒にこの状況を楽しんでしまってる自分がいた。

ーこのルーサという娘（こ）と一緒にいると、すごく楽しい。たとえ無事「使命」を果たしたとしても、ルーサとお別れしたくない…。そんなの、絶対にいやだ…！！

アイナは複雑な心境の中、ルーサの後に続いて岩と石ころだらけの山道を進んでいく。

ここは、パペトン山。王都シュニアから徒歩でだいたい半日ほど。朝早くに「うわばみ亭」を出発した彼女達は、途中休息を挟みつつこの岩山へとたどり着いたのだった。一見、何の変哲もないただの岩山ではある。だが、この山にはある「言い伝え」があったー。

「昔々、女神のウィナス様がこの山に野掛け（ピクニック）に来た時に、黄金でできた髪留め（ヘアピン）を落としちゃったんだって。でも、ウィナス様はそのまま帰っちゃって…。それでその髪留め（ヘアピン）は、今でもこの山のどこか

に落ちてるって言い伝えが……！」

ルーサが、羊皮紙でできた地図を見ながら言った。

小さな髪留めも、巨大な身体を持つ巨神（タイタン）が使用するものとなると、かなりの大きさとなる。つまりは髪留めの形をした大きな金塊が、この山のどこかに落ちている、というのだ。

「……でも、本当の話かどうかわからないんだろ？」

アイナが、俯きながらルーサに尋ねる。

「でも伝説の、イアソン王のお宝だって本当にあったんだし……」

……あっちは、えっちな絵だったけど。金髪の少女は、肩を落としながら小さく呟いた。

「だから、もしかしたらこの山のお宝だって……！それに、どんなお宝か、言い伝えにも残ってるし、だから……！」

「先に、誰かに拾われちゃったかも！」

銀髪の少女が、何やら必死になりながらルーサに言う。

「見つけたっていう話は、未だに無いのよ。だからきっと、この山のどこかにまだ落ちてるかも……！！」

ーイアソン王は、もうとっくの昔にいなくなっている。だから、イアソン王のものだったお宝は、もう誰のものでもない。でも、ウィナスおばちゃんは元気で聖なる山にいる。落とし物とはいえ、持

ち主がいる物を横取りしようとするのは、泥棒だ！！そんなバカなこと、絶対に止めさせないと…！！

「…それは、泥棒というんじゃないかな？」

アイナが呟いた。

「そうだよ、泥棒だよ！ダメだよ！そんなの！」

アイナは、ルーサの両肩を掴んでガクガクと揺すった。

「ど、どうしたの！？」

「ダメだよ！だってそれは、…女神の物だろ！？」

「どうして？もう神様達、とっくの昔にみんな自分達のところに帰っちゃったんでしょ？だから、もう誰の物でも…」

「まだいるよ！！」

アイナは真剣な眼差しで、ルーサの目を真っ直ぐ見つめながら叫んだ。

＊

「…本当に、この山の、あの谷底に眠っているというのですか？」

「ああ、『御神託』によればそうらしい…」

２人の遥か頭上。切り立った崖の上で、黒い覆面を着けた２人の

男達が何やら相談事をしていた。

「しかし、大丈夫なのですか？『あれ』を叩き起こしてしまったら、我が国にも甚大な被害が…」

男のうちの1人が、彼の上司と思しきもう1人の男に、心配そうに尋ねた。

「『御加護があるから我が国には被害が及ばない』、との事だ」

上司と思しき男は、部下と思しき男に淡々と告げた。

黒い覆面に黒いローブを纏った、魔術師と思しき男達。

「あの娘が、本当に…」

部下と思しき男が、信じられないといった様子で崖の下をにいる少女達を見下ろす。

「『御神託』によれば『間違いない』、と」

「『御神託』、ですか…」

「そうだ」

「この先には、レイハルがありますが…」

「人間どもの国がどうなろうと、知った事ではない…！」

「は…はぁ」

「やるぞ…！」

上司と思しき覆面の男は、部下と思しき覆面の男に「それ」をやるように促す。何のためらいも見せず、まずは上司の男が、続いて恐る恐る部下の男が、自分達の足元にある巨岩に向けて、魔法の杖をかざした—。

＊

「落石だ！」

突如、アイナとルーサの遥か頭上から、家ほどの大きさもある巨大な岩が転がり落ちてきた。

「危ない！！」

アイナがルーサを押し倒し、上に覆い被さって庇った。

ゴロゴロゴロ！

岩は2人の脇を通り抜け、谷底へと転がり落ちていった。

そして谷底に突き出た、巨大な尖った岩にぶつかって止まった。

「グルルル…！」

動物が唸るような声がした。

「え？何！？」

２人の少女は、驚いて辺りを見回す。

ゴゴゴゴゴゴ…！

地響きが起こった。

「え！？地震！？」

谷底の、尖った巨岩が周りの岩を押しのけ地中からせり出す。

そして―。

「ピギャアァァゴボオオオォォォォ！！」

耳をつんざくような咆哮を上げて、「それ」が地中から顔を出した。

「竜だ！！」

谷底に眠っていた竜が、落石によって目を覚ましてしまった。巨大な角を持つ、巨大な竜。尖った巨岩は、巨竜の角だったのだ…！

「ピヤァァァゴォォォ！」

竜は谷底に転がる岩々の間から、ゆっくりと這い出した！

体長およそ２４６フィート（約７５メートル）。身体の割に小さな、毒蛇のような三角形の頭。その頭には不釣り合いな大きさの、頭頂から生えた漆黒の巨大な一本角。後頭部からはまるで盾のよう

な、骨でできた堅牢なひだ飾りを生やし、下顎からはイノシシのような鋭い牙が2本、ニョッキリと飛び出ている。

全身は金色の、ゴツゴツした岩石のような鱗に覆われている。まるで、熊のように巨大な上半身と前肢と、それより若干華奢な後肢と下半身。そして尖った硬い鱗に覆われた、115フィート（約35メートル）ほどの長さの、体格に対してやや短めの太い尾ー。

「そんな！何十年も、ずっと姿を現していなかったのに…！！」

ルーサが、掠れた声で呟いた。

「ピギャア！」

一角竜は谷の上にいるアイナとルーサを見つけると、谷を登り始めた。

「逃げなきゃ！！」

アイナが、ルーサの腕を掴んで走り出した。

「でも、お宝が…！」

アイナは、ルーサの言葉を無視して、夢中で足場の悪い岩場を駆け下りていく。

「あっ！？」

ルーサが、大きな石に躓いて転んだ。

「ピギャァァゴォォ！！」

竜は、もう目の前にまで迫っている。

ー未だ「使命」を果たせずにいるが、仕方ない…。今こそ、「力」を使おう！！

アイナは、近くの岩陰に身を隠した。そして岩陰から、白い眩い光が漏れ出したー。

＊

巨大な竜の顔が、爛々と輝く金色の双眸が、鋭い牙がズラリと並んだ口が、ルーサの眼前に迫る。

ーもう、ダメだ！！

魔術師の少女は、地面に身を伏せて目を固く閉じた。

その時だった。

「待てぇぇぇぇぇぇっ！！」

竜とは別のもう1つの、小山のような巨大な影が現れ、竜の目の前に立ち塞がった。

ルーサは、ゆっくりと顔を上げた。そして、信じられないものを見た。

それは、1柱(はしら)の巨神(タイタン)だった。

神話でしかその存在を知る事ができなかった巨神(タイタン)が今目の前に現れ、竜と戦おうとしている！

まだ幼さの残る顔立ちをした、少女の巨神(タイタン)。煌めくような美しい銀髪をポニーテールに束ね、きりっとした形の良い眉と切れ長の吊り目を持つ。滑らかなミルク色の肌も露わにする白銀のビキニアーマーを身につけている。年齢の割には、実に成長著しいバストとヒップ。鍛えられ、引き締まった腹回り。健康的な色気を放つ、美少女神。

勇気と武の女神、アイレス。

魔神ガンジャに秘かに子竜を産ませ、そして地上へと逃げおおせた不浄の女神ディオスを追って、ただひとり地上(ここ)へとやって来たのだ。

「逃げろ！」

身の丈８０フィート（約２４．４メートル）もある女神は、呆然として自分を見つめている金髪の少女に叫んだ。

「早く！」

ルーサは、自分の十数倍もある女神の巨体を見上げながらコクコクと頷いた。そして、よろめきながらどうにか立ち上がり、何度も転びながら山を駆け下りていった。

ルーサが無事逃げた事を確認すると、アイレスは竜の方を向き、身構えた。

「行くぞッ！！」

アイレスは、自分の倍以上もある巨躯を持つ竜に果敢にも向かっていった。

「ピギャァァァゴォォォ！！」

2つの巨体が、地響きを立ててぶつかる。

巨神（タイタン）と巨竜の戦い！

「ンンッッ！ディヤあぁぁぁぁッ！！」

アイレスが、一角竜の巨体を軽々と持ち上げた。可憐な外見に見合わず、凄まじい怪力だ。

「てェエエエエい！！」

白銀の女神はそのまま、巨竜を地面へと叩きつけた。

ズズウゥゥゥゥン！！

その凄まじい衝撃に、大地が震える。

「ピギャアゴォォ…」

一角竜が土埃をあげ、よろめきながら身体を起こした。

「であぁぁぁぁッ！！」

アイレスは、ようやく身体を起こした竜の首を掴んで投げた。

ドズウゥゥゥゥンッ！！

巨竜は、轟音と地響きと共に再び大地に叩きつけられた。

「ピヤァァアゴォォ！！」

一角竜は地面を転がりながら素早く体勢を立て直すと、巨神（タイタン）に向かって大きく口を開けた。

シュゴォーーーーッッ！！

真っ赤な竜の口から、紅く燃え盛る火焔弾が放たれた。灼熱の火の玉は、アイレスめがけて真っ直ぐ飛んでいく。

「くっ…！こんな火の玉！」

白銀の巨神（タイタン）は、目の前で両腕を交差させて、一角竜の火球を防いだ。

「ピギャアアアア！！」

一角竜がまるで熊のように立ち上がった。１４８フィート（約４５メートル）もの高さを誇る巨体が、白銀の女神に迫る。

「ピヤァァアゴォォオォ！！」

竜がアイレスめがけて、鋭い爪の生えた巨大な腕を振り下ろす。

「へあぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

白銀の女神は側転で素早くこれをかわすと、竜の脇へと回った。

「だァッ！！」

アイレスはその鍛え上げられた脚で、竜の巨大な脇腹に強烈な回し蹴りをお見舞いした。

「グワオォォオ！？」

白銀の女神の一撃をもろに食らった一角竜は、大地を揺るがしながら地面へと倒れた。

ガラガラガラガラ…！

巨神（タイタン）と巨竜がぶつかり合う度に生じる凄まじい衝撃を溜め込み続けていた山肌の一部が、耐えきれずについに崩れた。土砂と共に一抱えもある大岩が、山の斜面を転がり落ちていく。

「へぁあッ！！」

アイレスがさらなる追撃を与えようと、地響きを立てながら竜に駆け寄っていく。

まさにその時ー。

「ルーサ！？何やってんだ！？」

倒れ伏した巨大な敵に歩み寄ろうとした、巨神(タイタン)の目に映ったもの。
それは、先ほど逃がしたはずの金髪の、魔術師の少女だった。無事逃げおおせたはずが、再びこの戦場へと戻ってきてしまったのだ。
背後を転がり落ちる岩に驚き、大地からの振動で転倒しそうになりながらも、必死で誰かを呼んでいる。きっと、急に行方を眩ませた相棒を、探しているに違いない。

「アイナぁ！どこへ行っちゃったの！？アイナぁぁあああ！？」

「ダメだ！！ルーサ！来ちゃいけな…！！」

白銀の女神は、小さな小さな少女に叫ぼうとした。

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っっっっっ！？」

アイレスが突然、悲痛な叫び声を上げた。

竜の尾が跳ね上がり、女神の股間を打ち据えたのだ。巨神(タイタン)に生じた一瞬の隙を突いた、巨竜の反撃であった。

白銀色のプレートを通して、その下の柔肉に凄まじい衝撃が走る。

「ううう…！」

アイレスは、思わず股間を押さえてうずくまった。

すかさず尾の一撃が、アイレスの頬を直撃する。

「ぶふっ！？」

アイレスは跳ね飛ばされ、大地の上にうつ伏せに転がった。
無防備になった女神の背中を、太い竜の尾に何度も打ち据えられる。
アイレスの背には血がにじみ、幾つもの痣が浮かんでいた。
「う゛あ…！うううッ…！？」
アイレスはどうにかして立ち上がろうと腰を持ち上げた。
その瞬間、竜の尾がアイレスの股の間をくぐり抜けた。
「…あッ！？」
アイレスが、腰をビクンと震わせた。
カカカカカ…！
尖った硬い鱗が金属音を立てながら、プレート越しにアイレスの割れ目を、何度もなぞり上げる。
「あ…、あ…、ああ…！」
硬い金属の板を通して、アイレスの秘裂が震動で揺さぶられる。
—な、なに、これ…！？
純潔の誓いを立てているブーボーの娘。初（うぶ）な幼き女神アイレスは、生まれて初めて味わう、股間から湧き上がる感覚に戸惑っていた。

それは、くすぐったいようなムズムズするような、不思議な感覚だった。それが、堪らなく心地よい。

―き、きもちいい…！？

アイレスはいつしかその感覚に酔いしれ、甘い溜め息を漏らし始めていた。女神の顔が紅潮し、恍惚に染まっていく。

「グルルルルル…」

一角竜は唸り声を上げながら眼を細めて、アイレスを一瞥した。

―一人前に、感じておるのか？このマセ餓鬼（ガキ）めが！

言葉は発せずとも、明らかにそう言っていた。

「グワオォォォォ…」

―この小娘、顔つきといい髪の色といい確かによく似てはいるが…。これがあの女を討ち果たした、あのチビ助の娘だと…？真（まこと）ならば、彼奴（あやつ）も堕ちたものよ。こんな軟弱な、不甲斐ない餓鬼（ガキ）が実の娘とは…！

巨大なる一角竜は愉快そうに唸りながら、その強靭な尾で白銀の女神を弄び、辱しめ続けるのだった―。

＊

「ああっ！？」

後ろを振り返ったルーサは、驚愕の声を上げた。

女神アイレスが、竜に痛めつけられている。

「あのままじゃ、負けちゃう！！」

ー私を助けるために、竜と戦う女神様。助けてもらったのに、何もできないのか…？

「今度は、私が助けないと…！」

ーどうすればいい？どうすれば…！

ルーサの頭に1つの秘策が浮かんだ。

「…天空を統べる偉大なる女王の光よ、灯り給え！！」

ルーサが、呪文を唱えた。杖の先に、眩い光が灯る。

「飛んでいけ！」

魔法の杖の先に生じた光明の女神の光は、アイレスをいたぶる巨竜の眼を目がけて飛んでいった。

「ピギャアア！？」

光明の魔法による目潰しを食らった竜は、眼を押さえ、顔を覆った。

「女神様、今よっ！！」

ーありがとう、ルーサ…！！

アイレスは小さな援軍に向かって大きく頷くと、渾身の力を振り絞ってよろよろと立ち上がった。

「はあああああああああッ！！」

硬く握られたアイレスの拳に、白い光が集中していく。

「烈光の拳」。全身の力を拳に集中させて相手に叩き込む、アイレスの奥の手だ。

「食らえェエエエエエエッ！！」

女神は、光り輝く拳を思い切り竜の顔面に叩き込んだ。

拳に蓄えられていた巨神(タイタン)の力が一気に炸裂し、凄まじい爆発が起こった。

「やった！！」

白銀の女神は、勝利を確信した。だが。

「グワオォォォ…！！」

ーやってくれたな…！！

竜がわなわなと巨体を震わせ、唸り声を発しながらゆっくりと顔

を上げる。

「そ、そんな…！？」

女神の渾身の一撃を受けてもなお、竜は生きていた。下顎から生えた、２本の長い牙のうちの１本が折れ飛んだだけだった。

「ピギャァァァァァァァゴボオォォォォォォォォォ！！」

―この糞餓鬼(くそガキ)め！！可哀想(かわいそう)だからと手加減してやれば、図に乗りおって！！そっちの虫ケラ共々、捻り潰してくれるわ！！

竜が怒り狂い、凄まじい咆哮を上げた。

アイレスにはもう、戦う力は残されていない。

「あ…あ…」

白銀の女神は、震えながらへたり込んだ。

竜が、アイレスに飛びかかろうとしたその時。

―待テ！！

彼の頭の中に、何者かの声が響いた。

―コノママ倒シテシマッテハ、ツマラヌ…。モウ少シダケ、泳ガセテオケ！

「…ピヤアァゴォ！」

ー『主殿（あるじ）』の御命令だ…。『貴様らを見逃せ』と。餓鬼（ガキ）ども、命拾いしたな！

一角竜は悔しそうに吠えると、ふたりに背を向けてそのまま地中へと潜って行った。

＊

ーあいつに…負けた…！！

アイレスは俯き、あまりの悔しさに唇を噛み締める。切れ長の美しい眼から、涙が滲んだ。

ー誰よりも強くなるために、いっぱいいいっぱい鍛えたのに！？

一角竜が完全に姿を消したのを見届けると、女神の身体は白い光に包まれ、そして消えていったー。

＊

「…アイナ！？」

魔術師の少女ルーサは、放心状態で地べたにへたり込む相棒ー銀髪の少女剣士（ファイター）アイナを見つけると、急いで駆け寄った。

「よかった…！！」

ルーサは泣きながら、アイナを抱き締めた。

「アイナのバカぁ……！！……どうして急にいなくなっちゃったの！？てっきり、竜に食べられちゃったかと……！！」

「……ごめん、ルーサ。うん……。ホント、バカだよね、あたし……」

銀髪の少女は、俯きながら小さく呟いた。

「……戻ろう？ルーサ……。早くみんなに、知らせないと……」

アイナは抱きつくルーサを制すると、よろよろと力なく立ち上がったのだったー。

自涜　☆

「お帰り！大丈夫か！？アイナちゃん、ルーサちゃん！」

「うわばみ亭」店内にて。

パペトン山から命からがら帰還した２人を、カレンと常連の男達３人が温かく迎えた。

「あんた達、こんなに怪我しちゃって！今、手当てするからね！」

カレンが、救急箱を取りに行く。

「…ありがと、おばちゃん」

アイナが、顔を曇らせながら小さく力なく呟いた。

＊

「聞いたぜ？竜が出やがったんだって！？」

無精髭を生やした、くたびれた風貌のゴブリンの中年男ーゴメスが言った。

「…うん」

ルーサが頷く。

「竜なんて、ここ５０年ほどずっと出なかったのに…！」

スキンヘッドに赤鼻の、まるで虎のようなゴワゴワした髭を蓄えた壮年のオークーゴルゴスが眉間に皺を寄せて呟く。

「街じゃ、…いや国中大騒ぎだぜ！？」

ここ聖レイハル王国と、その他の多くの国々は、時折出現し破壊の限りを尽くす竜達の襲撃に備えて、王都及び主要都市におよそ１３１フィート（約４０メートル）もの高さの堅牢な城壁を設けていた。

だがそれでも巨大な竜の、街への侵攻を阻むには、まだ不十分だった。しかも、目撃証言によれば今回姿を現した竜は、今まで出現したどの竜も比較にならないほど巨大な個体なのだという。この街の城壁など、ひとたまりも無いだろう。

「うちの村は大丈夫かなぁ…」

厳つい顔をしたモヒカン頭の、若い一際大柄なオークーパゴスが呟いた。

「お前の村なら、大丈夫だろ。なんてったって、お前の姉君がいるんだからな」

ゴルゴスが、パゴスに言った。

「竜なんか、逆に捻り上げられちまうよ」

カレンが、２人の肩を抱き寄せた。

「ほんと、2人とも…よく無事だったね！！」

カレンは、ハラハラと大粒の涙を零した。

「2人に万が一の事があったら、私ゃ…！！」

「でもお宝、手に入れられなかった…」

ルーサが残念そうに俯いた。

「何言ってんの！命あっての物種って、昔から言うじゃないか！」

「女将だけじゃねえぜ！俺らだって…！」

パゴスが、目を潤わせながら2人に言った。

「俺らもよう、長いこと故郷（くに）を離れて働きに来てるんだけどよう…。どんなに辛いことがあったって、2人の笑顔に支えられてここまでやってこれたんだよう！！」

彼女達が店に来る度―それが依頼を失敗した後でも楽しげに笑い合い、挫けずに次の冒険に出かけていく姿を、男達はいつも優しく見守っていたのだった。

「なんかよ、2人を見てるとよ…。故郷（くに）に残してきたムスメを見てるみたいでよぉ…！」

ゴメスが涙ぐみながら、2人の肩に手を置いた。

「ありがと、おじさん達…！」

「ありがと…」

２人の少女ールーサとアイナは、一方は顔を綻ばせながら、一方は顔を曇らせたまま男達に礼を述べたのだった。

「…そういえば」

ゴルゴスが、腕組みをしながら言った。

「女神様が出てきて、助けてくれたんだって？街じゃ、その話でもちきりになってるぜ？」

神話でしかその存在を知り得なかった巨神(タイタン)が現れ、竜と死闘を繰り広げたー。その一報は、竜出現の一報に動揺し、怯える人々の心に1条の希望の光を照らしていた。いわゆる、「悪い報せと良い報せ」というやつだ。

「うん、凄くてかっこ良かったんだ！あんな大きな竜を、軽々持ち上げて…！」

ルーサが、目を輝かせながら言った。

「でね！銀色の髪の毛で、銀ピカの鎧着てて…。私と同じくらいの女の子だった！！」

「俺達も是非見たかったなぁ、女神様の勇姿！」

「ああ！」

「おうよ！」

ゴメス、ゴルゴス、パゴスは、女神の活躍を語るルーサの無邪気な笑顔に、顔を綻ばせた。

—でも、あの女神様、どこかで見た事あるような…

金髪の少女の心の中に、何か引っ掛かるものがあったのだがー。

「強くもかっこ良くもないよ！！」

今までずっと俯き、押し黙っていたアイナが叫んだ。

アイナの強い否定の言葉が、ルーサの心の中の引っ掛かりを打ち消した。

「…負けちゃったんだから」

「でも、あんた達を命がけで守ってくれたんだろ？」

カレンが、アイナの頭を優しく撫でる。

「今夜も、泊まっていきな！お風呂、湧いてるよ！」

「ありがと、おばちゃん…」

アイナは1人、2階の宿へ向かう階段を上っていった。

「アイナ、どうしちゃったのかな…？」

ルーサが、アイナの背中を心配そうに見つめながら言った。

「さっきから、ずっとああなの…」

「…らしくねえよな」

パゴスが、ルーサの言葉に相づちを打った。

「大丈夫さ、きっと！アイナちゃんは、ちょっと疲れてるだけなんだ」

「おうよ、明日になりゃ、また何時ものお転婆娘に戻ってるって！」

ゴルゴスとゴメスが、ルーサを気遣った。

「うん…」

ルーサが、力なく頷く。

「な、女将！」

「あの娘（こ）…」

カレンは、ゴメスの言葉を無視して小さく呟いた。

＊

アイナは、宿泊室内の風呂場にて湯船に浸かりながら、１人ものの

思いに耽っていた。

ーあいつに勝てなかった。誰よりも強くなるんだと、ゴガドルおばちゃんにいっぱい鍛練してもらったのに！一生懸命頑張って、技も肉体(からだ)も鍛え上げたのに！

アイナ＝アイレスの目から悔し涙が溢れ、湯船の中に落ちていった。

あの金色の一角竜に、為す術も無く叩きのめされた。こんな事で、無事使命を果たせるのだろうかー？

アイレスは、自分の手足を見回した。不死の肉体を持つ彼女の傷はもう、大分治りかけている。

ー母さんなら、どうやって切り抜けたのだろう…？

先の大戦にて敵陣に単身で乗り込み、恐ろしい魔神を討ち取った、知恵の女神ブーボー。アイレスは、母の武勇伝を母の友人ふたりから、何度も何度も聞かされて育った。

ーあんなに小さな母さんが、あの恐ろしいガンジャを…！？

若き女神は、冥府で見た魔神ガンジャの姿を思い出していた。

繋がれてはいたものの、アイレスはその巨大さと威圧感に圧倒された。

そのガンジャに子をー竜を産ませ、この地上へと逃げおおせた不浄の女神デイオスー。

ーあいつは一体、何を企んでいるんだ！？

「…そろそろ、身体を洗わないと」

アイレスは、湯船から上がった。

母とその友人達の大きな愛によって育まれた、アイレスの健康的な肢体。ミルク色の、きめ細かな肌。しなやかさと強さを兼ね備えた手足。念入りに手入れがなされた腋。たわわに実りながらも、まだ成長の余地を見せる乳房。その頂きには、小さな桜色の乳首と乳輪とが控えめにツンと自己主張している。うっすらと浮き出た腹筋と大きく丸く、しかし引き締まった尻。恐らく今日まで残る裸婦像の幾つかは、彼女の肉体を参考に製作されたのだろう。

アイレスは、母ブーボーが発明し人間達にもその製法を伝えたという汚れを洗い落とす薬品ー石けんを手に取ると、それを泡立て始めた。そして、泡を柔肌に塗りつけ、手で優しく丁寧に擦る。腕、脚、腋、乳房、腹、へそ、腰、そして背中と尻。

泡塗れになったアイレスは、それをお湯で流していく。だが、まだ洗っていない場所が一カ所だけ残っていた。

ーあとは、ここだけ…。

アイレスは、深刻な面持ちで自分の股間をのぞき込んだ。

武の女神アイレスの下腹部には、白く柔らかな恥毛が生い茂っていた。それは、この年頃の少女にしては、かなり濃いめだった。腋と違い、そこの手入れは殆どなされていないようだった。

はあ、はあ…。

アイレスの呼吸が荒くなり、心臓が早鐘を打つ。

勇気と武の女神は、意を決して股間に手を伸ばした。

小さく可愛らしいアイレスの秘裂。彼女の指は桜色の小さな２枚の肉襞、その合わせ目の小さな頂きを探り当てた。

「…あっ！？」

指先が、こりっとした小さなしこりに触れたと思った瞬間、アイレスの身体が仰け反った。

ーき…気持ちいい！

しこりに触れた瞬間に感じた、あの時と同じムズムズするような不思議な感覚。

幼い女神の、薄桃色の小さな可愛らしい淫核。それはすっかり芽吹き、鞘(さや)からちょこんと顔を覗かせていた。

子を産み落とすための大切な穴と、それを覆い隠し、優しく包み込んで守る柔肉。しかしその割れ目の上にある小さな突起だけには、そこだけには決して触れてはならないー。

アイレスは幼少の頃より、母にそう言いつけられていた。

ー「淫ら」という罪にまみれた、とても穢らわしい場所だから、

と。

「これは、洗うだけ…お股を…洗うだけ…」

アイレスは自分自身にそう言い聞かせるように呟きながら、その肉芽を指先で擦り始めた。

冥府にて目の当たりにしてしまった、魔神ガンジャと大地の欠片との性交。そして、魔神の妊娠と出産。

節くれ立った岩塊ー大地の陰茎を咥え込み、大きく広がる、毛むくじゃらで分厚く醜い魔神の秘裂。それとは対象的に、芽吹く事でようやく少しだけ顔を覗かせた極小の淫核。大地の陰茎をしゃぶり上げる度にヒクヒクと醜く悍ましく蠢き、淫水を吐き出し、濡れそぼる。

目を背けたくなるほど醜悪ながらも、何とも言えぬ神秘性も感じてしまう光景。

ーあたしのお股にも、あれと同じモノがあるんだ…

それ以来、入浴の際普段何気無く洗っていたそこに触れる事を避けていた。

だが、今日初めて知ってしまった。竜の尾に、硬い鎧越しにそこをなぞられ金属の振動によってそこを揺さぶられた時に感じてしまった、あの素晴らしい感覚を。

＊

くちゅくちゅくちゅくちゅ…

自らを辱める淫(いや)らしい音が、浴場に小さく響く。

「きもちいいよぉ…ああ…きもちいいよぉ…」

アイレスは、うわ言のように呟きながら、秘部を弄った。

「ああ…、こんな…！い…いけない…ことなのに…！！」

一角竜との戦いにより、「快楽」という禁断の果実を口にさせられてしまったアイレス。

勇気と武の女神は、いつしか床に這いつくばっていた。尻が大きく突き出され、彼女の恥ずかしい部分が全て丸見えになってしまっている。細いしなやかな指先で摩擦される女性器。そしてそのすぐ上に空いている、桜色の可愛らしい肛門。彼女の濃いめの体毛は、菊座の周囲までにも及び、ほそく縮れた白い毛が何本かチョロチョロと生えてしまっている。

「うふぅん…！うぅうん！」

あまりの快感に、股間ばかりか顔までだらしなく蕩けさせるアイレス。犬のように舌を垂らし、口の周りを唾液で汚し、歓喜の涙を溢れさせている。まるで獣(けだもの)のような、みっともない格好。そこには、「勇気と武の女神」の面影も無かった。仮に彼女がこの姿を誰かに見られたとしたら、間違いなく喉を掻っ切っていただろう。

「ああ…もう…！もう…！」

アイレスは、大きく豊かな尻を戦慄(わなな)かせた。快感の頂点が近づいているのだ。

「ごめん…なさい…あぁ…ごめ…」

小さな身体からどっと汗が噴き出し、そして強張った。

「きゃふうぅぅぅぅぅぅぅん！？」

アイレスは、子犬のような可愛らしい嬌声を上げながら果てた。秘裂と肛門とをピクピクと可憐に痙攣させる。

そしてぐったりと床にうつ伏せになり、絶頂の余韻に浸りながら呼吸を整えた。そして、激しい自己嫌悪に襲われた。

竜に勝てなかった、弱い自分。そしてその竜に秘所を弄ばれ、その快楽が忘れられず自涜(じとく)に耽ってしまった自分。そして、未だ使命を果たせずにいる自分。

他の神々は、人間達は今の自分を見てしまったら皆どう思うのだろうか？所詮無鉄砲なだけの、口先ばかりの破廉恥娘、と嗤われてしまうかも知れない。何て弱くて淫らな女神だと呆れられ、威厳も信仰も失って見捨てられてしまうかも知れない。

＊

「母さん…。あたし、一体どうすれば…」

アイレスは床に寝転がったまま、身体を震わせ嗚咽したのだった――。

刺客　☆

数日後、レイハルとその近隣諸国は竜出現の一報を受けて厳重な警戒態勢が敷かれていた。
鎖帷子（チェーンメイル）を身に纏った大勢の兵士達が街の中を慌ただしく走り回り、街の城壁とその周辺への、巨大な投石機（カタパルト）やバリスタ（据え置き式の大型クロスボウ）などの兵器の設置が進められていた。

＊

「…まるで、戦争が始まるみたい」
「うわばみ亭」店内にて、窓の外を眺めながら、ルーサが不安そうに呟いた。
「戦争さ。ヒトと竜との」
カレンがうんざりした表情を浮かべながら、大きな溜め息をついた。
「アイナも、あれ以来ずっと部屋に籠もりっきり。…困ったもんだね」
　もう一つ大きな溜め息をついて、テーブルを囲んでいる常連3人組に向かって言った。
「あんた達もさ、昼間から酒かっ食らうのやめなさいよ？仕事は、

どうしたのさ？仕事は！？」

「その、仕事が無くなっちまったのさ…」

エールを一気にあおりながら、ゴルゴスが言った。

「この、竜騒ぎのおかげで材料が入って来なくなっちまって、工房も暇になっちまってよお…」

ゴメスが肩を落としながら言った。

「『今までありがとうございました』、だとさ…」

「酒でも飲まなきゃ、やってらんねえぜ！！」

パゴスが苛立ちながら、ドン！とテーブルを叩いた。

「おじさん達…」

ルーサが振り返った。

「お酒の飲み過ぎは、体によくないよ？」

「う…」

３人は、気まずそうに顔を見合わせた。

「ほら、ルーサにも言われちまってるよ？」

すかさずカレンが、３人に追い討ちをかけた。

「ルーサちゃんに言われれちゃ、仕方あるまい…」

赤い鼻を酔いによってさらに赤らめさせたゴルゴスが、髪の無い頭を撫でながら、バツが悪そうに言った。

「ちょうど昼だ！ヤケ酒はお開きにして、メシにしようか？女将、いつもの！」

気を取り直したゴメスが、料理を注文する。

「あいよ！あんた達は？」

「…大将と同じやつで」

「俺も…」

「あいよ！黒パンとカッテージチーズ、それと特製豆スープ３つね！」

若女将カレンは３人に向かって威勢よく答えると、奥の厨房へと引っ込んでいった。

＊

アイナ＝アイレスはただ１人、「うわばみ亭」２階の宿の一室の、ベッドの上で顔を枕に埋めて下着のままうつ伏せになって寝そべっていた。

母にあれほどきつく止められていたというのに、背徳的な罪深い

行為に耽ってしまった。しかも、自分は女神。皆の手本となる存在であり続けなければならないというのに。

でも「ここ」が、秘裂の上の淫らな突起が、熱く疼いてどうしようもないのだ。「もっと、もっと気持ちよくなりたい！」と、おねだりをして駄々をこねて仕方ないのだ。

ーはあ…はあ…！

桃色の可憐な唇から、熱い吐息が漏れる。

アイレスは、股間に手を伸ばした。そうせざるを得なかった。

女神の指先が、自身の「そこ」を探り当てる。目的のモノはすでにぷっくりと芽吹き、純白の布のど真ん中に小さなテントを張ってしまっていた。

「うう…もう…こんなになって…！」

アイレスは、「そこ」を指の腹で優しくさすり始めた。みるみるうちに「そこ」から桃色の電流が生じ、少女神の体内を駆け巡る。そして、肉も骨も、腸（はらわた）も、彼女の全てを蕩けさせていくのだ。

ーあたしのこんな姿を、みんなが見たらどう思うのだろう。

アイレスの脳裏に、皆の顔が浮かんだ。

母である知恵と美徳の女神、ブーボー。酒の女神、カルーナ。戦（いくさ）の女神、ゴガドル。主神、オルディナー。そして。

「ごめん…。みんな、ごめん…」
「うわばみ亭」の優しい女将カレンと、優しくてひょうきんで愉快な常連のおっちゃん達ー。
「ルーサ…！」
金髪のお下げに緑色のローブを纏った、優しくあどけない笑みを浮かべる少女の顔が浮かんだ。
その途端、アイレスの淫核に着いた劣情の炎は、より激しく燃え上がった。
「ルーサ！…ルーサ！」
アイレスは、夢中になって下着越しに淫核を捏ねくり回した。
「ああ…、イく…！イく…！」
枕が、アイレスの流す涙と唾液で汚れる。少女神の尻が、持ち上げられ、突き上げられた。
「！？あはぁあッ！！」
大きな尻を可憐に戦慄(わなな)かせながら、アイレスが果てた。可愛らしい秘裂から淫らな蜜を溢れさせ、純白の布に染みを作っていく。
アイレスは指に付いた糸を引くねばつく液体を、罪悪感に苛まれながら眺めた。

そして一言、小さく呟いた。

「ルーサ…。ごめん…」

＊

兵士達が慌ただしく走り回る中、黒いマントに身を包んだ２人組が、街の中を歩いていた。頭には、黒いフードをすっぽりと被っている。

１人は、デップリと太った中年の男。もう１人は女性のようだ。年齢は、２０代後半といったところか。

「あの魔術兵どもめ！しくじりおって！」

男が、吐き捨てるように言った。

「仕方無いわ」

女が、無表情で呟いた。

「邪魔が入ったのだから」

女が、続けて男に喋る。

「でも、却って好都合になったわ。こうして、混乱に乗じてまんまと潜入出来たのだから」

「…本当に、ここにいるんだろうな！？」

男が苛立ちながら、女に尋ねた。

「間違いないわ」

女が淡々とした口調で、男に言った。

「そう『御神託』があったのだから」

「『御神託』…。また、『御神託』か！『御神託』！『御神託』…！」

男は、もう沢山だ！とうんざりした表情を浮かべながら頭を振った。

「確実に見つけ出して始末しないと、全てを手に入れるどころかワシらの身が危うくなるのだぞ？」

「…『神』は常に、我らの味方でいて下さる…」

女は無表情のまま、静かに男に言った。

「…何故ワシらが自ら赴かねばならぬ！他の者どもにやらせておけば…！」

「それも、『御神託』よ。『私達だけで出向けば、確実に仕留める事ができる』、と」

「しかしなあ、せめて護衛ぐらい…！」

「大勢で行けば、目立つじゃない。それに…」

女は、じっと自分の手を見つめた。

「必要無いわ」

男は押し黙った。

「私には、『神』の『御加護』がある…」

ー「神」か…。

男は、不安そうな表情で女の顔を見つめた。

ーワシらがここまで成り上がる事ができたのが、妹の言う「神」のおかげだとしても…。何の見返りも無しに、ここまで尽くしてくれるものだろうか？いずれ何らかの代償を要求され、身を滅ぼす事になりはしまいか？もしやすると、その「神」とやら…。

「着いたわ。この店よ…」

ーまともな神ではないやもしれぬー。

2人組は、「うわばみ亭」の前で足を止めたー。

＊

「いらっしゃーい！」

カレンは、新たな2人の来客を、愛想よく迎えた。

「…人を探している」

黒マントの女の方が言った。

フードをかなり深く被っているので、どのような顔までかははっきり分からない。だが、かなりの美形であろう事はうかがい知れた。神々すら羨むような、絶世の美女。だが、どこか冷たい雰囲気を放っていた。

「金髪碧眼の娘だ！」

黒マントの男の方が言った。こちらは、なかなかの肥満体。二重顎に、金色の小さなカイゼル髭を蓄えている。貫禄をつけるために生やしたのだろうが、貧相な髭はこの男が小人物である事を一層引き立ててしまっている。

「ここにいるはずだ！」

「…金髪碧眼ったって、世間にゃそんな娘山ほどいるからねえ」

カレンが、頭を掻きながら2人組に言った。

「…あ」

ルーサが、小さい声を上げた。

顔が青ざめている。明らかに、2人組に対して怯えている。2人の正体に、気づいたのか—。

「この娘よ」

黒マントの女が抑揚の無い声で言いながら、ルーサを指差した。
「…こちらに引き渡してもらおう！…もちろん、タダでとは言わん。幾ら欲しい？」
黒マントの男の方はカレンを一瞥しながらそう言うと、ルーサににじり寄った。
「…探しましたぞ！」
「…ひっ！？」
ルーサは、小さな悲鳴を上げながら後ずさりして、カレンの陰に隠れた。
金髪の少女は怯えた表情を浮かべて若女将にすがりつき、助けを求めるようにカレンの顔を見上げた。
ー安心おし！こいつらは、私に任せな！
カレンはルーサに優しく微笑むと、険しい表情を浮かべながら顔を2人組に向けた。
「お2人さん、悪いんだけどねぇ…」
カレンが黒ずくめの2人組に向かって、不信感を露にしながら言った。
「この娘(こ)は、事情があってうちで預かってるんだ。お引き取り願

えますかねぇ…」

カレンは腰に手を当てて、2人組の前に立ちはだかった。

「この娘に万が一の事があったら、私ゃこの娘の親に殺されちまうんでねぇ！！」

「お二人さんよお…」

ルーサの様子を見て何かを察したゴメスが、いかにも怪しげな2人組ににじり寄った。

「…この娘はな、俺達の家族みてえなもんなんだ。…人買いどもめ！！女だって容赦しねえ！！表に出ろッッ！！」

2人のオークが、お互いの顔を見合わせる。髭面のゴルゴスが、パゴスに向かって顎で何やら促すと、椅子から立ち上がった。兄貴分が黒マントの2人組に向かってポキポキと指を鳴らす音を耳にしながら、続いて巨漢のパゴスが仕方なさそうに立ち上がった。

「薄汚いゴブリンとオークどもめが！！」

黒マントの太った男が、口から唾を飛ばしながら3人を罵倒した。

「…2人とも、痛い目に遭いたいようだな…！！」

ゴルゴスが指を鳴らしながら、黒ずくめの2人組を睨みつける。心身共に臨戦態勢に入った常連3人組は、今にも黒マントの男に飛びかからんばかりである。

「お、おい！！」

若女将と柄のよろしくなさそうな3人組の気迫に押された黒マントの男は、慌てて女の方を振り返った。

女は小さく頷くと、店の床に手をかざした。

「湧（わ）け！」

女が言い終わると同時に、まるで水から浮き上がるように、2体分の人骨が床の上に現れた。

カタカタカタ…。

人骨は乾いた音を立てながら、ひとりでに人の形に組み上がっていく。

「な、何だ何だ!?」

「何が、どうなってんだよ!?」

ルーサとカレン、そして常連3人組は目の前の信じられない光景に恐怖し、立ちつくした。

カタッ。

人骨達は完全に組み上がると、床に手を伸ばした。泥の中に手を突っ込むように、2体の骸骨の手が冷たい石の床に沈む。そして、それぞれ剣を1本づつ引き抜いた。

カチャリ！

２体の骸骨は、ルーサ達５人に剣を向けた。

ーこれが、私が「神」より授かりし力…！

女が、口角を吊り上げた。

「殺(や)っておしまい！」

黒マントの女は顎で５人を指し、骸骨達に命令を下した。

「皆殺しよ！！」

カタカタと音を立てながら、骸骨兵士達がルーサ達に斬りかかる！

「あぶねえ！！」

パゴスがとっさに骸骨達の前に飛び出し、ルーサを庇った。骸骨兵士が、モヒカン頭のオークの左肩を斬りつける。骸骨からの一撃を受けたパゴスの肩から、真っ赤な鮮血が吹き出した。

「きゃあああああああああ！？」

ルーサが悲鳴を上げた。

「いてえ！」

パゴスが、負傷した左肩を押さえて床の上を転げ回った。

「ちきしょう……！」

床にうずくまりながら、パゴスが小さく呟いた。

「パゴスさん！！」

パゴスに駆け寄ろうとするルーサに、骸骨達が刃を向ける。

「やりやがったな！」

ゴルゴスが近くの椅子を掴んだ。

「この野郎！」

髭面のオークが、椅子で骸骨の頭を横から殴りつけた。頭蓋骨が物凄い勢いで壁へと飛んでいき、ぶつかった。

カコン！

壁へとぶつかった頭蓋骨は跳ね返り、天井へ飛んでいく。

カコン！

天井へぶつかった頭蓋骨は再び跳ね返り、まっすぐカレンの頭上めがけて飛んでゆく。

「ぎゃふんっ！？」

飛んできた頭蓋骨が、カレンの頭を直撃した。痛恨の一撃を受けた若女将は目を回すと、そのまま床へばったりと倒れて気を失った。

頭蓋骨はカレンの傍に転がり落ちると、カタカタと歯を鳴らした。

「おばさん！」

「女将いぃぃぃぃ！」

ルーサとゴルゴスが、白目を剥いて床に倒れ伏すカレンを見て悲鳴を上げた。

「化け物め！あっち行きやがれ！！」

骸骨のうちの1体が剣を振り上げ、カタリ、カタリと音を立てながら、ゴメスににじり寄っていく。ゴメスは、椅子を振り回して応戦するも、骸骨の歩みは止まらない。

「何事…、ああっ！？」

階下での騒ぎを聞きつけて、アイナが下着姿のままで駆け下りてきた。

「何なんだ、こいつら！？」

「骸骨が…！」

ルーサが顔を青ざめさせ、悲鳴に近い声でアイナに叫んだ。

「化け物ども め…！！

アイナは、骸骨達に叫んだ。

「あたしが相手だ！」

ゴメスに斬りかかろうとしていた骸骨兵士は、アイナの方を向いた。そして、ゆっくりとその刃の切っ先を銀髪の少女に向けた。頭部を失ったもう一体も、それに続く。

「来い！」

カタカタカタ！

骸骨のうちの一体が、アイナに斬りかかる。アイナは上体を反らし、紙一重で刃をかわす。

首無しになったもう一体が、アイナの足下を斬りつける。アイナは飛び上がって、これもかわした。

「いやぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

アイナが、目の前の骸骨に正拳突きを食らわせた。骸骨は吹っ飛んで、壁へと激突し、そのままバラバラと崩れ落ちた。

カチャリ…

バラバラになった骨が、寄り集まっていく。

カチャカチャカチャ！

骸骨はあっという間に人型に組み上がると、剣を拾い上げ再びアイナに襲いかかる。

ーこいつらの、核になってる部分があるはずだ！…それは、どこだ…？…そうだ！

「どりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

アイナは足を大きく振り上げ、骸骨の頭に踵落としを炸裂させる。その強烈な一撃の前に、一瞬で頭蓋骨が粉砕された。

カラカラカラ…

頭部を失った骸骨は、がっくりと床に膝をつくとバラバラと崩れ落ち、そのまま床に染み込むように消えていった。

「…やっぱり！」

アイナは、骸骨兵士どもの残る一体、首無し骸骨に向かっていった。

＊

「…もう逃がさぬぞ！！」

太った黒マントの男は、混乱に乗じてルーサを壁に追い詰めていた。

「お前さえ、いなければ…！」

男はルーサの喉を掴んだ。振り上げたその手には、鋭い短剣が握られている。

まさに、万事休す！　しかし、その時だった。

「にゃろめッ！！」

背後からゴメスが、男の股間を蹴り上げた。

「ぬふぅッ！？」

急所に痛恨の一撃を受けた男は、短剣を取り落として蹲った。

ゴメスはすかさず凶器を蹴り飛ばすと、蹲る男の横っ面を殴り飛ばした。

「うぼぁっ！？」

男は情けない悲鳴を上げると、床に倒れた。

男から解放されたルーサは、咳き込みながら床にしゃがみ込んでいる。

「大丈夫か？　ルーサちゃん！　怪我ねえか！？」

ゴメスが、ルーサに駆け寄った。

「ありがと、ゴメスさん。…私は大丈夫」

ゴメスに抱き起こされたルーサは、命の恩人に向かって弱々しく礼を述べた。

「この娘（こ）に指１本でも触れてみろ！？　俺達が許さねえ！！」

「う…う…」

男はあまりの激痛に、呻き声を上げた。

「解ったか！　この豚野郎‼」

ゴメスは男を指差すと、そう毒づいたのだった。

＊

カタカタカタ！

首無し骸骨が、アイナの頭上めがけて剣を振り下ろす。

アイナは素早く身をかわすと、カレンの傍らに転がる頭蓋骨に駆け寄っていく。

「どあぁぁぁぁっ‼」

飛び込みざまに肘で、カタカタと歯を鳴らし続ける頭蓋骨を打ち砕いた。

ガシャン！　カラカラカラ…。

残るもう一体の骸骨も床に倒れると崩れ落ち、消えていった。

＊

「おい！見ろ！こいつ⁉」

ゴルゴスが、男の被っていたフードを引き剥がし、驚愕の声を上げた。
「エルフじゃねえか！？」
一般的な表象（イメージ）とは大きくかけ離れた、醜く肥えた体型をしているが、男の持つ特徴的な尖った耳と金色の髪、青い目は間違いなくエルフのそれだった。
「こいつ、クルールの…！王妃の兄貴の、ネルソン将軍じゃねえか！？」
「すると、こっちの女はマルメス王妃か…」
ゴメスが、女を指差した。
女は、被っていたフードを捲った。尖った耳と、美しい金髪、青く輝く目が露になった。
彫刻よりも端正な顔立ちをした女。彼女こそが、クルール国現王妃、マルメスだった。
「何故こいつらが、ルーサちゃんを狙っている…？」
わけがわからん！！とゴルゴスが叫んだ。
「…やっぱり、そういう事だったか！！」
完全に何かを確信したゴメスが、小さく呟いた。

―まさか。

ゴメス以外の「うわばみ亭」一同が、一斉にルーサを見た。

「…ごめんなさい」

―まさか、ルーサが！？

ルーサが自分の両耳に触れ、何かを剥がした。すると、尖った耳の先端が飛び出た。緑色のローブを纏った、美しい金髪を持つ美少女魔術師。彼女は耳にニカワを貼り付け、尖った先端を隠していたのだった。

ルーサは行方知れずになっていたクルール国王女、サルノその人だった―。

「ごめんなさい…！」

ルーサ＝サルノ王女がハラハラと大粒の涙を溢した。

―ルーサ…

「嘘ついて、騙して、みんなを危険な目に逢わせて…。ごめんなさい！ごめんなさい！」

―そうか、ルーサも…自分の正体を隠して…。

サルノ王女は両手で顔を覆い、泣き崩れた。

―1人で悩んで、苦しんでたんだ…！

「ルーサ…！」

アイナは、王女を抱き締めようと、彼女に駆け寄ろうとした。とにかく、寄り添いたかった。「大丈夫、気にしてないよ！」と、声を掛けてやりたかった―。

その時。

「ハハハ…。アハハハハハハハハ！」

マルメスが、笑い出した。

「やはり、こうでなくては…。面白くありませんからねえ…！」

マルメスの声が、彼女の物から別人の物へと変わっていく。それは、アイナ＝アイレスにとって聞き覚えのある声だった。忘れたくても、忘れられない声―。

―まさか、この女…！？

「みんな！そいつから離れて！！」

アイナが叫んだ。

「そいつは…！その女は！！」

―骸骨＝死者を意のままに操る。世の理に反するそれは、いかに優れた魔術師といえどもヒトが使いこなせるような術ではない。そ

してそれは、神々の力を持ってしてもそう簡単に行えるものでは無かった。

その術を自在に使いこなせる巨神(タイタン)は、２柱(はしら)しか存在しない。１柱(はしら)は死者の国、冥府の主である闇の女神フォーリス。そして、もう１柱(はしら)は――！

ゴボリ…。

マルメスの口から、まるでタールのような真っ黒な汚泥(おでい)が溢れた。

「あの女、急に戻し始めやがっ…」

ゴルゴスが鼻を摘まみ、顔をしかめながら言いかけたその時。

「逃げろ！」

アイナが、必死の形相で叫んだ。

「ええ！？」

王女と男達は、突然の事に頭の中の整理が追いつかず、驚きと困惑とで立ちすくんでいる。

「早く！」

一向に動こうとしない一同に業を煮やしたアイナは、サルノ王女を抱き上げた。

「ア、アイナ！？」

「みんな、早く！」

王女が驚きの声を上げるのを耳にしながら、アイナは一同に退避を促した。銀髪の少女のただならぬ雰囲気に押され、ゴメスとゴルゴスは半ば反射的に動き出す。

「パゴス！女将ぃ！」

ゴルゴスが、床に蹲る巨漢のパゴスを引きずり起こして肩を貸し、未だ気を失っているカレンを担ぎ上げた。

「あんたも！」

アイナが、妹の豹変を目の当たりにして、放心状態で立ちつくしているネルソンに言った。

ゴボリ！ゴボゴボ！

マルメスの口から、大量の汚泥が吐き出され続ける。汚泥は、強烈な悪臭を放ちながら、床一面に広がっていく。

「走れ！！」

アイナが叫ぶと同時に、ネルソンも加えた7人は弾かれるように店を飛び出した。

店内が、悪臭を放つ汚泥でいっぱいになる。マルメスの顔が、神々も羨むと言われた美貌が、均整のとれた美しい肢体が、無残にも腐り落ち、崩れて朽ち果てていく。

──肉屋の看板娘だった頃からか。それとも、王妃の座を手に入れてからか。それは、今となってはもう分からない。

マルメスは邪神に魅入られ、体内に巣食われていた。そして、彼女自身もそれを望んだ。

邪神は、マルメスの歪んだ、ねじ曲がった心を糧とし、力を蓄え、彼女を蝕んでいった。

邪神を利用して権力を、富を手に入れるつもりが、逆に利用されて骨の髄までしゃぶり尽くされていた──。

野心多き女、マルメスの最期だった。

大量の汚泥(おでい)が「うわばみ亭」の天井を突き上げ、壁を押し破り、店の外へと溢れだす。

汚泥(おでい)が放つあまりの悪臭に、道行く人々は足を止め、思わず鼻を押さえた。黒い泥はますます膨れ上がり、「うわばみ亭」を破壊していく。

「マ…マルメス…!!」

あまりにも異常過ぎる妹の死に様を目の当たりにしたネルソンが、恐怖のあまり腰を抜かして地べたにへたり込んだ。

アイナとサルノ王女、常連3人組、そしてネルソンは、その光景を呆然として眺める事しか出来なかった。

汚泥（おでい）が、さらに大きく膨れ上がっていく。

そして、次第に巨大なヒトの形に収束していき。

長身痩躯の、女の巨神（タイタン）の姿となった。

薄汚れたボロ布を身に纏い、踵まで届く黒い長髪。朽ちかけた死体のようなどす黒い肌に、長い手足。顔の半分は長い髪に隠れていてよく見えないが、その隙間から僅かに片眼だけが覗き、錆色の濁った瞳をギラギラと輝かせている。青ざめた薄い唇は、黄ばんだ歯を剥き出しにして悪意の籠もった笑みを浮かべていた。

その背の高さたるや、およそ95フィート（約29メートル）。レイハルで最も高い建物、国王オブライエン5世の居城である「白亜の城」―98フィート（約30メートル）を誇るシュニア城の尖塔にも迫るほどだ。そして身体からは常に強い腐臭を放ち、何千何万というおびただしい数の蝿（ハエ）が集り、周囲を飛び交っている。

突如出現した女巨神（タイタン）の、巨大で禍々しく恐ろしい姿に人々は恐怖し、悲鳴を上げて逃げ惑った。

「…デイオス！！」

アイナ＝アイレスは、女巨神（タイタン）を見上げながら、ただ一言だけ呟いた。

穢れと罪、そして罰を司る、「不浄の女神」の降臨。

邪神デイオスが、遂にその姿を現した瞬間だった―。

対決　☆

シュニア市街の中心部に顕現した邪神ディオスは、悪意に満ちた笑みを浮かべながら人間達の街を見下ろし、見回した。

「あらあら。私が与り知らぬ間に虫どもが、こんなに蔓延っていたのですねぇ…」

「か…怪物！？」

ディオスの恐ろしい姿を間近で目の当たりにしたネルソンは、あまりの恐怖に地べたにへたり込んだ。

「く、来るな！ひぃいいいいいいい！？」

ネルソンは恐れおののきながら、どうにかして逃げ出そうと恐怖にすくむ手足を必死で動かした。そして邪神に背を向け、不恰好に地面を這いずった。

「『怪物』、ですって？この私が…！？」

ディオスが、ゆっくりとネルソンを見下ろした。そして醜く太ったエルフの男に向けて、不快そうな眼差しを向けた。錆色をした邪神の眼が、みるみるうちに怒りと憎しみに満ちていく。

「ヒトの分際で、神を侮辱するとは…。許せぬ…！！」

ディオスが、唸るような低い声で小さく呟いた。

ー不遜な輩には、相応の罰を与えねば…！！

邪神はゆっくりと口を開くと、地面に這いつくばって無様な姿を晒す、クルールの将軍に向かって告げた。

「…朽ち果てよ！」

「う…！？」

ネルソンの顔に、死斑が浮かんだ。そして、土気色に変わっていった。ネルソンの鼻が、耳が腐って地面に落ちていく。金色の髪が、そして歯が抜け、肉が蕩けて崩れていく。ネルソンの身体は完全に崩れ落ち、骨となり、それも塵となって消えた。

—「腐敗の呪い」。

それは、この世のあらゆる物を瞬時に腐らせ、朽ち果てさせる呪い。不浄の女神ディオスの、恐るべき力だった。

「朽ちよ！朽ちてしまえ！お前も！お前らも！アハハ、アハハハハハハハハ！！」

何の罪も無い街の人々ー邪神の悍ましい姿におののき安全な場所に逃げようとする母親と、彼女の手に引かれた幼子が。年頃の可愛らしい娘が。白髪頭のてっぺんが薄くなった、人の良さそうな好々爺が。恰幅と威勢の良い中年の男女と、彼等が引く荷車に載せられた野菜の山が。呪いにより、みるみるうちに生きたまま腐って崩れ落ちていく。シュニアの街が、あっという間に地獄と化した。人々は逃げ惑い、悲鳴が幾百幾千にも折り重なって街中に轟いた。

「…街が！？」

ルーサ＝サルノ王女が顔を蒼白にさせ、身体を震わせながら小さく呟いた。

「やべえ…やべえよ！！」

パゴスが、一瞬にして人々に死をもたらした邪神への恐怖に駆られながら、叫んだ。

―グズグズしていると、次にああなるのは俺らだ。そうなる前に、早く避難しねえと…！！

「逃げねえと！！」

「逃げるって、一体どこに逃げるつもりだ！？」

―逃げ場など無い。ゴルゴスは、恐怖と苛立ちとで声を上擦らせながら、パゴスに向かって叫んだ。

「そ、そりゃあ…」

「何でもいいから、さっさとここからずらからねえと…！」

ゴメスが、２人に向かって叱り飛ばすように叫ぶ。

―故郷(くに)で待ってるかあちゃんとムスメのためにも、こんな所でくたばってたまるかよ！？

「アイナちゃん達も、早く！」

中年のゴブリンは、エルフの王女と銀髪の少女にも避難を促した。

「女神様が、来てくれたら…」

アイナの腕に抱かれたサルノ王女が、小さく呟いた。

アイナは、無言でそっとサルノ王女＝ルーサを地面に下ろし、背を向けた。

「あたし…」

「アイナ…？」

王女は、アイナの背を見つめた。

「…女神様呼んでくる！！」

アイナは背を向けながら、王女達に叫んだ。

「おっちゃん達は、ルーサとおばちゃんを頼む！！」

「何言ってんだ、アイナちゃん！」

「アイナも逃げないと！」

「あたしは、大丈夫だから！！」

アイナは王女達の制止を振り切りながら、デイオスに向かって駆

け出して行った。

「アイナぁ！！」

「アイナちゃぁん！！」

走りながらアイナの身体が、王女や男達が見ている前で白い眩い光を発し出した。光に包まれたアイナの身体は、みるみるうちに巨大になっていく。そして―。

＊

「…地上の皆さん、ご覧になって頂けましたか？」

邪神が大きく手を広げ、街の人々に語りかけている。

「大いなる神（わたし）の力の一端を…。救われたいのなら、神（わたし）を崇め、信じなさい。私こそが、真（まこと）の神…」

デイオスは大袈裟な身振り手振りで、自身への崇拝と信仰を促し、訴えかけた。

「…よくも！」

邪神の背後から、少女の声が聞こえた。聞き覚えのある声を耳にしたデイオスは、後ろを振り返った。

「あらあら。これは、御機嫌麗しゅう…」

デイオスは背後に立った巨大な影に目を細め、仰々しくお辞儀を

した。

「お元気にしてたかしら？子ネズミちゃん」

デイオスの前に、もう1柱の巨神が立ちはだかっていた。

銀色の美しい髪をポニーテールに結わえ、健康的な色気を放つ肢体。それを、白銀色に輝く露出度の高い鎧で守る、少女の巨神。

白銀の美少女巨神の、美しい切れ長の吊り目。彼女の眼は、罪なき者達の命を惨たらしい方法で奪った邪神への激しい怒りで燃え、涙を溢れさせていた。

―みんな、殺された。「うわばみ亭」の向かいの、八百屋のザルグおじちゃんとモグダンおばちゃんも。花屋さんとこのイーミアちゃんも。道具屋のグワンジじいちゃんも。お隣のロアナおばちゃんとトゥマク君も。みんな生きながらにして、腐らせられた…！許さない！…許さない！！

「よくも…みんなを！！」

白銀の巨神、勇気と武の女神アイレスが、再び地上に降臨した―。

＊

「ア…アイナ…！？」

「…嘘だろ！？」

「アイナちゃんが…！？」

「女神様だったなんて…！！」

サルノ王女と3人の男達ーゴルゴス、ゴメス、パゴスが口々に叫んだ。

アイナの正体は、女神だった…！！王女と3人の男達はあまりの事に驚愕し呆然としながらも、白銀の女神の頼もしい背中を見つめるのだった。

ーそういえば…。

王女は、いやルーサは思い出していた。あの娘（こ）は、アイナはどこか変わったところがあった。力自慢の大男でもびくともしないような、大きな重たい石像を簡単に押し倒したり。時々、自分がまるでヒトではないようなことを言ってみたり。「使命」という言葉もよく口にしていた。そして何より、女神様が現れると同時にいなくなってしまったー。

ーアイナも自分の正体を隠して、ずっと苦しんでいたのだろうか？そして「使命」を果たさなければと、ずっと悩んでいたのだろうか？

「アイナ…！」

ルーサはアイレスを見上げながら、小さく呟いた。

＊

「あらあら。感動の再会を、喜んでは下さらないのですか？」

デイオスが、ニヤニヤ嗤いながら白銀の女神に言った。

「みんなを、あんな酷い目に！！」

アイレスは歯を食いしめ、拳を振るわせた。

「泣いていらっしゃるのですか？神（わたし）に不遜な態度をとった虫どもに、罰を与えてやっただけですのに？」

「この、極悪クソババア！！」

アイレスは拳を振り下ろすと、邪神に向かって叫んだ。

「貴女にも、お仕置きが必要ですね…！」

デイオスは、躾のなっていない小娘が！と毒づき、不快感を顕わにしてアイレスを睨んだ。

「お前を倒す！」

「へえ。竜にも無様に負けてしまった癖に、ですか？」

「！？どうしてそれを！！」

「さあ…？何故でしょうねえ？」

邪神は、嗤いながら肩をすくめた。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

白銀の女神は怒りの拳を振り上げ、邪神に向かっていった。

＊

「…おっぱじまるらしい！ここを、離れねえと！！」

ゴメスが叫んだ。

「あそこだ！！」

ゴメスが指差した先には、数キロ離れた高台ー光明の女神オルディナを祀る神殿があった。

「走れるか？」

カレンを担いだゴルゴスが、パゴスに言った。

「肩貸すぜ？」

「兄貴、すまねえ…！」

「ルーサ…じゃねえ、王女様も早く！」

ゴメスが、王女に向かって叫んだ。

「でも、アイナが！？」

ゴメスは王女の手をとると、まるで父親のような優しい眼差しで、彼女の目を真っすぐ見つめながら言った。

「アイナちゃんなら、大丈夫だよ！何てったって、女神様だろ！？王女様だって、見たんだろ！？きっと、あんなヘドロ女軽く捻ってくれるって」

王女は、黙ってゴメスの言葉に耳を傾けた。

「…俺達がここにいたら、アイナちゃんが存分に戦えねぇ！」

「おうよ！！アイナちゃんのためにも、今は逃げねえと！な！」

ゴルゴスとパゴスが、ゴメスに続いて王女に声を掛けた。

「…うん！！」

王女は、３人の男達に向かって力強く頷いた。

「アイナ…女神様、負けないで！！」

王女＝ルーサは白銀の女神に背を向けると、ゴメス達と共に神殿へと駆けだした。

＊

「貴女、本当に礼儀がなっていないですね…」

邪神の髪の毛が逆立った。

「躾をして差し上げないと！！」

ディオスの長い髪が、まるで太く長い竜の尾のように纏まり、アイレスに向かっていった。

ビュンッ！ビュンッ！

縦横無尽にしなり空を切る音を立てながら、右へ、左へ、上へ、下へと邪神の長大な髪の鞭が振り回される。

「だッッ！だァッ！！」

アイレスは襲いくる髪の束を、左へ、右へ、下へ、上へと巧みにかわしながら、ディオスとの間合いを詰めていく。

「でぃやぁッ！！」

邪神との間合いに入ったアイレスは、ディオスの鳩尾に強力な肘の一撃を食らわせた。

「んぐうぅぅぅぅぅぅぅッッッ！？」

ディオスが苦悶の表情を浮かべながら、鳩尾を押さえて大きくよろめいた。

—一気にカタをつけてやる！！

「であぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

アイレスは、相手に隙ができたこの好機を逃すまいと、素早く脚を振り上げた。

「だアァッ！！」

ドガァッ！！

少女神の健脚から繰り出される強烈な蹴りが、デイオスの胸に炸裂した。

「ぐはっ！？」

アイレスの怒りの一撃を食らった邪神の巨体が、宙に浮く。

バキバキ！グシャッ！

ズズゥン！

デイオスは地面を轟かせ、周りの民家を押し潰しながら、大地へと仰向けに倒れ込んだ。

＊

「いいぞ！」

高台の神殿に避難した、ルーサ＝サルノ王女と常連3人組。そして、未だに伸びている女将カレンは、同じく避難してきた人々と共に巨神(タイタン)同士の戦いの行方を見守っていた。

「そのまま、タコ殴りにしてやれえ！」

「皆の、敵を討ってくれ…！」

「頑張ってえ！！」

「この街を、守ってくれえ！！」

人々が口々に白銀の女神、アイレスに声援を贈る。

皆、そうせざるにはいられなかった。恐るべき力を持つ邪神の前に、人々はあまりにも無力だった。だが少しでも、強大な相手に健気に立ち向かう少女の巨神（タイタン）の力になりたかったのだ。

「女神様…アイナ！負けないで！！」

ルーサ事サルノ王女もまた、群衆の中で白銀の女神に声援を贈るのだった。

＊

「…よくも、みんなを！！」

アイレスが、倒れたデイオスに馬乗りになろうとしたその瞬間、それが起こった。

「あッ！？」

アイレスの身体がぴくんと痙攣し、動きが止まった。空色をした澄んだ瞳が潤み、顔が紅潮する。美少女女神の桃色の唇から、甘い吐息が漏れだした。

「ああ…はぁ…はぁ…」

アイレスは前屈みになり、足を内股に閉じて股間を押さえた。

＊

「お、おい…」

巨神達（タイタン）の戦いを見守る群衆達の間で、ざわめきが起こった。

「何か、様子がおかしいぞ！？」

ゴルゴスが、アイレスを指差した。

「一体、どうしたってんだ！？女神様…！」

ゴメスが、心配そうに呟いた。

「アイナ…！」

ルーサは、悲痛な面持ちでその光景を、ただただ見ているしか出来なかった。

＊

「…戯れは、ここまでですよ？麗しの女神様」

邪神ディオスはそう言うと、瓦礫の山からゆっくりと上体を起こし、立ち上がった。

「ほら、『ここ』がよろしいのでしょう？」

ディオスが、指先で何かを摘まみ、捏ねくり回すような仕草をしている。

「う……ううう っ……あッ……あはぁあん……！？」

白銀の女神はその度に苦悶し、顔を歪ませ、身を捩った。それは、苦痛を感じているのではなかった。

アイレスは、快楽を得ていた。

―ああ……お……お股が……！？

邪神の見えざる指先が、少女の、腰鎧の下の柔肉―その中でも最も感じる小さな肉の突起を弄び、嬲っていたのだ。

不浄の女神ディオスの、「欲情の呪い」―。

―き……気持ちよすぎるぅっっっ！？

呪い越しにとはいえ、初めて他人に淫核に触れられ、責められる快感。

初な少女神にとって、邪神の淫技はあまりにも強烈すぎた。

「あ……はあぁあん！？」

アイレスは膝をガクガクと震わせると、瓦礫の山へと崩れ落ちた。

「お股が……！お股がぁ！？……なに……これ……！？いやぁ！！いやあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

白銀の女神は、股間を押さえながら狂い泣いて、周りの建物を押し潰しながら大地を転げ回った。

「ククク…。やはり『ここ』が、この憎たらしい小娘の泣き所…。ガロンめも、実に良い仕事をして下さいました…」

少女神の性感帯を弄びながら、ディオスがほくそ笑んだ。

「ま。もっとも、『ここ』を弄くり回されたら、どんな女でもすぐに腑抜けになってしまうのですけどねぇ…」

「ああ…いやぁ！いやぁぁ！」

「フフフ…。良い声でお鳴きになるのですねえ…」

邪神は、呪いの指先でアイレスの過敏な突起を無残にも啄み続ける。

「気持ちよいのでしょう？正直に言っておしまいなさいな！」

「い…言うもんか…！言うもんかあぁぁぁぁぁッ！！」

アイレスは歯を食いしばって襲いくる快感に耐えた。

「き…きもち…よくなんか…！！」

顔を紅潮させ、眼を潤ませながらも、邪神を見上げ、睨みつける。

「強情な娘ですね？…これなら如何です？」

デイオスが、指先で突起の先端をカリカリと軽く引っ掻く仕草をした。

「あんッ！あぁぁぁッ！？」

「ククク…。それから、こうして…」

スリスリと、突起全体の表面を撫で回す仕草をする。

「あひぃぃぃ！？」

「それそれ！」

「くあぁぁぁっ！？」

指でトントンと軽く叩く。

「竜達の母」、大魔竜神ガンジャですら悶絶させたデイオスの淫技の数々が、快楽を覚えたばかりのアイレスの幼い淫核に次々と襲いかかる。少女神の秘裂から、淫らな液体がトロトロと溢れ出す。

「折角ですから、1度軽く果てさせて差し上げましょう…」

デイオスはそう言うと、淫核を激しく擦り上げる仕草をした。

クチュクチュクチュクチュ！

デイオスの呪いが、アイレスの肉体（からだ）を一気に悦びの頂点へと押し上げていく。

「あぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁッッッ！？」

アイレスの肉体（からだ）がビクッ！ビクッ！と戦慄（わなな）いた。白銀の女神は、蕩けきった満足げな表情を浮かべながら気を失った。

＊

「アイナちゃん…いや、女神様が負けちまった…！？」

ゴメスが、呆然として呟いた。

「アイナが…。そんな…！」

ルーサが、顔を蒼白にさせながら、小さく呟いた。

「ちくしょう…！！」

パゴスが、ゴルゴスに肩を支えられながら悔し涙を流した。そして、地面を蹴りあげた。

「…あれ？女将は…！？」

カレンの姿が、いつの間にか消えていた。

「あそこだ！」

ゴルゴスが指を指した方向に、カレンがいた。神殿の石段を駆け下り、倒れ伏した白銀の女神に真っ直ぐ向かっていく。

「女将ぃぃぃ！何やってんだあ！？」

「戻れえ！！」

「死んじまうぞぅ！？」

カレンは３人が制止する声を無視して、ものすごい勢いでアイレスに駆け寄っていく。若女将の身体が、橙色の光に包まれ、そして──。

＊

「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

もう１柱の巨神が、新たに降臨した。ボサボサの蜂蜜色の髪に、橙色の布を身に纏った女神が、少々垂れぎみの爆乳をボヨン！ボヨン！と弾ませながらアイレスに駆け寄り、邪神の前に立ち塞がった。

やや下ぶくれ気味の、愛嬌に満ちた顔。はしばみ色の瞳。若干ふくよかな、それでいて所謂肥満ではない絶妙な肉付きの肢体。

「うわばみ亭」の若女将、カレン。彼女こそが、酒の女神カルーナの、世を忍ぶ仮の姿だった──。

＊

「…信じらんねえもの見ちまった！」

「女将も、女神様だったのか…！」

「まあ、女神みてえなお人だとは思ってたけどよう…！」

ゴメス、ゴルゴス、パゴスが、目の前にて明かされた驚愕の真実を目の当たりにして、口々に叫んだ。

「おばさん…！お願い！アイナを助けて！！」

ルーサは、少々頼りなさげな酒の女神に、祈りを捧げたのだった。

＊

「あら、これはこれは、カルーナ様。血相を変えていきなりお出でになって、如何なされたのですか？」

デイオスが、ニヤニヤと薄笑いを浮かべながら酒の女神に言った。

「おい、デイオス！！」

カルーナが、デイオスを指差した。

「…何でしょうか？」

デイオスは、クスリと嗤いながら首を傾げた。

「お前、街の人達に何したんだ！？それに、こんな子ども相手に…！！」

「何って、不遜な虫どもと礼儀知らずの子ネズミちゃんに、教育的指導を施していただけですが？」

「…何が、『教育的指導』だ！？」

酒の女神は、怒りで顔を紅潮させ、拳を握り締めた。

「ふざけんなこのやろぉおおおおおおお！！」

カルーナが、ディオスに殴りかかる。

「いけえ！女将！！」

「女神様…いやアイナちゃんの、弔い合戦だあ！！」

「バカ！勝手にアイナちゃん殺すんじゃねえ！！」

「うわばみ亭」の元常連３人組は、口々に酒の女神に声援を贈った。

「あッ！？」

ディオスの髪がカルーナの、拳を突き出した手首に巻き付いた。
そして、そのまま酒の女神を引きずり倒した。７８フィート（約２３．８メートル）もの巨躯が叩きつけられる凄まじい衝撃に大地が揺れ、土煙が上がった。

「女将ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！？」

元常連３人組が、悲鳴を上げた。

「酒を作る事しか出来ない無能の貴女が、この私に喧嘩（ケンカ）を売るとは…。恐れ入りました！」

デイオスはそう言うと、再び何かを摘まみ、弄ぶ仕草を始めた。

「あ…！ああ…！？」

カルーナが眼を見開き、今度は快楽と羞恥で紅潮し出した。

邪神の「欲情の呪い」が、酒の女神にも向けられたのだ。

「アソコが…！私の淫核（おマメ）がぁ！？」

「一気に、果て狂わせて差し上げましょう…。虫どもの前で、無様な姿を曝しなさい！！」

クリクリクリクリクリクリクリクリ！！

デイオスが、呪いの力で酒の女神の淫核を弄ぶ。

「あんッ！？あっ…あはぁ！あーッ！？」

カルーナは嬌声を上げながら地面を転げ回り、身を蕩かすような邪神の淫技に悶絶した。

「わはぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」

カルーナが、身体を硬直させながら果てた。身に纏った橙色の布の、股の部分に恥ずかしい染みが滲み、広がっていく。

「私には、勝てない…。絶対に！」

勝利に酔いしれるディオスは、高笑いを始めた。

「…そんな！女将まで…！」

「これからよう、一体どうなるんだよ、俺達は…！」

ゴメス達３人の、そして人々の口から、絶望の声が漏れる。

「おばさん…！アイナあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ルーサの悲痛な絶叫が、ディオスの哄笑とともにシュニアの街にこだましたー。

狂宴　☆

邪神ディオスに敗北を喫した、２柱の巨神。酒の女神カルーナと、そして勇気と武の女神アイレスは、瓦礫の山の上に無残な姿を晒していた。

邪神の髪より、こしらえられた縄。黒く細い、何物よりもしなやかで何物よりも頑丈な縄によって、カルーナはうつ伏せで後ろ手に、アイレスは無残にも大きく開脚させられて、まるで犬が主人に服従の仕草をするような態勢で縛められていた。

白銀の美少女神は、呪いによる強烈な愛撫の前にイき果てて、気を失ったままだ。

ディオスは近くの手頃な建物の上に腰を下ろし、そんなふたりの様子を、実に愉快そうに眺めていた。

「何で、こんな酷いことを…！？」

シュニアの街の惨状を目の当たりにした酒の女神は、縛られながらも邪神に問うた。

「フフフ…ハハハハハ！アハハハハハハ！！」

ディオスが嗤い出した。

「貴女に教えたところで、どうなると言うのです？役立たずの上に、縛られて身動きひとつとれないでいる貴女に！？アハハハハ

ハ…！」

「答えろってんだよ！？」

自身を「無能」と罵られた事よりも、無辜（むこ）の者達の命を奪っておきながら全く悪びれた様子を見せないディオスの非道ぶりに、カルーナは怒りと苛立ちを露（あらわ）にして叫んだ。

「…穢（けが）したいのですよ、この地上をね」

邪神は嗤うのを止めると天を仰ぎ、ポツリと呟いた。

「…何ィ！？」

「聞こえなかったのですか？この地上を穢れと悪徳、背徳、罪で満たし、滅茶苦茶（めちゃくちゃ）にしてやりたいのですよ…。お前達が、わざわざ身を削ってまで守り抜いた、この地上をね！！アーッハッハッハッハッ！！」

「…神々（みんな）が黙っちゃいないぞ！？」

「さあねえ…？そうなったら、逃げ果（おお）せるまでですよ。世界の果てでも、天空の彼方でも、冥府の底でも…。どうせ…」

どうせ、私など。ディオスは小さく吐き捨てると俯いて黙り、地面を見つめた。相変わらず顔の半分が長い髪によって隠された、彼女の表情を窺（うかが）い知る事はできない。だが青ざめた唇を噛みしめるその様は、苦渋に満ちた顔をしているであろう事は見てとれた。まるで、大きな憎しみと哀しみ、そして深い孤独に打ちひしがれているかのような—。

時間にして、数分ほどだろうか。長い沈黙の後、邪神はふと立ち上がった。

「…何のつもりだ！？」

デイオスは、怪訝そうに叫ぶ酒の女神を馬鹿にした態度で一瞥すると、身に纏っているボロ布に手を掛けた。そして、実に蠱惑的な仕草をしながらゆっくりとそれを脱ぎ捨てた。

邪神の、まるで腐りかけた死体のように黒ずんだ肌の全てが、露わになった。

「お、おい！バカヤロー！！誰がお前の汚いハダカなんか…！？」

邪神を罵倒しかけた酒の女神は、目の前の信じられない光景に口をあんぐりと開けた。

デイオスの身体つきは、冥府にいた頃のみすぼらしいものから大きな変貌を遂げていた。

棒のようだった細長いだけの手足は、まるで羚羊(カモシカ)の四肢のようなしなやかさとメリハリとを得ていた。乳房とも言えぬほど真っ平らだった乳房は熟して実り、美しい釣り鐘型を形作っている。それは豊かに実りながらも、均整を壊す事の無い絶妙な大きさを誇っていた。痩せぎすだった身体には程よく脂肪が乗り、ガサガサに荒れていた肌は潤い、張りと艶のある瑞々(みずみず)しさを得ていた。そして、扁平だった小さな尻は丸く大きく張り出し、女性らしい実に肉付きの良いものへと成長していた。

全裸になったデイオスは、艶めかしい仕草で長い髪をゆっくりと掻き上げた。

常に髪によって隠され、神々（タイタン達）もはっきりと窺（うかが）う事ができなかったデイオスの素顔が明らかになった。

線の細い、まるで氷の様な冷酷そうな美女の顔。吊り上がった細い眉、爬虫類のような切れ長の眼。錆色の、三白眼の瞳。細く、繊細な鼻筋。そして黄ばんだ歯を剥き出し、常に残酷そうな笑みを浮かべた、青ざめた薄い唇―。

「な…!? 美体術店（エステ）にでも行ったのかぁ!?」

酒の女神は、いつの間に!? とすっとんきょうな声を上げた。

「長年喰らい続けた『竜どもの母』の血肉と、あのマルメスとかいう女のねじ曲がった罪深き心とが、私の肉体（カラダ）をここまで育んでくれたのですよ…」

デイオスが、美しく変貌した自分の肢体に見とれながら言った。

「フフフ…」

邪神は、自分の両乳房に手を伸ばし、そっと触れた。

「私の肉体（カラダ）…」

邪神は上気した顔で、片方の手を自分の尻に手を伸ばし、その豊かな肉をそっと撫で回した。

豊満にして美しく、そして淫靡な肉体。永きに渡って身が焦がれるほど欲したそれを、ようやく手に入れたディオスは歓喜にうち震えた。

――もう誰にも、この私を醜女などと呼ばせるものか…！！

「今の私の前には、あのウィナスでさえ遠く及ばない…」

邪神は、愛と美の女神の名を口にしながら、自身の肉体の女性の象徴――乳房と尻を愛でた。

「地上の皆さん、視姦て下さいな。美しい、私のこの肉体…」

邪神は、自身の肉体を優しく抱き締めると、クネクネとくねらせた。

「愛しい、私の肉体…この、魅力的な乳房も」

邪神は、自身の灰色の両乳首を、指で軽く弾いた。

「あんっ！？」

邪神は嬌声を上げ、ビクン！と仰け反った。実り豊かな双丘が、ブルンっ！と揺れた。

「ああ…」

邪神は、甘い溜め息をつくと自身の尻を大きく突き出し、クネクネと悩ましげに振った。豊かな尻肉が、ブルン、ブルン、と揺れた。

「この、蠱惑的なお尻も」

邪神は、２つの尻肉に手を伸ばすと、大きく押し広げた。

「私のこの、糞をひり出す穴も…！」

邪神の灰色の肛門が、白日の元に晒された。邪神は、大勢の人々に視姦される悦びに、菊座をキュウッ！とすぼませた。

「私の、女陰も…！」

邪神は仁王立ちになると、自身の下腹部をそっと撫でた。控え目に生えた、黒い滑らかな陰毛。その下には、灰色の薄い２枚の肉襞が柔肉から顔を覗かせている。その合わせ目─肉襞が合流する頂きの部分には、視姦される興奮によりすっかり欲情し、漲りきった灰色の「それ」が隆々とそそり勃っていた。

「私の、子を成しひり出す為の大切な穴も…！」

邪神は、大きく股を広げ、自身の指で灰色をした秘裂を押し広げた。膣口がパックリと大きく開き、白濁した淫らな液体をダラダラと垂らす。そして、目合いでもするかのように、カクカクと腰を揺さぶった。

「…この、快楽を貪る為だけにある、罪深き肉欲の権化もぉ！私の肉体の中でも、最も淫らなこの肉の突起もぉ！罪深き故に巨大になってしまった、隆々とそびえる私のこの淫核もぉ！！」

邪神ディオスは勃起しきった自身の淫核を、キュウッと摘まみ上げた。

「あぁぁあッ！？」
ディオスは、大きく仰け反り、戦慄いた。
「はあ…はあ…はあ…」
邪神は眼を潤ませ、悩ましげに喘いだ。そして、足で瓦礫の山を退かしながら、ゆったりと地べたの上に仰向けに寝転がった。
「…もう、辛抱堪りませんわ！！」
邪神ディオスがそう叫ぶと、彼女の髪の毛が逆立ち、無数の蛇の尾のように幾つにも分かたれてうねり始めた。
邪神は、丁度良い位置にあった民家の1つに、両腕で腕枕を作りながら寄りかかった。そして、大きく股を広げて秘裂と肛門を曝け出すと、こう叫んだ。
「ああ…！皆さん！どうか御覧になって！！視姦てぇ！？私が美しい私の肉体を責め嬲り弄ぶ、淫らしい姿をぉ！！この肉体を蹂躙し、穢し、犯し尽くす、背徳的で魅力的な様をぉ！！」
まるで蛇のようにうねり、クネクネと蠢くディオスの髪の毛の蔓。それらが一斉に彼女自身に襲いかかり、纏わりついた。
「ああんっ！！」
髪の毛が、ディオスのどす黒い乳房に巻きついた。

「あっ！うぅん！！くぅううううん！？」

乳房に巻きついた髪の毛は、優しく柔らかく双丘を締め上げ、揉みしだく。

「あぁ…あはん…！」

髪の毛の先端が、双丘の頂き―すっかり勃起しきった乳首とその周囲―乳輪をなぞり、くすぐり上げた。

スリスリ…スリスリ…サワサワサワ…。

サラサラとした毛先が、ゆっくりと、じっくりと邪神の乳頭を刺激する。残忍で冷酷な美女神は、胸からの鮮烈な快楽により嬌声を上げ、顔を蕩けさせた。

「あはっっっっ…！？」

デイオスは、上体を仰け反らせて数瞬ほど硬直した。

「私としたことが…。前菜で、軽く果ててしまいました。まだ、主菜（メイン）も頂いていませんのに…」

デイオスが喘ぎながらそう言うと髪の毛の蔓が一条、彼女の下半身へと向かっていった。

いよいよですね、と邪神はこれから味わうであろうめくるべく快楽への期待に甘い溜め息を漏らし、悦びの笑みを浮かべた。

蔓の先端が、邪神の秘裂の頂きを、彼女自身の親指の先端ほども

ある、固く固く勃起した「それ」をシュッ！となぞり上げた。
「あぁッッッッッッッッッ！？」
ディオスは甘い悲鳴を上げ、ガクンっ！と腰を浮かせた。
サワサワ…サワサワ…。
蔓の毛先が、固く凝った肉の突起の輪郭を確かめるかのように、敏感な粘膜をジワジワと撫で回す。
「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！？」
邪悪なる美女神が、自分自身を嬲る快楽に悶え狂う。どす黒い肌に、じっとりと汗が滲む。
「あはぁぁぁっっっ！？」
髪の蔓の先端が、恐る恐るディオスの淫核に巻きついた。そして、労るようにそっと扱（しご）き出した。
「…いい！とても…いい！！さいこうですぅぅぅぅ！！」
お預けを食らっていた他の蔓達が、再びディオスの肉体を求めて邪神ににじり寄っていく。
「ああ…。乳も！膣内（なか）も！肛門（おしり）もぉぉぉぉぉっ！！」
ディオスの号令により、髪の蔓が一斉に彼女の性感帯に向かって襲いかかった。

再び乳房に巻きつき、乳頭の先端をツンツンと突く。
蔓が何本も複雑に絡み合い張り形となって、どす黒い美女神の灰色の柔肉を抉じ開け、押し入り、抉り、膣内（なか）を掻き回す。
蔓の先端が肛門の皺の1本1本までなぞり上げ、真ん中の入り口をクルクルとくすぐると、ゆっくりと腸内（なか）へと侵入していく。
「あはぁ…！我が髪よ…蛇となり…。しゃぶってぇ！！滅茶苦茶（めちゃくちゃ）にしてぇぇぇっ！！」
乳首と淫核に纏わりつく髪の蔓の先端が、蛇の頭と化した。そして、幼子が乳を飲むかの如くデイオスの3つの過敏な突起を啜り、ねぶり、しゃぶり上げた。
「あ…あひぃぃ…！！」
だらしなく垂れ下がり、涎を垂らすデイオスの舌に、髪の蔓が絡みつく。
「いひぃぃぃぃぃっ！！もっろお！ひゃぶっへぇ！！おかひへぇぇぇ！！わらひを…めひゃふひゃにひれぇぇぇぇ！！」
邪神は歓喜の涙と涎とで、その美貌をグチャグチャに汚しながら悶え狂い、よがり狂った。

＊

酒の女神カルーナはあまりにも悍ましいデイオスの痴態に、言葉

を失ってその狂乱をただただ呆然と眺める事しか出来なかった。

「んっ…！？」

デイオスのあまりにも激しい嬌声により、気を失っていた少女神アイレスは、ようやく目を覚ました。

そして、大きく目を見開き硬直した。

「あ…ああ！？」

目の前で繰り広げられる、悍ましい光景。邪神デイオスの自涜行為。

それはまさに自分がしていた、あの恥ずべき、忌むべき行為そのものではないか。

自分の髪を蛇に変え、淫らな、恥ずかしい突起をしゃぶらせ。あの、冥府で見たガンジャと同じように、子を産む為の大切な穴に卑猥な異物をねじ込ませ、咥え込ませ。排泄物を出す為の穴を、前の穴と同じように犯させ。

アイレスは、目の前が真っ暗になった。

ーあたし、あんなに醜い悍ましい事をしていたんだ…！！

皆に知られてしまったら、どうしよう。大神殿にいる母と、母の友人達、主神オルディナ様に。おっちゃん達に、カレンおばちゃんに、そして、1番大切なルーサに…。

もし、皆にばれてしまったら？軽蔑されてしまうかも知れない。母に、そんな子はウチの子じゃない！と言われてしまうかも知れない。皆から、口を利いて貰えなくなるかも知れない。大神殿を追い出されるかも知れない。…ルーサに、嫌われてしまうかも知れないー。

ーあたし…何て事を…！！

白銀の美少女神は、快楽に負けて禁じられた行為を行った事。そして、それを一度ならず何度もしてしまった事を、激しく後悔したのだった。

＊

「あはッ！？あはぁぁぁぁぁぁぁッッ！！いひぃぃぃぃぃ！！ひもひいひぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっっ！！」

自分で自分の全身を責め嬲るデイオスの、目を覆いたくなるほどの痴態。

髪よりこしらえた蛇の頭に、乳首を、淫核を、ちゅうちゅうとしゃぶられ、ねぶり回され、舌の先で転がされ。

髪よりこしらえられた張り形で、秘裂を犯され、淫水を掻き出され、膣壁を抉られ擦り上げられ。

自らの髪によって、尻の穴を掘られ。

レロレロ！チュパチュパ！チュポチュポ！

ズッ！ズッ！グチュ！グチュ！ジュポ！ジュポ！

グリグリ！グニュグニュ！ヌポヌポ！

「イふぅ！…はへりゅ！！もう…はへへひまいまふぅ…！！」

邪神の肉体が、心が、絶頂へと一気にのし上げられていく。

「はへりゅ…はへまふ…！！みなひゃん…みへぇぇぇ！！」

その直後―。

「いびゅううううううううぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっっっっ！？」

ディオスのどす黒い肉体が弓のように仰け反り、硬直し、数瞬の後に崩れ落ちた。

ヒクヒクヒクッッッ！！

灰色の秘裂が激しく痙攣する。

キュキュキュキュゥッッッ！！

灰色の肛門が、収縮を激しく繰り返す。

1番の性感帯である淫核は、大いに歓喜し、うち震え、ピョコピョコと跳ね回った。

「はあ…はあ…あはぁ…」

黒ずんだ肌を汗みずくにし、髪を顔に張りつかせたディオスは、恍惚となって最高の快楽の余韻を愉しんだ。

先ほどまで自分の膣を、肛門を貫いていた髪の蔓の束がフラフラと蠢き、彼女の口へと向った。

ディオスは今まで自分を犯していたそれを口に運ぶと、うっとりとしながらさも美味そうに舐め、ねぶった。

「これが、私の味…。嗚呼…まるで、甘露のよう…！！」

邪悪なる美女神ディオスによる、彼女自身のための狂宴はひとまず終わりを迎えたのだった。

屈伏　☆

狂宴＝自らの肉体を総動員した、世にも悍ましい自涜を終えたデイオスは、満足そうな笑みを浮かべながらゆっくりと立ち上がった。

「この色キ〇ガイのヘンタイめ！何てモノ見せるんだッ！？」

「…フン！」

デイオスは、相変わらず減らず口だけは達者な酒の女神からの抗議を鼻で嗤った。そして好色そうな笑みを浮かべて舌なめずりをしながら、顔も身体も硬直させている囚われの少女神の元へと近づいていった。

「クックックックッ…」

「お、おい！！アイレスに、一体何を！？」

「貴女は、黙って見ていなさい…」

デイオスはカルーナを一瞥すると、髪の縄によって縛られた白銀の女神を抱き起こし、その背後に座り込んだ。

「や…、やめろ！離せ…！！」

「麗しの女神様、御覧になって頂けましたか？私の、淫らな美しい姿を…」

デイオスは、アイレスを優しく抱きよせ、その耳元で囁いた。

「…今私が行っていたのは、『自涜』と言うのですよ？自分で自分を辱しめ、涜す行為…。フフフ、御存知でしたか？」

「し、知らないッ！！」

アイレスは、顔を紅潮させながら叫ぶと、邪神から顔を背けた。

「そうでしょうねぇ…。高貴な『武の女神』であらせられる貴女様は、このような卑猥な行為とは無縁でしょうからねぇ…」

デイオスはニヤニヤと厭らしい薄笑いを浮かべながら、白銀の女神の耳元で囁き続けた。

「と、当然だッ！！」

「…しかし貴女様は、先程からずっと顔を赤らめて、何やらモジモジしていらっしゃる…」

「…！？」

「…まさかとは思いますが、貴女様は今私が行っていた事について、実は御存知だったのでは？」

「そ、そんな訳ないだろ！？」

アイレスはよりいっそう顔を紅潮させ、狼狽えながら叫んだ。

「…まさか！嗚呼、まさかそんな…！！実は貴女様は、密かにこ

の穢れた淫らな行いを…」

「し、してない！！するわけ…ないだろ！？」

「…でしょうねぇ。穢れに穢れた『不浄の女神』である私などとは違って、貴女様はあの清廉潔白な、お高くとまったブーボーの娘。『実はしてました』なんて、口が裂けても言えませんものねぇ…？」

「お、おい！デイオス、お前まさか…！？」

ふたりのやり取りを見ていたカルーナの心に、不安がよぎった。その不安は残酷にも、今まさに的中しようとしていた。

「後生だよ！！私はどうなってもいい！その娘だけは勘弁してあげて！！花も恥じらう年頃だよ！？」

「…貴女では、意味が無いのですよ。私の邪魔をして下さった、この憎たらしい小娘でないと…」

デイオスは、アイレスに告げた。

「貴女様が仰られた事が嘘か誠か、貴女様のお肉体に直接お聞きし致しましょう…！」

「！？…やだ！！やだあぁぁぁ！！」

アイレスは頭を大きく振り回し、身体を捩った。まるで駄々っ子のように泣きじゃくりながら、邪神の抱擁から逃れようと死に物狂いで抵抗した。

「やめろーっ！！このビンボー神ーッ！！チリ神ッ！！便所神ーッ！！ウン子ーッ！！」

カルーナもせめてもの抵抗として、必死になってディオスに罵倒の言葉を浴びせた。

「…何ですって！？」

アイレスを辱しめんとするディオスの動きが、一瞬止まった。そして、まるで悪鬼のような凄まじい表情を浮かべながら、カルーナを睨み付けた。

「何度でも言ってやるぞ！？クッサイ、クッサイ、ウン子ヤローー！！」

カルーナにとどめの一言を浴びせられたディオスの肩が、ワナワナと震え出した。「臭い」「汚い」そして「醜女（しこめ）」—。それらは彼女に向かって決して言ってはならない、「禁じられた言葉」だったのだ。

「…よくも、言ってくれたわね！！」

ディオスは、憎しみに満ちた低い声で小さく呟いた。そして。

「ぎゃあ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！？」

怒り狂ったディオスの「欲情の呪い」が、カルーナの股間を再び襲った。先ほどのような、快楽によって昇天させるための淫技ではない。呪いによる邪神の見えざる指先は、酒の女神の淫核を思い切り摘み上げて押し潰し、力一杯捻り上げたのだ。

「い゛だい゛‼い゛だい゛‼ちぎれるうぅぅぅッツッ⁉」

鋭く激しい痛みが、カルーナの敏感な突起を容赦なく襲う。あまりの苦痛に酒の女神は泣き叫びながら身を捩らせて悶え狂い、釣り上げられた魚の如く跳ね回った。

「お前達は…、何時もそうやって私を…！！」

「ぎゃひい゛ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッツッ⁉」

ディオスが止めの一撃とばかりに、酒の女神の淫核を渾身の力で爪弾く。強烈なる痛撃を柔肉に食らったカルーナは凄まじい痛みに悶絶し、身体をビクビクと痙攣させると白眼を剥いて大地に崩れ落ちた。

「さてと…」

酒の女神が無様に失神する様を見届けた邪神は、再び厭らしい笑みを浮かべながら白銀の女神に告げた。

「次は、貴女様の番ですね？フフフ…」

「…いや！！いやあぁぁぁぁぁっっっ！！」

「邪魔なお召し物は、脱がせてしまいましょう…」

ディオスはそう言うと、アイレスの鎧―胸当ての部分に手をかざした。

「朽ちよ！」
白銀色に輝く金属のプレートが、みるみるうちに錆びつき、腐蝕し、ボロボロと崩れ落ちていく。
「ああッ！？」
可愛らしいサクランボを乗せた、たわわに実ったミルク色の双丘が、ブルンッ！と勢いよく飛び出した。
「これはこれは！麗しの女神様に相応しき、何と美しき乳房！」
デイオスは、アイレスの乳房を揉みしだいた。
「このような美しき乳房から乳を飲める赤子は、きっと三国一の果報者でしょうねぇ…」
「いたい！いたい！やめてぇ！！」
産み落とした幼子を育むための、繊細な器官を邪神の手により乱暴に弄ばれるアイレス。白銀の女神は、その苦痛に思わず顔を歪めた。
「あらあら、もうこんなにおっ勃（た）てていらっしゃる…」
先刻の、呪いによる痛烈な愛撫により、アイレスの乳首はビンビンに勃起してしまっていた。デイオスは、その敏感な２つの突起を優しくそっと摘まみ上げた。
「やあぁっっっ！？」

桃色の、肉でできた2つのサクランボを摘ままれたアイレスが、ビクン！と身体を震わせる。邪神は、その敏感な果実を優しく丁寧に擦り、そっと揉みほぐした。

スリスリ…スリスリ…。クニクニ…クニクニ…。

「やあぁっ！！いや！！いやぁっ！？…あはぁっ！？」

必死になって身を捩り、揺すって抵抗するアイレスの動きが、次第に弱々しくなっていく。白銀の女神の、愛らしい桃色の唇から甘い溜め息が漏れ始める。胸の2つの突起から、ムズムズとした何とも言えぬこそばゆさが発せられ、幼い美少女神の全身へと広がる。胸から生じる官能的な感覚が、アイレスの肉体（からだ）をゆっくりと蝕んでいく。

「ああ…！あはっ！？あぁぁぁぁんっ！？」

「…おやおや、可笑しいですねえ?淫らとは無縁の筈の、『勇気と武の女神』様が胸を責められて気持ちよくなられて、よがっていらっしゃる！」

「…きもちよく…なんか…あぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」

「貴女も、中々に強情ですねぇ？…さっさと認めてしまったら如何です？」

デイオスは細くしなやかな指先で、アイレスの乳首を優しく弾き出した。

「あんっ！…あんあーっ！？あはーっっ！？」

「それそれ！」

残酷なる美女神の愛撫が、初な美少女神を甘い官能の世界へと追いつめていく。

クリクリクリクリ…！

アイレスの胸を嬲るデイオスの指先が、白銀の女神を一気に責め落とす。

「んあ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッツツ！？」

汗みずくになったアイレスの肉体が激しく痙攣したかと思うと、グッタリと脱力してしまった。

「あらあら…。ひょっとして、胸への戯れだけで果ててしまわれたのですか…？」

邪神は、やれやれこれでは先が思いやられますね、と嗤いながらアイレスの肉体を守る最後の砦ー腰回りを覆う草摺りへと手をかざした。

「…だめ！…おねがい…、それだけは！…それだけは…！！」

アイレスは泣きじゃくって必死に懇願するも、デイオスは無慈悲にも「腐敗の呪い」を発動させた。

「フフフ…。朽・ち・よ！」

「やめてえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

銀色に輝く草摺りが、あっという間に朽ちて崩れていく。アイレスの全てが、とうとう邪神とカルーナ、そしてシュニアの街の人々の前に晒されてしまった。

「見ないでぇ！！おねがい…！！見ないでぇぇぇ！！」

髪と同じ色をした、白銀に輝く体毛に守られた美少女神の女性器。アイレスの秘裂は乳首への痛烈な愛撫により欲情し、桜色の小さな2枚の肉襞を綻ばせ、真珠色の蜜にまみれてしまっていた。その下に咲く桜色の愛らしい菊の花も、その周囲に銀色の陰毛をチョロチョロと煙らせながら、キュウッとすぼまる。

「皆さんに視姦て頂ける、折角の機会ですのに…。そんなにお騒ぎになられるのなら、五月蝿いお口はこう致しましょう…」

ディオスはそう言うと、自身の青ざめた唇をアイレスの桃色の唇へと重ね合わせた。

「ん゛ん゛っっっ！？」

ディオスの舌が、アイレスの唇を抉じ開け、白銀の女神の口内に侵入してくる。まるで玉子や生ゴミが腐ったような、不浄の女神の凄まじい口臭がアイレスの口内に流れ込み、肺を侵す。そのあまりの臭いに、アイレスは何度も嘔吐き、戻しそうになった。

「うぅっっっ！？ゲホッ！！ゲホッ！！」

「少しは、静かになられたようですね。では…」
　デイオスはそう言うと、長い髪を逆立てた。邪神の髪が蛇のようにうねり、幾筋にも分かれてアイレスの身体に巻きつき、軽々と白銀の女神の下半身を持ち上げる。そして、哀れな少女神の股間を全面に突き出させ、人々の前に晒させた。
「さあ地上の皆さん、御覧なさい。これが、麗しの女神様の全てですよ？」
　デイオスはアイレスの肩越しに、白銀の女神の女性器を指し示した。
「ククク…。まだまだ年端もいかない小娘の癖に、恥ずかしい毛をこんなに生やしていらっしゃる…」
「いやあぁぁぁぁぁっっっ！！いやあぁぁぁぁぁっっっ！！」
　邪神はアイレスの秘裂に手を伸ばすと、指でくぱぁ、と押し広げた。
「これが麗しの女神様の、男と目合（まぐあ）う為の淫（いや）らしい穴…」
　アイレスの膣口が、その上に位置する尿道と共に晒された。愛らしい肉の穴は、白濁した淫水を滲ませながらピクピクと痙攣している。
「やだっ！！やだやだ！！やだあぁぁぁぁぁっっ！！」

「フフフ。そして…」

ディオスが、自身の指をしゃぶる。指を唾でたっぷりと湿らせると、髪の蔓でアイレスの尻を押し広げ、美少女神の肛門へと指を近づけた。

「これが、麗しの女神様の…」

ディオスの指が、桃色の愛らしい菊座の中心を突く。

「あぁッ！？」

アイレスの身体が、ビクン！と弾んだ。

「汚いモノをひり出す、汚い穴ッ…！！」

邪神は美少女神の肛門へ、指を一気に挿し入れた。

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っっっ！？」

女性器を、続いて排泄口を大勢の目の前に晒され、指で貫かれる。あまりの羞恥に、アイレスは身体を震わせ、悲鳴を上げた。

「皆さん、御覧になりましたか？貴殿方が崇め奉る神々(タイタン)の肉体(からだ)にも、このような淫らな部分や、穢れた部分が在(あ)るのですよ！？」

ディオスはそう言うと、アイレスの肛門から指を引き抜いた。

「おお…！何と香しい…！！」

邪神はアイレスから引き抜いた指を鼻に近づけ、美少女神の腸内の臭いを愉しんだ。

「あ゛…あ゛…！？」

肛門に指を挿入れられ、その臭いを嗅がれる。アイレスはあまりの事に顔を真っ赤に燃え上がらせ、ハラハラと大粒の涙を溢すのだった。

「さて、ではいよいよ…」

ディオスは遂に、美少女神の秘裂の頂点に生えた罪深き小さな肉の突起＝アイレスの快楽器官に狙いを定めた。

「…だめ…、おねがい…やめて…」

邪神の羞恥責めにより心を抉られ、折られかけているアイレスは、弱々しく途切れ途切れに懇願した。

「さあ皆さん、御覧なさいな！？この麗しの女神様の、快楽を貪るためだけにある罪の証しを！淫らな、穢れに穢れた肉の芽を…！！」

アイレスの懇願虚しく、ディオスは美少女神の淫核を指し示した。

呪いの力によって弄ばれて果てさせられただけでなく、乳首責めによる快楽や膣口や肛門を晒される恥辱を次々と味わせられたアイレス。白銀の女神の「そこ」は持ち主の意思とは裏腹に、それらを全て快楽として受け取り、この上なく欲情して芽吹いてしまっていた。ぷっくりと充血し、固くしこり、薄桃色の小さな小さな顔を、

包皮の鞘から恥ずかしげに覗かせてしまっている。

「先刻よりずぅっと『ここ』を芽吹かせて、大きく膨らませーギンギンに、淫らしく勃起なされていらしっしゃる…！！」

ディオスは「勃起」という言葉を強調して、アイレスの淫核を街の人々に見せつつ語りかけた。

「ああ…！してない…！！してない…！！」

アイレスは頭を激しく揺さぶり、必死になって否定した。

「では、これが貴女様の平時の状態だと！？すると貴女様は、実に大きなモノをお持ちでいらっしゃる！このような巨大なモノをお持ちとは、貴女様も中々に罪深い…！！」

「ちがう！！ちがう！！」

「では、一体どちらなのですか！？まさか、『どちらも違う』と仰られるつもりではありませんよね…？まったく、貴女様は高貴な女神様であらせられるのに、とんでもない嘘吐きでいらっしゃる…」

邪神は、白銀の女神の耳元で、そっと囁いた。

「本当は、なされているのでしょう…？『じ・と・く』を…！！」

「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？してない！！してない！！してない！！」

「この期に及んで、まだシラをお切りになさるつもりですか…？

私は穢れと罪を司ると同時に、『罰』も司る神…。貴女様のような嘘吐きには、罰を下しませんと！！」

デイオスは、欲情しながらも怯えて震えている小さな小さなアイレスの根元を摘まみ、ずり下ろした。

「あ゛ーっ！？」

美少女神の淫核は包皮の衣を剥かれ、丸裸にされてしまった。完全に露出させられたアイレスの肉芽は、陽の光を浴びてキラキラと、磨かれた珊瑚のように美しく輝いていた。

「ククク…。淫らで嘘吐きな貴女様には、このような責め具が相応しい…」

デイオスは自らの髪を1本引き抜き、ふうっ、と息を吹きかけた。

邪神の髪はひとりでにアイレスの過敏な肉芽の根元に巻きつき、小さな黒い環になった。

「いやあ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」

アイレスは、淫核の根元を、邪神の髪でできた環によって括られてしまった。

「では、始めましょう…」

デイオスがそう告げると、アイレスを括る黒い環が、細かく振動し始めた。

「あああ！？…なに…これぇ！？」

アイレスの肉真珠が、ブルブルと根元から揺さぶられる。今までの、擦られたり揉まれたり等とは一味違う、未知なる刺激。幼い女神は、初めて味わう未知なる快感に戸惑った。

―ブルブルしてぇ…きもちいい…！？

「…やああ…！？…あっ！？あぁぁんっ！うぅっ！？…うふぅぅぅぅん！？」

アイレスの顔が、夢見心地なうっとりとした表情に染まっていく。切れ長の眼、空色の澄んだ瞳が宙を泳ぎ、次第に、彼方にある楽園を見つめ出す。

―ああ…きもちいい！きもちいいよぉ！！もう…とけちゃいそう…！！

小さな肉の真珠を細かく揺さぶられ、その振動が快感としてアイレスの脳へ、そして脳から全身へと伝えられる。白銀の女神は、淫核から発せられる快楽を存分に味わい、酔いしれていた。アイレスはそのあまりの心地よさに、全てがもう、どうでもよくなり始めていた。

ヴヴヴヴヴヴヴヴ…。

黒い環は無機質に、無感情に、アイレスの快楽器官を揺さぶり、刺激し続ける。ミルク色をした、美少女女神の滑らかな肌からじっとりと汗が滲み出る。白銀の女神は甘く切ない吐息と嬌声とを上げつつ、まるで犬のようにだらしなく舌と唾液を垂らして、顔をトロト

口に蕩けさせる。

ーみんなの前で、イかされちゃう…！？

アイレスの脳内に一瞬だけ、公衆の面前で痴態を晒す羞恥と恐怖、屈辱がよぎった。だが、それも頭の中を桃色の靄(もや)に覆いつくされて、すぐにかき消されてしまった。

「あぁ…！！あ…！？あ…！？…あ！？…あ！？」

あどけない少女神の肉体(からだ)にがこもり、まるで石像のように硬直する。アイレスは、絶頂を迎えようとしていた。

ーい゛…イ゛ぐ…？？？

もう少しで果てる、その寸前で黒い環がピタリとその動きを止めてしまった。アイレスのの下半身を何とも言えぬもどかしさが襲う。

「あ…！あ…！どうして…！？」

「ククク…。何度も何度も、果てさせられる寸前でお預けを食らい、満たされぬ肉欲に苛まされ続ける…。それが、貴女様に下される罰なのですよ？淫らな嘘吐き女であらせられる貴女様には、実に相応しい…！ただし…」

邪神は下卑た笑みを浮かべながら、続けた。

「正直に、『自涜』をなされていたと仰って頂ければ、御褒美にそれを外して存分に果てさせて差し上げましょう…」

「う…、うう…！！…し…、してない！！『じとく』…なんて…、そんなこと…するもんか！！」
「ふうん…？宜しいのですか？白状して頂ければ、ずうっと満たされぬ苦しみを味わい続ける事になるのですよ？」
「いうもんか！！いうもんかぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「クックックッ！！威勢だけはよろしいですが、何時までお耐えになられますかねぇ…！？」
ディオスが言い終わらないうちに、黒い環の震動が、再びアイレスの下半身に襲いかかった。
「わ゛はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」
不意討ちを食らった白銀の女神は、悲痛な嬌声を上げてグンッ！と全身を大きく仰け反らせた。
「あ゛ーッ！？イ゛ぐぅーッ！？イ゛ぐぅーッッッ！？」
先程よりも遥かに強い震動が、アイレスの股間を責め立てる。白銀の美少女神の肉体(からだ)は、あっという間に快楽への頂きへと登りつめていく。
「あ゛あ゛ぁ゛ッッッ！？」
絶頂を目の前にして、再び黒い環の動きが止まる。アイレスは、またしてもお預けを食らってしまった。

「そん゛なぁぁぁっっっ！？や゛だ！！や゛だぁぁぁッッッ！？…イ゛ぎだい゛よ゛ぉ゛ぉ゛お゛ぉ゛ぉ゛ッッッ！！」」

「でしたら、さっさと白状なさってしまえば良いのに…」

デイオスは、果てたくて堪らなくて泣きじゃくるアイレスの顔を見ながら、冷酷な笑みを浮かべた。

「や゛あ゛ぁぁぁぁぁッッッ！？や゛あ゛ぁぁぁぁぁッッッ！？」

美少女神の淫核を括る環が、また震え出す。だが、今度は極めて微弱な震動だ。焼けるような焦燥感と、耐えがたいもどかしさが、アイレスの心と肉体(からだ)を責め苛む。

「お゛ね゛がい゛！！イ゛がぜで！！イ゛がぜでぇ゛ぇ゛ぇ゛！？ごわ゛れ゛ぢゃ゛うよ゛ぉ゛ぉ゛！？」

「ならば、白状なさいな？『自涜を、恥ずかしい淫らな遊びをしていました』、と」

「い゛や゛だあ゛！！…ぞれ゛だけは…い゛や゛だあ゛！！」

邪神は、仕方ないですね、と呟いた。アイレスの股間に、１条の髪の蔓が伸びた。筆の穂先のようになった髪の先端が、白銀の女神の快楽器官をなぞり、くすぐった。

サワサワサワ…。コチョコチョコチョ…。

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ…。

「あ゛ーッッ！？あ゛ーッッ！？あ゛ん゛あ゛あ゛ーッッッ！？」

魔神ガンジャも悶絶し、悶え狂ったデイオスの髪責めと、黒い環による震動の合わせ技。当然、初（うぶ）なアイレスには耐えられるはずもない。凄まじすぎる快楽責めが、白銀の女神を絶頂へと追いつめていく。

「おっと、危ない！」

「あ゛ーッッッッ！？」

アイレスは、寸止めの責めを三度食らってしまった。もうちょっとでイける、その寸前のところで蔓の穂先が淫核から離れ、環も震えるのを止めた。

「あ゛…！あ゛…！あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ッッッ！？」

アイレスの中で、心の糸が切れた。自らの肉体を凶器として使われた、孤独な戦い。自らの、淫らな欲望との戦い。自分自身との戦いに、白銀の女神は遂に敗れてしまった。

ーイきたい！！気持ちよくなりたい！！

頭の中を、快楽への渇望で支配されてしまったアイレスは、とうとう言ってはならぬ禁断の一言を発しようとしていた。

「うう…。…て…ます」

「何でしょうか？声が小さくて、よく聞こえませんが…？」

「してます…！！…じとく…、してますぅぅぅぅぅぅぅっ！！…いやらしい、…おまたいじり…してますぅぅぅぅぅぅぅっっっ！？だから…、おねがい！！イかせて！！イかせてぇぇぇぇぇぇぇッツッ！！！」

アイレスは、絶対に知られてはならない恥ずべき忌まわしい秘密を、自ら暴露してしまった。

「…やっぱり、なさっていたのではないですか！」

邪神は、この大嘘吐きの淫乱娘めが！と、腰をガクガク揺らしながら泣きじゃくる白銀の美少女神を罵った。

「…ではそれを、どなたとの妄想に浸りながらなさっておられたのですか？」

「…うう」

アイレスは、口を閉ざした。

「…聞こえなかったのですか？『オ・カ・ズ』ですよ！御自分でなさりながら、妄想の中で目合う相手…。それは、貴女様の愛しい愛しい想い人なのですか…？」

「…」

「やはりそこまでおっしゃって頂かないと、御褒美を差し上げる訳には…」

「…ーサ」

「…え？どなたですか？」

「ルーサ…！ルーサのことを…、かんがえながら…うう…。…してましたあ！！…もういいでしょ！！おねがいだからイかせてぇぇぇッツッ！！！」

「ルーサ…。あの、エルフの小娘ですか…。まったく、散々勿体つけて…！やればできるじゃないですか。それでは約束通り、御褒美をくれてやると致しましょう…」

デイオスがそう言い終わると同時に、今までアイレスを苦しめていた黒い環があっという間に髪に戻った。そしてほどけて、美少女神の淫核を解放した。

「フフフ…」

デイオスの指が、アイレスの女性器に伸びる。

「ああ…！！」

白銀の女神は、ようやく訪れようとしている肉欲の解放への瞬間に顔を上気させ、期待の声を上げた。

邪神のしなやかな指先が、アイレスの小さな快楽の源を捉え、優しく柔らかく、そっと押し当てられた。

「あぁあんッ！？」

アイレスは下半身からの甘い衝撃に、嬌声を上げて身体を震わせた。

「…果てたくば、このまま貴女様自ら動きなさい。そう、目合い（まぐわい）をするように…」

「…は…はいぃっっっ！！」

デイオスに淫核を触れられたアイレスは、夢中になって腰を振りたくった。

「あ゛…あ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？ぎも゛ぢぃぃいいいいいいいいいッッッ！？」

幼くも快楽に目覚めてしまい、肉欲に支配される奴隷と成り果ててしまったアイレス。その穢れた罪深き肉芽が、邪神の指先によって捏ねくり回され、擦り上げられる。

否。自ら腰を振って快楽を貪る、その浅ましい様は、まさに自涜そのもの。アイレスは今まさに、邪神の指を使った自涜行為に耽っているのだった。

「クックックックッ…。どう腰を使えば、より感じる事ができるか…。貴女様御自身でそれを探り当てるのも、また一興…」

「あ゛ひぃ゛ぃ゛ぃ゛ぃ゛ぃ゛ッ！？い゛い゛！！い゛い゛よ゛お゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛ぉ゛！！！」

アイレスは我を忘れて腰を振りまくり、邪神の指先に小さな快楽器

官を擦りつけ続ける。グリグリと、上下に。左右に。時には円を描きながら、飢えた獣の如く。

「ぎぼぢい゛ぃ゛よ゛ぉ゛!!ぎぼぢい゛ぃ゛よ゛ぉ゛!!」

最早、「勇気と武の女神」の姿は何処にも無かった。アイレスは、肉欲に狂った一匹の獣（けだもの）と化していた。

「あ゛ぁ゛ーッッッッッ!?」

牝の性獣の、ミルク色をした滑らかな肌から、玉のような汗が次から次へと湧き出し、その肉体（からだ）をビッショリと濡らす。桃色の、2つの肉の花ー薔薇の花と菊の花もだらしなく綻びきり、肉薔薇から白濁した淫水がとめどなく吐き出される。凛々しく美しかった顔が、悦びにより垂れ流され続ける体液によって、グショグショのドロドロに蕩けきる。

「あ゛ーッッ!?…イ゛ぐ!!…イ゛ぐぅッ!!イ゛ぐイ゛ぐイ゛ぐイ゛ぐイ゛ぐイ゛ぐイ゛ぐ…!!!」

アイレスの肉体（からだ）が強張り、弓のように大きく反り返った。

次の瞬間。

「くあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああぁぁぁぁッッッッ!?」

アイレスは歓喜の絶叫を上げながら、果てた。

桃色をした、幼く可愛らしい秘裂と肛門とが、狂ったように激しくヒクつく。散々持ち主を悩ませ、苛み続けた快楽の源—薄桃色をした小さな愛らしい淫核が、ようやく得られた大きな悦びにうち震える。

白銀の少女の頭の中が空っぽになり、悦びで満たされる。空色の眼から歓喜の涙が溢れ、アイレスの頬を伝う。少女の肉体(からだ)心は天を舞い、素晴らしい桃源郷への門を潜った。

今までのものとは比較にならないほど、深く激しく、壮絶なる絶頂。少女は至福の一時を、心おきなく貪った。最高の悦びが、アイレスの肉体(からだ)を優しく包み込む。永遠とも思える、素晴らしき一瞬。

やがて少女の肉体(からだ)から、潮が引くように悦びが引いていく。頭の中に掛かっていた桃色の靄(もや)が晴れ、次第に冷静さを取り戻していく。

—鳴呼(ああ)…、あたしは…！？

気がついた時はもうすでに、何もかもが手遅れだった。

—あたしは…なんて事を…！？

淫らな欲望に負け、一時の快楽のために絶対に知られてはいけない忌まわしい秘密を、自ら暴露してしまった。そればかりか、最も大切な娘(ひと)—ルーサの事を想いながら穢れた行為に耽っている事までばらしてしまった。そして先程の邪神と同じ、いや、それ以上に浅ましく悍ましい醜態を晒してしまった—。

「…いや…！！…いや…！！」

アイレスの眼から、後悔の涙が溢れ出す。

「ちがう…！！…ちがう…！！…あたしは…、みだら…なんか…じゃ…！！」

「…今更、何を仰います！？いくら取り繕っても、もう無駄ですよ？此処に居られる、皆様が証人ですからね？…『勇気と武の女神であらせられるアイレス様は、所詮は自涜が大好きな、快楽に負けて公衆の面前で果ててしまわれるような、恥ずかしい淫乱娘でしかありませんでした』と…」

デイオスが愉快そうに、ニヤニヤとこの上ない悪意が籠もった笑みを浮かべながら、アイレスに囁いた。

「いやぁ…！！いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ！！！」

「アハハ！！アハハハハハハハハハ！！！アーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ…！！！」

白銀の女神は狂ったように泣き叫び、どす黒い邪神は狂ったように嗤い続けるのだったー。

破瓜　☆

邪神ディオスは、後悔と絶望に打ちひしがれるアイレスの姿を、しばらくの間堪能した。

ークク、こんなものはまだ序の口…。貴女を身も心も穢す余興の、本番はこれからですよ…！

ディオスは、泣き叫ぶ白銀の女神を再び抱き寄せると、その耳元で甘く優しく囁いた。

「お労しや、アイレス様…。大丈夫。大丈夫でございますよ。過ちというものは、誰にでもあるものなのです。きっと、貴女様の愛しい愛しい想い人、あのルーサという娘だって…」

「ル…、ルーサ…？」

「そう…。あの娘だって、きっと貴女様の事を想いながら、淫らな行為ー自涜に耽っているのかも知れませんよ…？」

「ルーサ…も…？」

ディオスはアイレスの顔を見つめ、優しく微笑みながら頭を撫でた。そして、白銀の女神の眼から溢れる涙を、指で拭った。

「そう。ですからー」

邪神は、嗤いながら言った。

「……あの娘にもっともっと、『オカズ』を提供して差し上げましょうね……！？」

アイレスは一瞬、頭の中が混乱した。言われた事の意味が分からなかった。そしてその意味に気がついた時、白銀の女神は恐怖に凍りついた。

「……やだ！？……やだ！？」

アイレスが怯え、震え出す。

「……御覧下さいな、アイレス様！」

デイオスは立ち上がり、髪の毛の蔓でアイレスの身体を持ち上げながら反転させ、己の女陰（ほと）を白銀の女神に見せつけた。

「……あ、ああ……！」

アイレスの、空色の眼が大きく見開かれる。

邪神自身の親指大までに勃起した淫核に、スルスルとデイオス自身の髪が巻き付いていく。髪は幾重にも巻きついて重なり、みるみるうちに黒く太く長いモノを形成していく。そして。

邪神の股間に黒々とそびえ勃（た）つ、男性器を模した塔が現れた。

大きく張り出した笠のような先端部分に、ゴツゴツと節くれ立った竿部分。それは、巨大なる張形だった。

デイオスの秘裂の頂きに雄々しくそびえる、女陰を貫き、犯すための凶器。邪神は、それをアイレスに見せつけながら、下卑た笑顔を浮かべて囁いた。

「フフフ…。貴女様は今日、自らあのような淫ら極まりない痴態を見せつけて、清廉潔白な女神を気取った、只の淫乱女である事がばれてしまいました。…丁度良い機会ですからこのまま、…オトナの女になってしまいましょう…!!」

それは、アイレスの破瓜を意味していた。

見るも悍ましい穢れた塔に、処女を奪われる。母とその友人達の愛情を一身に受け、大切に大切に育てられてきた美少女女神にとってあまりにも過酷な刑が、今下されようとしていた。

「やめてえぇぇぇぇぇっ！！やめてえぇぇぇぇぇっっっ！！」

大いなる後悔によって泣き叫んでいた白銀の女神が、今度は大いなる恐怖によって泣き叫ぶ。邪神は無慈悲にも、アイレスの身体を再度反転させた。そして、髪の蔓で支えながら背後から抱えると、凶悪な張形の先端を、その可憐な秘裂にあてがった。

「…おねがい！…おねがいします…！！…なんでもするから…、それだけは！それだけは！！」

アイレスは頭を揺さぶり、身体を小刻みに震わせ、必死になって邪神に懇願した。

「本当に、何でもなさって頂けるのですか…？」

「します！！します！！」

「そうですねえ…。ではー」

邪悪なる美女神が、残酷な笑みを浮かべながらアイレスに告げた。

「愛しい愛しいルーサ様へ、愛の告白をして頂けますか？『オカズ』に使ってしまうほど、好きで好きで堪らないんです、と。ククク、良い機会ではないですか…」

「…はい」

アイレスはひと呼吸置くと、意を決してルーサへの想いを告げ始めた。

「ル…ルーサ…。愛してる…」

「何ですか、その小さな声は！？もっと大きな声を出して頂かないと、ルーサ様に伝わりませんよ！？もっともっと、大きな声で！そして下品に、淫らに！！」

「うう…。…ルーサ！だいすき！…すきですきで、たまらないのぉ！！…ルーサのこと…かんがえると、…おまた…ほてって…、ぐしょぐしょに…なっちゃって…！…いじらずには、…いられなく…なっちゃうのぉ！！…いやぁぁっっっ！？」

アイレスは、火が出そうになるくらいに顔を紅潮させながら叫んだ。

「よく出来ましたね…。では、御褒美にー」

邪神が、嗤いながら宣言した。

「貴女様を、オトナにして差し上げましょう…！！」

「！？…ウソつき！！ウソつきぃぃぃぃっ！！」

アイレスが、駄々っ子のように泣き喚いた。

「他人を、安易に信用してはならない…。良い勉強になられたではないですか…。ではこれより、貴女様の成神(せいじん)の儀を始めると致しましょう…！」

ズッ！！

禍々しい張形の切っ先が、哀れな美少女神の可憐な薔薇の花に食い込む。

「いや…！！いや…！！」

アイレスは、泣きながら頭を大きく振り回した。

「…さあ、アイレス様。貴女様が私を咥え込み、むしゃぶりついてよがり狂う様を、ルーサ様にも皆様にも視姦(み)て頂きましょうね…！？」

残酷なる黒き美女神が、甘く優しくアイレスに囁く。

ズブッ！！ズブズブ…！！

ゆっくりと、時間を掛けて、穢れた邪神の髪でできた穢れた塔が

アイレスの膣内(なか)に侵入してく。

「い゛や゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ!?い゛や゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ!?」

狭い肉穴を押し広げられる苦痛が、アイレスを襲う。

「…ククク、…中々…キツイですね…!ですが…もう少し…!!」

ズブゥッツッ!!

とうとう偽の男根が、アイレスを完全に刺し貫いた。

「あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ツッツ!!?」

アイレスが、悲痛な叫び声を上げた。

「クックックックッ…!オトナの世界へ、ようこそ!アイレス様、処女御卒業、お目出度(めでと)う御座(ござ)います…!!」

デイオスが白銀の女神に、処女喪失への残酷な祝いの言葉を告げた。

「い゛だい゛い゛い゛い゛っっっ!!い゛だい゛よ゛お゛お゛お゛お゛お゛お゛ッッッ!!」

美少女神が、狂い泣く。膣内(なか)から発せられる痛みが、処女を失ったという残酷な事実を、アイレスに突きつける。無残にもデイオス

の張形に貫かれ、処女膜を破られた秘裂から、うっすらと赤い血が滲む。

「ククク…。何と、締まりの良い…！では、動きますよ！？」

ディオスは腰を振り、アイレスを犯し始めた。

ズチュッ！ズチュッ！ズチョッ！ズチョッ！

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ッ！？あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ッ！？」

「あぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？なんとっ…いうしめつけ…⁉さすがぁっ…はっ…、ひごろっ…きたえていら…しゃるだけぇ…あはぁぁぁん…！？…あ…あるぅぅぅぅぅっっ！？」

ディオスの髪でできた張形はディオスの淫核を芯として、それに覆い被さる形で形成されていた。張形がアイレスに締め付けられ、しゃぶり上げられる度に中の淫核が擦られ、扱かれ、刺激される。ディオスもまた、アイレスを犯す事で性的快感を得ていた。

「いだい…！？…いだい！？」

アイレスの悲鳴とディオスの嬌声、そして巨神(タイタン)同士の、性器と性具が摩擦し合う卑猥な水音とが、シュニアの街中に響く。

「きもち…よくはっ…おられないっ…のですかっ…？あぁんっ…！？アイレス…さまぁっ…！？そう…ですか…まだ…はかのいたみ…がっ…！…かわいそうに…っ！？…ではっ！？」

ディオスの髪の蔓が3条、アイレスに向かって伸びる。その先端はそれぞれ蛇の頭と化し、少女のもっとも敏感な3つの突起―左右の乳首と淫核とに食らいついた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんッッッ！？」

アイレスの身体が、大きく反り返る。

3つの蛇の頭が、少女の3つの性感帯を甘噛みし、チュウチュウとしゃぶる。

「あ…！？あ…きもち…いい！？」

泣き叫んでいたアイレスの様子が、表情が、変わっていく。苦痛と絶望から、悦びと多幸感へ。泣き顔から、蕩けきったただらしない笑顔へ。

膣壁を擦られる、ジワジワとした快感がアイレスの胎内から生じ、次第に破瓜の痛みに取って代わっていく。

「あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛っっっ！？しまるぅぅぅっっっ！？くいちぎられそうですぅぅぅっっっ！？」

ディオスは、張形を通して過敏な突起をアイレスの熱い柔肉に一気に締め上げられ、甘い悲鳴を上げた。

「い…いかがですかぁ…アイレス…さま！？」

「い゛…い゛い゛…！い゛い゛よ゛ぉ゛！？」

「ではっ…！ごいっしょにっ…！きもち…よくなってぇっ！！はっ…はてましょう…っ！？」

ジュプッ！ジュプッ！ジュプッ！ジュプッ…！

公衆の面前で、２柱の巨神が後背位にて、恥も外聞も無く目合う。

膣壁を抉られ、擦り上げられ、子宮口まで突かれるアイレス。張形越しに淫核を締め上げられ、扱かれるディオス。

互いが互いを求め、摩擦し合い、昂ぶり合う。ディオスは夢中になって穢れた塔をアイレスに食べさせ、アイレスもまた下の口で偽のディオスを夢中になって頬張り、嬉々として味わう。その姿は、最早神とは呼べず、巨大な図体をした２頭の獣そのもの。

レロレロ…。

チュパチュパ…。

チュッチュッ…。

少女の過敏な３点を髪の蛇が責め、アイレスに追い打ちを掛ける。

「あ゛…あ゛あ゛…！？…してぇっ！？もっともっとついてぇッッッ！？」

銀髪の、ミルク色をした巨獣が、あまりにも卑猥な懇願をする。

「おんなの…よろこびにっ…、めざめられたのですねっ…！！…アイレスさまぁッ！！…ごようぼうどおり…にっ！？いたし…まし

ょうッッ！？」

もう1頭の、黒い長髪を持つ長身のどす黒い巨獣がそれに応える。

ズチュズチュズチュ！！

ディオスの腰の動きが早くなり、激しさを増す。

「やあぁぁっっ！？…とろけ…ちゃうよお…！？」

「わたしも…ですっ！！…いっしょに…とろけてぇっ！？…まじりあい…ましょうっ！？」

2頭の肌、ミルク色の肌と黒ずんだ肌とが汗まみれになる。空色の瞳と錆色の瞳とが潤み、天空の彼方にある快楽の園を見つめ出す。

「あぁぁん！？あぁぁん！？あぁぁん！？あはぁぁん！？」

「あっ！？あっ！？あっ！？んあぁぁぁぁっ！？」

2つの嬌声が重なる。

「…も、もう…だめぇっ！？」

「はてて…、しまうの…ですね…アイレスさまぁッ！！…わたしも…おともいたし…ますぅっ！？」

ディオスがそう言い終わらないうちに。

「イ゛ぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅう

っっっ！？」
まず、アイレスが。
続いてデイオスも。
「あ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」
ふたりは、肉体（からだ）を激しく戦慄（わなな）かせながら、快楽の園へと旅立った。

＊

邪神デイオスがシュニアの街に顕現してから、どれくらい経っただろうか。
アイレスはデイオスに抱き抱えられながら、虚ろな眼で空を見上げていた。
「…御覧下さい、あの赤き空を。沈もうとしている日輪を…」
デイオスが、アイレスの頭に優しく頬ずりをしながら、眼で空を指し示した。
真っ赤な夕焼けが、アイレスとデイオスの身体を照らし出す。赤く弱い日差しがアイレスの髪を、そして身体を、美しい金色に染め上げる。
「まるで血のように真っ赤に輝いて、貴女様の破瓜を、あんなにも盛大に祝って下さっているのですよ…？」

「…うん」

アイレスが虚ろな笑みを浮かべながら、弱々しく頷いた。

「フフフ…。何て惨めな、哀れな子ネズミちゃん…。可哀想ですから、私が飼って差し上げましょう…。私専用の、肉人形として…！」

「えへへ…。えへへへへへ…」

不浄の女神ディオスの魔手により、身も心も穢し尽くされたアイレス。邪神に、完全に屈してしまった白銀の女神は虚ろな目で夕日を見ながら、虚ろな笑い声を上げ続けるのだった—。

邪神ディオスは、身も心も踏みにじられ、犯されてボロボロになったアイレスを、この上ない歓喜の表情を浮かべながら抱きかかえていた。

形ばかりの美貌を得たディオスの裸体は夕日を浴びて、黒ずんだ肌が鈍い金色に染まっている。その様はより一層、邪神の禍々しさを際立たせていた。

「アハハハハ…！！これこそがあの大神殿の奴等への、私からの意趣返し…！！だが、まだまだこれから…。この憎たらしい地上も、すぐにこの子ネズミのように…」

邪神が、心の底から愉快そうに嗤った。だが、その時であった。

「ホーッ！ホホォーッ！！」

何処からか、１羽の小さな白い梟(ふくろう)が飛んできた。

「！？…何よ、この鳥は…！？」

梟(ふくろう)はディオスの顔の周りを、纏わりつくようにしつこくしつこく飛び回る。

「鬱陶(うっとう)しいわねッ…！！」

デイオスは髪の蔓を振り回して梟(ふくろう)を叩き落とそうとするも、梟(ふくろう)は

巧みに飛び回って邪神の攻撃をかわしていく。

「…今だッ！！」

巨神(タイタン)達より少し離れた、無事に残った民家の屋根に佇む、１つの小さな影。

その小さな影こそ、ゴブリンの中年男、ゴメス。「うわばみ亭」元常連客達のリーダー格であった。

「ヘドロ女め！これでも、食らえ！！」

冴えない中年の小男は威勢よく叫ぶと、掌よりもやや大きめの、何かが詰められた布製の袋を黒い巨神(タイタン)に向かって投げつけた。袋は、デイオスの太腿に当たった。謎の袋は邪神にぶつかると同時に口が解け、中に詰められていた物ー白い粉のようなものがこぼれ落ちた。

「あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛っっっ！？」

黒い巨神(タイタン)、デイオスが悲鳴を上げた。

白い粉に触れた邪神の黒ずんだ肌が、焼けて爛れていく。肉の焦げる臭いが、辺りに立ちこめる。

邪神は苦痛のあまり、抱きかかえていたアイレスの身体を取り落とした。

「きゃあっ！？」

白銀の女神が短い悲鳴を上げながら、地面へと落ちる。徹底的に責め嬲られ、心身共に疲弊しきっていた美少女神は瓦礫が散乱する地べたに激突すると、そのまま気を失ってしまった。

「とっととくたばりやがれぇぇぇぇッッッ！！」

ー故郷（くに）にいるかあちゃん達のためにも、このヘドロ女を野放しにするわけにいかねぇ…！！

ゴメスはディオスに向かって、無我夢中で何かが詰まった袋を次々と投げつけた。

「脚が…！？私の脚が…！？」

ディオスは焼け爛れた太腿を抑えて、ハラハラと大粒の涙を零した。脚を焼かれた激痛と、それ以上にようやく手に入れた美しい肉体（からだ）を傷つけられた衝撃に邪神は狼狽え、狂騒状態に陥った。

「ホーッ！！ホーッ！！」

白い小さな梟（ふくろう）がディオスから離れ、屋根の上にいる小男に向かって真っ直ぐ飛んでいく。

「アイナちゃんと、女将を頼む！！」

ゴメスが、袋を一つずつ両手に持って、梟（ふくろう）に向かって掲げた。梟（ふくろう）はそれを2つとも受け取ると、まずはアイレスに向かって飛んでいく。梟（ふくろう）は嘴（くちばし）で器用に袋の口を解くと、中の白い粉をアイレスを縛める邪神の縄に降りかけた。巨神（タイタン）すら解けないほど頑丈だった縄が、

白い粉が降りかかった途端、みるみるうちにほつれだした。そして、あっという間に千切れた。アイレスはようやく自由の身になった。
梟はそれを見届けると、急いでカルーナの元へと向かった。
「…助かった！！」
邪神の縛めから解放された酒の女神が、縄の跡がついた手足をさすりながら、立ち上がった。
「…ヒト風情がぁッッッ…！！」
ようやく狂騒状態を脱した邪神が、錆色の眼を憎しみに溢れさせ、屋根の上にいる男を睨みつけた。
「…まずい！怒らせた！！」
「や…やべえ…！！」
ゴメスが屋根を昇るための梯子を支えていたゴルゴスと、その隣で反撃の様子を見守っていたパゴスが、恐怖に顔を引きつらせて叫んだ。
「ここらが、潮時か…！！」
屋根の上のゴメスが、歯を食い縛りながら悔しそうに呟いた。
ーお前達、すまねえ…！とうちゃんは、ここまでだ…！！
ゴブリンの中年男は、故郷に残した妻と娘の顔を思い浮かべがら、

覚悟を決めて固く目を瞑った。

「畜生！！」

「いやだよう！！」

ゴルゴスが梯子を押さえたまま石のように固まり、パゴスが頭を押さえながら、地面の上に蹲る。スキンヘッドのオークとモヒカン頭の巨漢のオークは、襲い来る死への恐怖にうち震えた。

デイオスは、自身の肉体に傷を負わせた忌々しいヒトどもに死の宣告をもたらそうと、ゆっくりと口を開けた。

ー来るぞ…！！

「朽ちは…！！」

デイオスが呪いの言葉を発するよりも一瞬早く、梟が邪神の顔目がけて飛んでいく。

「ぎゃっ！？」

梟が、髪の間からギラギラと覗くデイオスの巨大な片眼を、鋭い嘴で思いきり突いた。

「眼が…！？眼が…！？」

邪神が、突かれた片眼を押さえて蹲る。

「へへっ！ザマーミロ！！」

「助かった……！！」

「ありがとうな、フクロウちゃん！！」

パゴスとゴルゴス、そしてゴメスは梟に向かって礼を言い、手を振ったのだった。

「……よくも！！」

いつの間にか邪神の足元よりやや離れた場所に、緑色のローブを纏ったお下げ髪の、エルフの少女が佇んでいた。手には魔法の杖と、陶製の水差しとを携えている。

「……よくも街を！！街のみんなを！！アイナをっっっ！！」

エルフの少女ールーサが、怒りに満ちた眼を邪神に向けた。青い美しい瞳から、ハラハラと涙が溢れる。ルーサは、魔法の杖を振った。

「水差しの水よ…」

水差しの中の水が、ゴボゴボと音を立てながら立ち上がる。そして、それは水柱となった。

「忌まわしき邪神に降り注げッッッ！！！」

水柱は真っ直ぐデイオスに向かって飛んでいき。

「ギャ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア

ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ツ゛ッ！？」

邪神が、恐ろしい悲鳴を上げた。

水柱が、ディオスの顔面を直撃した。ジューッ！という音と共に、美しかった邪神の顔がまるで強い酸を浴びたかのように、見るも無残に焼け爛れた。

「ううう…！かお…！…かお…！！わたしのかおがぁ…！？い゛や゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛！！？」

ディオスが、顔を押さえながら狂ったように泣き叫ぶ。

「アイレス！！」

「アイナぁ！！」

「アイナちゃぁん！！」

「女将ぃ！！」

カルーナとルーサが、続いてゴメス、そしてゴルゴスがパゴスの肩を支えながら、倒れ伏す白銀の女神の元に駆け寄った。

ルーサ達は、ボサボサ頭の巨神（タイタン）＝カルーナを見上げた。

「おばさん！…アイナは！？」

エルフの少女が、息を切らせながら酒の女神に尋ねる。

「身体の方は心配ないよ！何てったって、私達ゃ不死身だからね！ただ…」

「…ただ？」

ルーサが、顔を曇らせながら、カルーナに聞き直した。

「女将ぃ…。いってえ、どういう事だよぅ…？」

パゴスが、カルーナに恐る恐る尋ねた。

「問題は、この娘の心さ…。１度受けた心の傷は、神でもそう簡単に癒えない…」

女神カルーナは、かつての大戦の際魔神に捕えられ、生きながらにして竜の餌食にされていた神々の姿を思い浮かべながら、静かに言った。

「『神とて万能ではない』、か…」

ゴルゴスが、悲痛な面持ちで呟いた。

「年頃の娘を、あんな目に逢わせやがって‼許せねぇ！！」

「酷い事しやがって…！！」

ゴメスとパゴスが、邪神への怒りを露にしながら口々に叫んだ。

アイレスと同じ年頃の娘を持つ、父親であるゴメスの怒りは、特に

凄まじかった。
「…そんな！？」
ルーサは、未だに気を失っているアイレスの顔を見つめた。
ー私達を守るために、邪神と戦った挙げ句返り討ちにされて、あんなに痛めつけられた上に、恥ずかしい思いをさせられて…。私達のために…。
ルーサの胸が、張り裂けそうになった。そして眼から、再び涙が溢れ出した。
「…フフフ。ハハハ…！アハハ！アハハハハハ！アーッハッハッハッハッ…！！」
デイオスが顔を押さえつつ、狂ったように嗤いながらよろよろと立ち上がった。
カルーナがデイオスの前に立ち塞がり、アイレスとルーサ、そして３人組達を庇う。
「皆に指一本触れてみろ！？タダじゃおかないよ！？」
「ククク…。全く愉快な方達ですね…」
デイオスは誰に言うとも無く、ゆっくりと喋り出した。
「神(わたし)にこのような怪我を負わせるとは、何処までも愉しい方々だこと…。よくも…！…よくも私の顔に、傷をつけて下さいましたね

…！？…その罪、万死に値する…！！」

邪神は怒りでワナワナと震えながら、憎悪に満ちた眼でカルーナ達を、街を、そして人々を睨みつけた。

「ゴミどもが！！…調子に乗りおって！！…こんな国、…滅ぼしてくれる…！！」

そして、大声で叫んだ。

「…ラードーンよ！ケートスよ！アンタイオスよ！…そして、ガロンよ！！目覚めよ！竜ども！１０日の後に、この国を平らに均せ…！！」

デイオスが叫び終わると同時に—。

＊

ゴゴゴゴゴゴゴ…！

聖レイハル王国とクルール王国とを跨がって広がる、マペトの森。王都シュニアより遠く離れたその片隅、クルールの国境に近い一帯で、大きな大きな地鳴りが起こった。そして大地を揺るがし、地響きを立てながら、巨大な爬虫類の怪物が、地面から出現した。

「ギャウゥゥゥウウウゥゥギャギャギャゥゥゥゥ！！」

灰褐色をした、細長い顔。頭部には小ぶりな2本の角が生え、蛇のように細長い頸と前肢の無い上半身。頸筋から背にかけて並ぶ、短くも鋭いトゲ。赤と黒の斑紋を持つ怪物の身体は、細かい鱗にび

っしりと覆われている。

「ギャウゥゥギャルルル！！」

怪物は天に向かって再び吠えると、大量の土砂と木々を跳ね飛ばしながら下半身を地中から露出させた。

怪物の全身が明らかになった。まるで巨木の如く、太く長い胴体。そして蛙のような、尾の無い尻と筋肉質の長い後肢。尾の代わりに後ろ脚を生やした大蛇のような、何とも奇妙な姿をした怪物だった。

怪物は、１６４フィート（約５０メートル）もの長い身体をのたうち回らせながら這いずり回る。そして何処かを目指し、木々を薙ぎ倒しながらゆっくりと移動し始めたー。

＊

「あっ！？あれは何だ！？」

海上にて、小さな木製の舟に乗る漁師の男達。そのうちの一人が、水平線から海岸を目指して物凄い速さで泳いでくる、巨大な何かを発見した。

「グッワァァァァァァァァァァァァァッ！！」

巨大な何かが、海面から顔を出す。それは海豚(イルカ)あるいは鯱(シャチ)を思わせる顔をした、青い滑った皮膚を持つ巨大な怪物だった。怪物は、巨大な波や渦を巻き起こしながら移動している。その先に、漁師達の乗る舟があった。

「逃げろ！早く！！逃げるんだよッ！？」
漁師達は怪物を避けようと大急ぎで舟を漕ぎ出すも、怪物の移動速度はあまりにも早く。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！？」
舟はあっという間に怪物が巻き起こす波と渦に巻き込まれ、海中に呑み込まれたー。

＊

「メ゛エ゛ーッッ！！メ゛エ゛ーッッ！？」
草原にて。先ほどまでのんびりと草を食んでいた羊達が、急に騒ぎ出した。
突如、地割れが起こり、哀れな羊達の何頭かを呑み込む。
「ギャヴェエエエエエエエエエエエエエエエエ！！」
巨大なトカゲのような怪物が、地割れの中から姿を現した。黒褐色をした、まるで穿山甲（センザンコウ）のような堅牢かつ鋭い鱗を持った怪物。
「ギャヴェエエエエエエエグエエエエエエエエ！！」
鮫の如く尖った鼻をした怪物は、体長１６０フィート（約６０メートル）もの巨体を揺すって背中の土を払い落とした。そして逃げ惑う羊達を追い散らし踏み潰しながら、何処かへ向かって移動を始

めたー。

＊

「ピギャアァァァァァァゴボォォォォォォォ！！」

パペトン山の麓より、巨大な1本角を持つ金色の大怪物ー女神アイレスと戦ったあの竜が、岩を押しのけ跳ね飛ばしながら、地面から顔を出した。

「ピヤァァァァァァァゴォォォォォォォォォ！！ゴボォォォォォォォォォ！！」

ー今更出陣だと…⁉あの、薄汚い乞食女め！たかが！餓鬼1匹の為に、この俺を愚弄しおって‼あの女の力さえ持っておらねばあんな奴！喉笛を掻っ切ってやったものを…！！

出現したどの竜達よりも、一回りも二回りも巨大な一角竜はそう言いたげに吼えると、まるで血のように真っ赤に染まった夕暮れの空を仰いだ。そして天をも切り裂かんばかりの、一際大きな咆哮を上げた。

「ピギャアアアアァァァァァアアアゴボォォオオオォォォォォオ！！！」

ー忌々しい巨神ども…！どいつもこいつも、首を洗って待っていろ！！このガロンが！貴様らを、1匹残らず蹴散らしてやる！！

戦と血の匂いとに飢えた金色の一角巨竜＝魔竜ガロンは、何千年かぶりの戦場への興奮と、デイオスも含めた全ての巨神達への怒り

とに、身体中の血を滾らせながら再び地面へと潜っていったー。

＊

地の底に、海の底に、世界の各地に眠っていた四足歩行の巨大な爬虫類ー竜達が鬨の声を上げながら一斉に目を覚まし、地上へと姿を現した！そして一斉に聖レイハル王国を、その王都シュニアを目指して、進軍を開始した！

邪神の叫びは、竜達による総攻撃への号令だったのだ！

「驚きで、言葉も無いようですね…！竜どもを従わせる事が出来るのは、あの魔神めだけでは無いのですよ…！？」

これこそが、邪神が魔神より得た力。

「竜どもの母」ガンジャの血肉を食らい続けたデイオスは、ガンジャ同様竜を従え、自在に操る力を手に入れていたのだった。

「私は、実に慈悲深い…。お前達に、１０日の猶予をくれてやりましょう…。それまでに、竜どもを迎え撃つ準備をなさい…！ま、徒労に終わるでしょうけどねぇ…！！アハハ！アハハ！アハハハハハハハハハハハ！！」

暮れなずむ夕日が不浄の女神の巨体を、真っ黒に不気味に浮かび上がらせる。ただただ眼だけを錆色にギラつかせ、それが邪神の禍々しさを一際引き立てていた。

デイオスの身体が、あの悪臭を放つ黒い汚泥へと変わっていく。汚泥の山はドロドロと崩れ、縮こまっていきー。やがて、地面へと

染み込んで消え去った。

邪神は、シュニアの街から姿を消した。恐ろしい、宣戦布告の言葉を残して――。

避難所にて

　邪神ディオスが去り、夜の闇に包まれたシュニアの街。その高台にある石造りの大きな建物—「シュニア大神殿」は、邪神の猛威から、そして巨神（タイタン）同士の戦いによる破壊から避難してきた人々でごった返していた。

＊

—「シュニア大神殿」。ルーサ＝サルノ王女と「うわばみ亭」元常連3人組達、そして多くの人々が戦いの惨禍から逃れてきた、あの神殿である。そして、聖レイハル王国において最も大きな神殿でもあった。

　神々の女王—光明の女神オルディナを祀る大神殿を中心に、他の多くの神々をそれぞれ祀った小さな神殿＝分殿が幾つも存在する。神々の力が集うこの場所は、邪神の魔の手から逃れるには最適にして唯一の安全地帯であった。その証拠に、さしものディオスも、この神殿とその敷地内には一切手を下さなかった。

＊

　丘の上にそびえる大神殿へと続く、長い石段。

　家族を、親しい者達を亡くし悲しみにくれる者。住まいや財産を失い、途方にくれる者。怪我をし、回りの者達に担がれる者。すすり泣く者。泣き叫ぶ者。男。女。若者。子ども。壮年、中年に老人—。

沢山の人々が、安全な場所と神々への救いとを求めて主神オルディナの神殿へと向かい、とぼとぼと力無い足どりで石段を登ってゆく。彼等の顔には疲労と悲しみ、そして絶望が浮かんでいた。

まるで冥府へと向かう亡者達のように、よろめき足を引きずりながら神殿へと向かう人々。

その中に、蜂蜜色のボサボサ頭に橙色の布を身に纏い、銀髪の少女を背負った女性を先頭とする一行がいた。女性の年齢は20代半ば、女性に背負われた少女は10代半ばといったところか。女性の後を、女性に背負われた少女と同じ年頃のエルフの少女、そして40代後半と思しき中年のゴブリンの男と、30代半ばと思しき壮年と20代前半と思しき青年の、2人のオークの男達がついていく。

銀髪の少女は、エルフの少女が羽織っていた緑色のローブを纏わされていた。それはローブの下の、銀髪の少女のあられもない姿を人々の目に晒させまいという、女性とエルフの少女、そして3人の男達によるせめてもの配慮であった。

大柄な2人のオークのうち、より巨漢の青年のオークは肩に切り傷を負っていた。エルフの少女＝クルール国王女を、その命を狙う刺客の凶刃から庇った際に受けた傷だ。モヒカン頭をした巨漢のオークは、スキンヘッドに髭面をした壮年のオークに肩を支えられながら女性と少女、中年のゴブリンの男の後を追い、石段を登っていく。

「あった、あれだ！」

ボサボサ頭の女性ーヒトと同じ大きさに身を縮めた酒の女神カル

ーナが、主神オルディナを祀る本殿の周りに立ち並ぶ小神殿のうちの一つを指さした。その神殿こそカルーナの背で眠り続ける少女＝酒の女神の手により、ヒトの大きさに身を縮められた勇気と武の女神、アイレスを祀る神殿であった。

「ここなら、絶対に安全！何てったって、この娘の為に建てられた、この娘を祀る神殿だからね！」

カルーナは、アイレス神殿の扉を開けた。

「さあみんな、中へお入り！」

「えっと…。お邪魔します」

酒の女神に促され、一行は小神殿の中へと入っていく。

アイレスの小神殿は、5〜6人が辛うじて寝泊まり出来るほどの広さであった。その内部には、灯りを灯す為の燭台が設えられている。神殿の中央には祭壇が設けられていた。そして、立派な鎧装束を身に纏った、実像とはややかけ離れた女神アイレスの、大理石でできた小さな神像が祀られていた。

クルール国王女サルノ＝ルーサの光明の魔法により、燭台に灯りが灯された。狭い神殿内が、まるで昼間のように明るくなった。

「神々の見よう見まねだけど…」

カルーナはそう呟くと懐から、小神殿までの道中にて、シュニア大神殿の敷地内で失敬した1枚のオリーブの葉を取り出した。そして、ふぅっと息を吹きかけた。

オリーブの葉は、瞬く間にボロボロの敷布へと変わった。

「…あちゃー！」

酒の女神は額を押さえ、溜め息をついた。

「やっぱりダメ神だあ、私ゃあ…」

ーだが、神殿の床は冷たい石でできている。彼女の背中で未だ眠り続けている少女、アイレスをその上に直に寝かせるよりは遥かにマシだ。

カルーナは心の中で自分自身にそう言い聞かせると、石の床の上にボロ布を広げ、その上にアイレスを寝かせるのだった。

カルーナとサルノ王女＝ルーサが、心配そうにアイレス＝アイナの顔を覗き込む。

その背後で、３人の男達が何やらヒソヒソと相談事を始めた。

「…どうしよう、大将！」

モヒカン頭の巨漢のオーク＝パゴスが、無精髭を生やした中年のゴブリンの小男＝ゴメスに耳打ちした。

「…どうしようって、何の話だよ？」

ゴメスが困惑しながら、パゴスに囁いた。

「俺ら、神様達にフソンな態度とっちまったよお…！」

モヒカン頭をした青年のオーク＝パゴスは、２柱(はしら)の女神がその正体を明かしてもなお、冒険者の少女アイナと「うわばみ亭」の女将カレンが神(タイタン)―女神アイレスと女神カルーナであるという実感がいまいち湧かなかった。

だが、オリーブの葉を敷布に変えるという奇跡を間近で目の当たりにして、改めて彼女達が強大な力を持った巨神(タイタン)であるという事実を突きつけられたのだった。

「俺ら、バチ当てられちまうのかなあ…！？」

パゴスはオロオロしながら、頭を抱えて囁いた。

厳つい見かけによらず少々気弱な青年のオークは、不浄の女神デイオスの機嫌を損ねた男＝クルール国将軍、ネルソンの最期を思い出していた。

「…俺ら、ミミズにでも変えられちまうのかな！？」

パゴスが、泣きそうになりながら囁いた。

「バカな事言うな！！」

ゴルゴスが、パゴスを一喝した。

「アイナちゃんと女将が、そんな事するわけないだろう！？」

「…でもよ、兄貴も見ただろ？あのヘドロ女を怒らせた、豚野郎

がどうなったか…！？」

パゴスが自分達の行く末を危惧しながら、ゴルゴスに囁いた。

「神様を怒らせたら、ヤバい事になる…！」

「ゴルゴスの言う通りだぜ…」

ゴメスが、ゆっくりと口を開いた。

「ふたりは、確かに神サマだった…。俺達ぁ、知らず知らずのうちに色々無礼をやらかしちまった！…だがよ、アイナちゃんも女将も、俺達を守るために一生懸命になってくれた！そのふたりが、そんなちっちぇえ事で怒るかよ！？あの性悪ヘドロ女なんかと、一緒にするんじゃねぇ！！そっちの方が、よっぽどフソンじゃねえか！！」

「大将…。そうは言うけどよぉ…」

パゴスは未だ納得いかない様子で、怯えながらゴメスの顔を見た。

ー途方もない力を持つ巨神達(タイタン)にとって、自分達など取るに足らない存在だ。自分達ヒトを生かすも殺すも、彼女達の気分次第。自分達が今まで平穏無事に日常を過ごす事が出来ていたのも、彼女達の気まぐれでしかない、のかもしれないー。

「…あんた達、さっきから何話してんだい？」

女神カルーナが、後ろを振り向いて3人に声をかけた。

「…ひいっ！？」

パゴスは、悲鳴を上げて飛び上がった。

「これはこれは、女神様…。ごキゲン麗しゅう…！」

「おい！バカ！よさねえか！？」

「パゴス！よせ！！」

ゴメスとゴルゴスが止めるのも聞かず、少し気弱なオークの青年は女神達に向かって神殿の床にひれ伏した。

「パゴスさん！？」

ルーサが、女神達に急に仰々しい態度をとりだしたパゴスに対し、怪訝そうな表情を浮かべた。

「ど…どうしたんだい！？いったい…！？」

カルーナは、急に態度を豹変させたパゴスに大いに困惑した。

「女将…じゃねえ、女神様ぁ…。他の生き物はともかく、ミミズにだけはしないでくれ…くださせえ！！ミミズだけは…イヤだよう…！！」

パゴスは泣きながら、カルーナに懇願した。

「えっ！？何言ってんだ！？あんた…」

「…知らずとはいえ、フソンな態度をとってしまってまことに申し訳ありませんでした！！…どうか！どうか、俺らをお許しくださいー！！」

見かけによらず少々気の小さいオークの青年は、床に額を擦り付けながら必死になって女神カルーナに許しを乞うた。

「…パゴス、顔を上げなよ」

カルーナはしゃがみ込むと、オークの青年に優しく語りかけた。

「この世界は、誰の物でもない。みんなの物だ…」

パゴスは、黙って女神カルーナの話に耳を傾けた。

「それに、あんた達が私らを敬ってくれるように、私らにとってもあんた達は大切な存在なんだ。みんなこの世界に共に生きる、同じ仲間なんだよ…」

でなけりゃ、皆身体を張ってまで「あれ」からこの世界を守ったりしないよ。酒の女神は、魔神ガンジャの恐ろしく、そして禍々しい姿を思い浮かべながら3人に言うのだった。

「女神様ぁ！！」

パゴスが、泣きながら顔を上げた。

「『女神様』だなんて、やめておくれよ！私は、カレン。『うわばみ亭』の女将だよ！…元、だけど」

カルーナ＝カレンが、照れ臭そうに頭を掻きながら言った。

「な？俺の言ったとおりだったろ！？」

ゴメスが呆れながら、このバカ野郎！とパゴスのモヒカン頭を小突いた。

「アイナとおばさんが、そんなひどい事するわけないよ！」

「だな！」

ルーサが少しむくれながら、ボソリと小さく呟く。ゴルゴスは、ルーサの呟きに大きく頷いて相づちを打った。

「ねえ、おばさん。アイナが地上に来た理由は何となく分かったけど、おばさんはどうして地上に？」

気を取り直したルーサが、カレン＝カルーナに尋ねた。

「ああ、それが…。この娘、あのウン子の悪だくみにいち早く気づいたらしいんだけど、逃げたあんチクショーをそのまま追っかけて行っちゃって…。もちろん、早く連れ戻そうって話になったさ。でも、この娘の母親が強固に反対したんだ…。『ディオスめの動向が気になる。だけど下手に追いつめたら、あの便所神はトチ狂ってナニをしでかすか分からない。だから、このままこの娘に探りを入れさせるべきだ』って…」

「…それで、おばさんがアイナのお目付役として地上に来たって事？」

「そう。この娘の母親の直々の指名でね。でも…」

元「うわばみ亭」の女将は、大きな溜め息をついた。

「その結果が、このザマだよ…。情けないよ、ホント…」

「そんな事無いよ！おばさんのお陰で、みんな助かったんだよ！？」

「そうだぜ！めが…女将！！」

「女将がいなけりゃ、アイナちゃんと俺達ぁ今頃…！！」

「あの、極悪ヘドロ女のエジキに…！！」

「何言ってるんだい！逆にあんた達が、私らを助けてくれたんじゃないか…！？」

ルーサや元常連3人組と言い合っているうちに、カレン＝カルーナの脳裏に、一つの疑問が浮かんだ。

「…そう言えばあんた達、あんチクショーに一体何を投げつけたんだい？ヒドいヤケド負って、ピーピー泣いてやがったけど…」

邪神デイオスを撃退した、袋に詰められた謎の白い粉と何の変哲も無さそうな水。これらの正体は一体何なのか？何故、これらをぶつけられた邪神は負傷し、狼狽えたのかー？

「女将、ありゃあよ…」

カレンの問いに、ゴメスが答える。

「塩と、お清めした水だよ」

「えっ!?そんな物で!?あいつが!?」

「教えてもらったの!『邪神は穢れの化身だから、それを祓う物に弱い』って…」

ゴメスに続いてルーサが、カレンに答えた。

ー塩は、古来より神聖なものとして扱われてきた。塩は、腐敗を促し様々な病を惹き起こす恐るべき悪魔=細菌を殺し、その繁殖を抑えて食物等の長期の保存を可能にする。

古の時代には、死後その魂が来世にて永遠に幸福に生きるための手段として、防腐剤として塩を用いて死者の亡骸を保存する、等といった事も行われた。また、塩は生き物にとって生きていく上で無くてはならない物質でもある。

そして、清浄なる水。こちらも古くより、「穢れ」を祓い心身を浄める力があるとされ、様々な儀式に使われてきた。清らかな澄んだ水は、ありとあらゆる汚染を洗い流し、浄化するー。

「!?…あーっ!なるほど!!どうしてそれに気づかなかったんだ、私ぁ!?」

カレンはハッとした表情を浮かべた後、大きな溜め息をついた。

「あんチクショーに、シオ撒いてやればよかったんだ…!!」

これで、一つの疑問が解けた。だが、カレンの脳裏に新たな疑問が浮かぶ。

「でも、それを一体誰が教えてくれたんだい!?」

「それは……」

ルーサが答えようとしたその時。

「う……んっ」

アイレス=アイナが小さな呻き声を上げた。白銀の女神は、失われていた意識をようやく取り戻しつつあった。

再会　―母と娘―

―気が付いたら、いつの間にか暗闇の中にいた。

―ここは、どこだ？冥府？いや、違う…。なんであたしはこんなところにいるんだ？あたしは、今まで何をしてたんだ…？

―アイレス！

―アイナぁ！

―アイナちゃぁぁん！

―あたしを呼ぶ声が聞こえる…。みんなの声だ！

闇の中に、一条の光が差す。光は次第に大きく広がり、アイレスの視界を優しく包み込んでいく。

ーアイナ…。目を開けて！アイナ！！

ールーサ？ルーサなの！？

アイナは、聞き覚えのある声に必死で応えようとした。だが、何故か相手に声が届かない。

―戻らなきゃ！！みんなのところに！！

アイレスは、目を開けた。５人の顔が、視界に飛び込んでくる。

カレンことカルーナ、ゴメス、ゴルゴス、パゴス、そしてルーサ。
皆心配と安堵の入り交じった面持ちで、ようやく目覚めた少女の顔を覗き込んでいる。

「…みんな？」

アイナは、５人の顔を順番に見つめた。

「アイナちゃんが、目を覚ました！」

「気が付いたか？アイナちゃん！？」

「よかった…！よかったなあ！！」

３人の男達—ゴメス、ゴルゴス、パゴスが目に涙を滲ませながら顔を綻ばせる。そして大切な友人の回復を、手を取り合って喜んだのだった。

「…ここは！？」

アイレスは上半身を起こし、辺りを見回した。燭台に灯された光明の魔法の光が、明るく優しく周りを照らし出す。ここはどうやら、石造りの小さな部屋の中であるようだ。祭壇と小さな神像が、アイレスの目に留まった。

—あたしの像！？という事は…。

「ここは、あんたの神殿だよ」

酒の女神カルーナが、安堵の笑みを浮かべながらアイレスに告げ

る。

「ここにいれば、とりあえずは安心さ」

カルーナは、アイレスの頭を優しく撫でながら言った。

「アイナ！！」

エルフの少女、ルーサが涙ぐみながら銀髪の少女に抱きついた。

「アイナのバカぁ！！私達を守るために…あんな無茶して…！！」

ー「あんな無茶」…？？？

アイレスは、何か重大な事を忘れているのに気が付いた。思い出そうとしても、思い出せない。

否。心の奥底で、彼女自身がそれを思い出す事を強く拒否していたのだ。

「大丈夫！大丈夫だからな？アイナちゃん！！」

「…おうよ、俺達がついてるぜ！！」

「…ありがとうな！あんなになってまで俺達を、あいつから守ってくれて…！！」

巨漢のパゴスが、続いてゴメスとゴルゴスがアイレスの肩に手を置いた。そして、それぞれ厳つい顔をさらに厳つく歪ませた泣き顔でアイレスを慰める。

ーみんな、一体何を言ってるんだ？？？

怪訝な顔をするアイレスを、背後からカルーナが抱き締める。

「アイレス…。ごめんよ！！私が不甲斐ないばっかりに…！！」

酒の女神は、アイレスに顔を寄せながら泣き崩れた。

「…みんな、どうしたの？みんな、何を言って…」

ー…あっ！？

次の瞬間、銀髪の少女は全てを思い出した。忌まわしい、呪われた記憶を。

ー地上へ降りて以来、ずっと探し求めていた敵。邪神ディオスをようやく見つけ、戦いを挑むも無様に返り討ちにされた。

ー自分の股間に鎮座する、穢れと罪の象徴。淫らな欲望の権化たる小さな肉の突起を執拗に責め嬲られ、あろうことかその快楽に溺れてしまった。

ーそれだけではない。誰にも知られてはならない恥ずべき秘密ー自涜行為の常習者である事を、薄汚い欲望に負けて自ら告白してしまった。そして、ルーサに想いを寄せている事まで白状させられてしまった。

ー多くの人々の目の前で自ら快楽を求め、逝き果てるよう仕向けさせられ。そしてー。

ー邪神の、あの悍ましい肉の棒で貫かれ、「初めて」を奪われて犯されたー。

「…いや…いや…！！」

純真無垢だったアイレスを襲った、あまりにも残酷かつ過酷過ぎる体験。美少女神は、頭を大きく振ってそれを否定しようとした。だがそれはどうする事もできない、紛れも無い事実であり—。

アイレスの身体が、ワナワナと震え出した。顔から、血の気が引いていく。全身から冷たい汗が流れ、視界が凍りついていく。

「いやぁぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁ！！！」

アイレスは絶叫した。

「あたし…！？あたし…！？」

銀髪の少女は、狂騒状態に陥った。両手で頭を抱えて俯き、歯をガチガチと打ち鳴らす。身体を震わせ、嗚咽としゃっくりを繰り返す。そして、ごめんなさいとうわごとのように何度も何度も呟くのだった。

「アイナちゃん！？落ち着け、アイナちゃぁん！！」

アイレスのあまりの様子に、３人の男達はただオロオロするばかりである。目の前で絶望と羞恥に打ちひしがれる少女をどうにかして落ち着かせようとするも、どうする事もできない。

「アイレス！！ここには、あいつはいないから！！ここにいれば、絶対に大丈夫だから…！！」

カルーナもまた、必死になってアイレスを宥める。だが心を閉ざしてしまった白銀の女神は、酒の女神の言葉に応える事は無かった。

「アイナ！！」

ルーサが、アイレスの身体を強く抱き締めた。ルーサの腕の中で怯え、震えて小さく縮こまっているアイレス。その姿は、まるで狐（キツネ）に狙われた兎（ウサギ）のように繊細で弱々しかった。巨大な竜をも軽々と持ち上げ投げ飛ばす、怪力無双の女神。大いなる力を持つ巨神（タイタン）達のひとりである、勇気と武の女神、アイレス。しかしながら、彼女の内面はルーサと同じごく普通の、年頃の女の子でしかなかった。

「アイナ…。ごめん…。ごめんね…！！私達のせいで…！！」

ルーサは、心が壊れてしまいつつあるアイレスの身体を抱き締めながら、何度も何度も彼女に謝った。そして、泣きじゃくった。その時ー。

ーギィィイイ…

不意に、何かが軋む音がした。５人がいる神殿の扉が、僅かに開いたのだ。扉の隙間から、小さな白い何かが中へと侵入してくる。それは翼をはためかせ、大きな羽音を立てた。そして、ゆっくりと嘴（くちばし）をひらいたのだった。

「クルール国王女、サルノ…。いえ、冒険者ルーサよ、貴女が謝る必要はありません…！」

「梟さん！？」
ルーサが、目を見開いて叫んだ。親友が、いや、それ以上に大切な存在であるアイレス＝アイナの精神が崩壊しかかっている絶望的な状況の中、避難先の神殿内にひょっこりと現れた闖入者。それは、アイレスとカルーナを邪神の魔の手から救い出す際に無償で力を貸してくれた、あの白い小さな梟だった。
「あっ！？あの時のフクロウちゃん！！」
「うわばみ亭」元常連の３人組が声を揃えて梟を指差し、そして叫んだ。
「フクロウちゃんよお、何とかしてアイナちゃんを助けてやってくれよぉ！！頼むよぅ！！」
３人組の１人、モヒカン頭のパゴスが梟に向かって手を合わせ、涙ながらに懇願した。
「…あんたが何者かは知らねえ。でも…俺からも頼むよ…！！アイナちゃんは、俺らにとって娘みてぇなもんなんだ！！」
パゴスに続き、白髪混じりの頭をした小男、ゴメスが冷たい石の床に額を押しつけながら梟に懇願した。
「無理なのは分かってる…。でも…、頼む！このとおりだ！！」
スキンヘッドの髭面をしたゴルゴスが、必死の形相で床に手をつき、梟に向かって頭を下げた。

「お願い…梟さん！！」

ルーサが床に手をつき、梟に迫った。そして泣き腫らした目でその顔を見つめ、アイレスの救済を懇願するのだった。

「…喋る、梟？？？」

酒の女神カルーナは、ルーサ達４人がとり乱し梟に縋りつく中冷静に、極めて冷静に思考を巡らせていた。

ーかつて、白い梟に身を変えて世界を救った者がいた。身体こそ小さいものの、知恵の優れた彼女は策を用いて単身敵陣に乗り込み、そして見事に世界の破壊者を討ち取った。

ー穢れの化身。不浄の女神デイオスの弱みも、その者ならば知っていてもおかしくはない。間違いなくその者が、ルーサ達にそれを教えたのだー。

梟の身体が、白く眩い光を放ち始めた。その者に縋りついていた４人は、驚いて飛びさすった。光が強くなるのに比例して、梟の身体が大きくなっていく。そして、鳥から違う姿へと変わり始めた。その者は次第に人の姿となり、そして。

「ブーボー！？」

酒の女神は、驚愕の叫び声を挙げた。

ふわふわとした、肩まである柔らかな銀髪。ぱっちりとした大きな、済んだ空色の瞳を持つ柔和な眼。美少女と見まごう、幼さの残

る顔立ち。空色の布を身に纏った、娘と同じくミルクのような白く滑らかな肌をした小柄な女性。
白い梟（ふくろう）の正体。ヒトと同じ大きに身を縮めてはいるものの、彼女こそが巨神達（タイタン）のひとりでありかつて世界を守った「小さな英雄」。
知恵と美徳の女神、ブーボーがその姿を現した。
「かあ…さん…！？」
母の姿を見たアイレスは、目を見開いて小さく呟いた。
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！？」
ルーサと3人の男達の叫び声が重なった。
「…この人が、アイナのお母さん！？」
「あのフクロウちゃんが！？」
「ウソだろ！？」
「信じられねぇ…！！」
4人は驚きのあまり石のように固まり、茫然自失となった。
「ブーボー！済まない！！」
酒の女神が、ブーボーの足元に跪き土下座をした。

「私が付いていながら…アイレスがあいつに…！！謝って済む事じゃないけど…、申し訳ない！！…ミンチにでもウンチにでもしてくれぇ！！」

カルーナは床に額を激しく打ち付けながら、親友に謝罪した。

「カルーナ、貴女のせいではありませんよ」

ブーボーは、カルーナの肩にそっと手を置いた。

「これは、この娘が自ら選択し、その結果なるべくしてなった事…」

知恵と美徳の女神はそう呟くと、娘である白銀の女神を一瞥した。

そして、パゴスの元へと歩み寄っていった。

「怪我をなさっているのでしょう？見せて下さい」

ブーボーは、パゴスの太く逞しい左腕を手に取った。

「あ…。は、はい」

巨漢のオークは、畏まりながらペコリと頷く。

「…これは酷い！！」

パゴスの怪我の具合を確認した女神は、彼の顔を心配そうに覗き込んだ。そして懐から硬い革でできた、蓋の上部に取っ手が付いた小さな箱を取り出した。

「すぐに手当てを！！」

革でできた箱はみるみるうちに大きくなる。箱は、手で提げて持つのに丁度よい大きさになった。ブーボーは箱の蓋を開けると、中から陶製の小さな壺に入った軟膏を取り出した。そして軟膏を指ですくいとり、パゴスの傷口に塗ると、傷は瞬く間にふさがり、癒えていった。

「これで大丈夫」

傷が癒えるのを見届けたブーボーが、パゴスに優しく微笑んだ。

「あ、ありがとうございます…」

パゴスは恐縮しながら知恵の女神に礼を述べた。すると女神は、礼を言われるほどの事はしておりません、と手でそれを制した。

「か…かあさ…」

パゴスの手当てを済ませたブーボーは、間を置かずしてつかつかと、母親の来訪に戸惑う娘の元へと歩いていく。そして。

「…この親不孝者っ！！」

知恵の女神はアイレスの頬を、思いきり引っ叩いた。

「…ッ！？」

アイレスはその鋭い痛みに顔をしかめ、思わず頬を押さえた。

「お、おい！ブーボー！？いきなり何を…！！」

女神カルーナが、親友の実の娘への仕打ちを咎めるとほぼ同時に、女神ブーボーは娘アイレスを抱き寄せた。

「…どんなに心配したか！！」

娘を抱くブーボーの目から、涙が溢れ出した。

「間に合わなかった…。間に合わなかった…！！私が、もうひと足早く来てさえいれば…！！」

「母さん…ごめん！！あたし…！あたし…！！」

ようやく再会した母娘は、抱き合いながら泣きじゃくるのだった。

再会　―母と娘―（後書き）

大変！　ママが来た！

「あの下賤の輩め…！！…よくも…よくも私の娘をこんな酷い目に…！！」

知恵の女神はアイレスの頭を優しく撫で、絞り出す出すように声を発しながら身体を震わせた。

「大切」という言葉では言い表せないほど愛情を注いで育ててきた我が娘（こ）が、衆人の前で丸裸にされた挙げ句辱しめられそして、純潔を穢（けが）されたー。

邪神の魔の手によって身も心もボロボロに打ちのめされたアイレスの、母親である彼女の怒りと悲しみはいか程のものであっただろうかー。

ブーボーは、泣きじゃくるアイレスを強く抱き締めながら大声を上げて号泣するのであった。

それは正視に堪えない、あまりにも痛ましい光景であった。

「アイレス…！あんた、どうしてあんなムチャしたんだい！？どうして私達に、すぐ知らせに来なかったのさ！？」

カルーナは抱き合い号泣する母子の元に駆け寄ると、ふたりの肩を抱き寄せた。そして、泣きながら銀髪の少女に語りかけた。

「だって…」

アイレスが、しゃくり上げながら母と母の友人に言う。

「あたしが…、あいつを取り逃がしちゃったから…。…あたしが捕まえなきゃって思ったんだ…。あたしが…責任とらなきゃって…思ったんだ！！」

嗚咽しながら訴える少女の言葉の、最後の方はもはや言葉になっていなかった。

「あのね、アイレス…」

カルーナは銀髪の少女に、諭すように優しく語りかける。

「デイオスのヤローはね、日がな1日冥府に閉じ籠(こも)っている、ネクラのヒキコモリなんだ…。で、憂さ晴らしに亡者達を虐(いじ)めて喜んでいる、救いようの無いヘンタイなんだよ…。そんなんだからあいつは、どうすれば相手に苦痛を与えられるか、隅からスミまで知り尽くしている…。あんたが、敵うような相手じゃないんだよ…」

「でも…」

カルーナは、泣きじゃくりながら反論しようとするアイレスの頭を優しく撫でながら、話し続けた。

「…いくら頑張っても、ひとりだけじゃどうにもならない事もある…。そんな時こそ、みんなで力を合わせて立ち向かわないと…」

「あたし…」

銀髪の少女が、涙を流しながら呟いた。

「…いっぱいいっぱい鍛えたから…、ひとりでもあいつを捕まえられると思ったんだ…。でも…、あいつにも…竜にも…ボコボコにされて…」

「アイレス…！！」

母ブーボーが、アイレスの身体をより一層強く抱き締める。

「…それだけじゃない。…あたし、母さんに…あれほどいけないって言われてた…、お…お股いじりが…どうしても…、止められなくて…。あたし、バチが当たったんだ…！！」

銀髪の少女は号泣しながら、母に自分が犯してしまった「罪」を告白した。

「…やはり、血というものは…争えないものなのですね…」

娘の告白を耳にしたブーボーが、ポツリと小さく呟いた。

「…あの魔神めを、討ちにいった時…。私は見てしまったんです…」

「…いったい、何を見たってのさ？」

カルーナが、その肩を抱きながらかつての「小さな英雄」に問うた。

「あれが、大地と…目合（まぐわ）う様を…。見るも悍ましい光景でした…。

あれの醜悪極まりない女陰が、大地の…、だ…男根を深々と咥えこんで…」

カルーナとアイレス、そしてルーサと3人の男達は、黙ってブーボーの話に耳を傾けている。静寂に包まれるアイレス小神殿の中で、知恵の女神の話し声だけが響く。ブーボーは、さらに言葉を紡いだ。

「…あれは、世界が始まって以来の…、最初の『女』…。…そう思った瞬間、私は恐ろしい事に気が付いてしまったのです…！」

ーえっ！？それって…！？

娘が抱いた疑問を察したブーボーは、アイレスの頭をそっと撫でながら、話し続けた。

「私も、あれと同じ『女』…。ならば私の身体にも、あれと同じモノがあるはずだ、と…。最初は、純粋な好奇心からでした…。私の身体は、一体どのようなつくりになっているのか…。鏡でそこの様子を観察し…、そして…」

知恵の女神は暫しの間、押し黙った。神殿内を完全なる静寂が支配する。ブーボーは意を決すると、罪悪感を顕にしながら重い口を開いた。

「嗚呼…。今にして思えば、それが…間違いの元だったのです…！！…私はそこに…、自らの女陰に…触れてしまったのです！！子を成す為の穴…、膣を弄り、その周囲を取り囲む肉の襞の感触を確かめ…。それから…。…あの、快楽を貪る為の…穢らわしい淫らな突起に…うぅっ！！」

ブーボーの頬から涙が滴り落ち、冷たい石の床を濡らした。

「…そこに触れた瞬間、凄まじい衝撃が…私の頭を揺さぶりました…。次の瞬間私は…、我を忘れてそこを…弄り回しました…。身も心も舞い上がってしまうほど…、き…気持ち良かったのです…。…気持ち良さが…頂点に達した後、私は…我に返り…激しい嫌悪に陥りました…。もう2度と、このような淫らな恥ずべき行いはすまいと…。…でも、あの夢のような心地よさをどうしても忘れる事ができず…。何者よりも恐ろしい筈のあれの、蕩けきった表情を思い出しながら…。夜な夜な、何度も何度も…」

ーあたしと、同じ!?

まさか、母も自分と同じ行為に耽っていたとはー!?アイレスは驚きながら、泣き崩れるブーボーの顔を見つめた。

「…私はこの淫らな行為を止める為…、そして…私自身に罰を下す為、『それ』を行ってしまう度に…。自らの手で…、その穢れた突起を切り取りました…。何度も、何度も…」

「…あんた、何て事を!?」

盟友、ブーボーから自傷行為を行っていると告白されたカルーナが、諌めるように彼女に叫んだ。

女神達の話をじっと聞いていた4人のヒトー中でも同性のルーサは、俯きながら右手で口を覆い、辛そうな表情を浮かべていた。繊細で敏感な女性器の、最も感度が高い部分を切除される。それは、如何ほどの苦痛であろうかー?思春期真っ只中の少女は、その恐怖に身震いするのであった。

残りの3人の男達―ゴメス、ゴルゴス、パゴスは、互いの顔を見合わせながら、様々な感情が入り交じった、複雑な表情を浮かべていた。

―そういえば…！？

アイレスは、思い出していた。

―その晩は、なぜだかどうしても眠る事ができなかった。ふとんの中で、ぼうっと寝室の天井を眺めていると、どこからか声が聞こえてきた。くぐもった呻き声。それは、母さんの声だった。あたしは、なにか胸さわぎがして寝室を抜け、声のする方へ向かった。

―声は、浴場から聞こえてきた。そこに着くと同時に母さんの、押し殺した悲鳴が聞こえた。あたしは堪らなくなって、浴場の扉を急いで開けた。そこには、裸んぼになった母さんがいた。

―母さんの顔は血の気が引き、青ざめていた。母さんは、慌てて何かを自分の後ろに隠した。あたしは心配になって、「どうしたの？」と声をかけた。母さんは、「大丈夫ですよ」と弱々しく微笑んだ。「悪い病気を治していただけ。もう大丈夫。貴女は、早く寝なさい」と。今にして思えば、母さんのお股からは血が滲んでいた―。

―あれは、あの晩だけじゃなかったんだ…！！母さんはあんな事を、毎晩のようにやっていたんだ…！！

「…でも、私の巨神(タイタン)の肉体(からだ)は…。一晩もすれば、元どおりになってしまい…。何が『知恵と美徳の女神』ですか…！？…私は、女神失格です！！快楽に溺れて愚行が止められない、薄汚れた、ただの

売女に過ぎないのです！！」

血を吐くような、ブーボーの独白。その言葉は、最後には絶叫になっていた。

そして、知恵の女神は号泣しながら娘の顔を見つめた。

「…あなたには、私のようにはなって欲しくなかった…。でも、あなたの中の…呪われた淫らな私の血は、私と同じく快楽に抗う事ができなかった…。全て、私のせいです…！！ごめんなさい…アイレス…！！」

ブーボーは、アイレスを強く抱き締めた。そして、泣き崩れながら我が娘に懺悔をした。

「…あんた達、そんな事で…」

盟友とその娘の、血を吐くような懺悔を聞いていたカルーナが、静かに口を開いた。

「…『そんな事』！？カルーナ…！貴女、この娘と私がどれだけ苦しんだと…！！」

酒の女神は、泣きながら抗議の声を上げるブーボーを制し、母娘の肩を叩きながら言った。

「あのさ、あんた達がやってたそれ、『自慰』っていうんだよ。自分で自分を慰める行為…。私も時々やってる。止められないし、止めるつもりもないよ。だって、とっても気持ちいいんだもの。…それでさ、そんな事やってる私は、女神失格なのかい？」

「そ、それは…」

「おばちゃんが、女神失格…？」

カルーナは、答えに窮するブーボー母娘(おやこ)に向かって、さらに話をつづけた。

「神様だからって、聖人君子でいなきゃいけないって決まりは無い…。ちょっとくらいハメ外したっくて、いいじゃないか！ふたりとも、もうちょっと気楽に生きようよ、ね！？」

「ですが…。神(タイタン)である私達は、皆の手本にならねば…」

「…そうだよ。母さんの、言うとおり…」

「あんた達さ…」

酒の女神が、母娘(おやこ)の女神を優しく諭す。

「どんなに立派な偉人や英傑にだって、しょうもない失敗や逸話はあるものだよ。肝心なのは、『自分はどうあるべきか』『どう生きるべきか』って事じゃないのかな？何でもいい。『これだけは絶対に譲れない！』って強い芯さえ持っていれば、行動も人も自ずと後から付いてきてくれるもんさ。少なくとも、私はそう思うよ？」

「アイレス…」

「母さん…」

ふたりの母娘（おやこ）は、互いの顔を見合わせた。

「…このような話を聞いた事があります」

ブーボーが、ゆっくりと口を開いた。

「…琴（こと）の弦（げん）は、張り過ぎても緩み過ぎてもいけない。ほどほどに張らせてこそ、美しい良い音色が出る、と」

「そーそー！それだよ、ブーボー！！」

酒の女神は、知恵の女神を指差しながら嬉しそうに叫んだ。

「ブーボー…。あんたさ、水くさいよ…。そんなに思い詰めていたんなら、どうして私らに一言相談してくれなかったんだい…？あの修羅場を、一緒にくぐり抜けた仲じゃないか…！」

カルーナは涙ぐみながら、女神母娘（おやこ）の肩を優しく叩いた。

「…アイレス、あんたもさ…。あんた、さっき『バチが当たった』って言ってたけど…。神（タイタン）のあんたが、一体どこの誰にバチ当てられるってんだい！？」

「…あ！？」

あまりにも間抜けな発言をしてしまった事に気が付いたアイレスは、バツが悪そうな顔をした。

「…アイレス、貴女って娘（こ）は…」

まず最初に、彼女の母ブーボーがクスクスと笑い出した。

ルーサ、カルーナ、３人の男達ー。他の者達も、つられて笑いだす。そして、アイレス自身も涙を流しながら笑ったのだったー。

「…でも、あたし…あいつに処女(初めて)を…」

アイレスはふと我に返り、笑うのを止めた。そして、再び顔を曇らせる。

どんなに取り繕うとも、邪神の魔手により純潔を踏みにじられたのは、揺るぎようの無い事実なのだー。

「あたし…！あたし…！！」

銀髪の少女は、再び絶望に満ちた表情で俯くと、肩を震わせ始めた。

「アイナ…」

ルーサが、震えるアイレスの肩をそっと抱いた。いつの間にか、アイレス達の元へ歩み寄っていたのだった。

「どんな事があっても、アイナ…ううん、アイレスはアイレスだよー」

「ル…ルーサ！？」

「アイレス、私を見て？」

エルフの少女は、顔を上げたアイレスの頬を伝わる涙を拭いながら言った。

「あなたはとっても力持ちで、いつも優しくて…、とっても頼りになる…。でも、ちょっとドジでおてんばで…。私のアイレス…」

「ルーサ…」

「あなたはあなた。これからも、ずっと…。そして、私の…あなたへの、この気持ちもー」

ーそ、それって…！？

「…大好きだよ！アイレス！！」

エルフの少女は、アイレスの美しい空色の瞳を見つめながら愛を告白した。銀髪の少女の頭に血が昇り、ミルク色をした頬がたちまち赤く染まっていく。

「だから、私の事も『サルノ』って呼んで…」

「んッ！？」

アイレスの切れ長の眼が、大きく見開かれる。彼女の唇が、温かく柔らかい物に触れたのだ。

エルフの王女サルノが、女神アイレスと唇を重ねる。

非力で小さなヒトの少女の大きな愛が、乾燥しひび割れた大地に降り注ぐ雨の如く、女神の心に染み渡る。邪神によって引き裂かれ、

ズタズタになった白銀の女神の魂が、深い愛につつまれて潤い癒されていく。

ーありがとう、ルーサ…じゃない、サルノ…！！

アイレスの眼から、再び涙が零れ落ちる。だがそれは、先ほどまでの深い悲しみ、挫折、後悔、そして絶望の涙とは全く別の涙だった。

今の彼女が流す涙。それは、目の前にいる一番大切な存在＝デイオスとの戦いとその顛末の一部始終を見ていた上で全てを受け入れてくれた、サルノへの、そして自分を支えてくれた全ての者達とこの世界への、無限の感謝の気持ちと愛に満ちた涙ー。

アイレスはサルノの頭をそっと抱き寄せると、想い人との口づけを続けたのだったー。

「これも、一つの愛の形…。アイレス…。貴女は、三国一の幸せ者ですね…！」

「よっ！ニクいね、ご両人！！」

2柱(はしら)の女神達は、アイレスとサルノを代(か)わる代(が)わる祝福した。だが。

「…女の子同士で、そういう仲になるってのはどうなんだ…？」

4にんのやり取りを見ていたゴルゴスは腕組みをし、何やら難しい顔をしながら考え込んでしまった。

「…まあ、いいじゃねえか。あの娘(こ)らはお互い本気で好き合ってるんだ。部外者が口出しする事じゃねえ…」

―もしウチの娘(こ)が、ツレだって言って女の子連れてきたら、俺ぁどうすりゃいい…⁉

ゴメスは娘の顔を想い浮かべ、少々複雑な思いに駆られながらゴルゴスに言った。

―アイレスとサルノ。ふたりの恋は、異端と言うべき恋であった。生きとし生けるものの大多数は、互いに異なる性を持つ者同士＝則(すなわ)ち男と女とで引かれ合い、交わり、そして子を成し産み育て、種族を繁栄させていく。これが同性同士となると、子を成す為に必要な男女それぞれの「命の素」が揃わず、そして結び付く事ができない。つまり、いくら愛し合おうとも、「子が生まれない」。それは本来ならば、この世の理(ことわり)への背信行為であった。

―だが。

「グスッ…。お幸せになっ…！！」

パゴスは、そんなの関係ねえ！とばかりに咽び泣き、心からふたりを祝福した。

―当人達が幸福ならば、それで良いではないか。何故ならば、彼女達の愛は本物なのだから。この世界はあまりにも広く、あまりにも複雑にできている。それは、愛についても同じ事。ならば、このような愛の形があっても良いではないか。この世には多種多様な物事が存在し、互いに影響し合い、それが世の中をより楽しく、面白くしているのだから―。

「…大将の言う通りだな！」

ゴルゴスは顔を上げ、幸せそうに語り合う４人の姿を見ながら、静かに微笑んだ。そして、複雑な表情でアイレス達を見つめるゴメスの肩に、そっと手を置いたのだった。

ブーボーとカルーナ、パゴスが、そして少々戸惑いつつもゴメスとゴルゴスが、晴れて恋人同士となったふたりを祝福する。石でできた小さな神殿の中は、大きな幸福で満たされたのだったー。

ーと、ここまでは実に良い雰囲気だったのだがー。

「…おばちゃん。母さん…。サルノ…。あたし、やっとわかったよ！世の中には、いかがわしいえっちな事も必要なんだね！？」

勇気と武の女神アイレスはサルノとの口づけを終えると、悟りを得た！とばかりに眼を輝かせて叫んだ。

「…ほへ！？」

「いやいやアイレス、そういう事じゃあなくてネ…」

ーこの娘はどうしてこう、極端なのでしょう…。

女神アイレスの母、ブーボーは思った。

知恵の女神は、娘の恋人サルノがすっとんきょうな声を上げるのと盟友カルーナが娘を制する声とを聞きつつ、得意満面で鼻の穴を膨らませる我が娘の顔を見ながら、彼女の行く末を案じたのであっ

た。
斜め上にズレた悟りを開いてしまった白銀の女神は、産まれたままの姿でおもむろに立ち上がった。
「アイレス！何とはしたない…！」
「あっ！？コラ！よしなってば！！」
「えっ！？…アイレス！？ちょっと！！」
アイレスは、ブーボーとカルーナ、そしてサルノが止めるのも聞かずに、大股を広げて無防備な股間を誇らしげに晒した。そして、両手を腰に当て堂々と胸を張りながら仁王立ちするのだった。
「みんな！あたし、決めた！あたし、今度『せーあい』の達人の、ウィナスおばちゃんに弟子入りする！サルノ！母さん！おばちゃん！おっちゃん達も！見ててね！あたし、えっちな事いっぱいいっぱい勉強して、立派な女神になる！！」
性愛を司る愛と美の女神、ウィナスへの弟子入りー。女神達の中でもまれに見る阿呆(アホ)の子、アイレスは自覚の無いまま、正義を守る勇気の女神から性技を守るイロ気の女神へと宗旨替(しゅうしが)えを目論みつつあった。
「ダメダメ！ダメだよ、アイレス！あの御仁(ごじん)だけは、絶対にダメだよ！ありゃあ、悪いミホンだよ！『恋多き女神』なんて呼ばれてるけど、ありゃトンでもないスキモノだよ！何てったってあの御仁(ごじん)、『来る者拒まず、去る者逃がさず』で大神殿中のオトコども全員とカンケー持ってるって、消息スジの情報だよ！『抜き足、差し足、

忍び足』どころの話じゃない、『ヌき挿し、挿入れ射精し、ズッコンバッコン！』ってなもんで、どんなヤリチンヤローもハダシで逃げ出すほどのお盛んなツワモノだったりなんかしちゃったりして、そりゃあもう…」

「アイレス！カルーナの言うとおりですよ！あんな、破廉恥が服を着て歩いているような女神…。って、やっぱりあのウワサ本当だったんですかッ！？」

「そーなんだよ、ブーボー！何てったって、信頼できるスジから仕入れた情報だからね！それに、最新情報によると、あの御仁の守備範囲はオトコだけじゃないらしい…！」

「カルーナ。…それって、まさか…！」

「その、まさかだよ！花の女神殿や風の女神殿なんか、もうミもココロも上のクチも下のクチもメロメロにされちゃってるって話だよ！最近なんか、あの御仁の邸宅に3にんして集まって、夜な夜なサカリがついたドラ猫みたいなアエギ声で、ニャアニャアニャアニャア大音量で大合唱しながらヌメヌメのドロドロのグッチョングッチョンに組んずほぐれつ絡み合って、ギッコンバッタン大騒ぎ！とどのつまり、ナメクジのコービも真っ青の、そりゃあ濃厚な百合百合おセッセをシッポリズッポリネチネチと、励みまくりのヤりまくりってのなんの…」

「いやあぁぁぁぁぁ！！な、何と恐ろしい…！！」

酒の女神は、阿呆の子アイレスの阿呆な目論みを阻止しようと、必死になって熱弁を振るった。彼女の母ブーボーもまた、娘の将来を守るため必死になって盟友カルーナに加勢する…つもりが同僚ウ

ィナスのあまりにも自由過ぎる(フリーダム)下半身事情に驚愕し、図らずも盟友との井戸端会議に興じてしまうのであった。

「スキモノ？ズッコンバッコン？コービ？おセッセ？…？？？」

「ヤリチン？サカリ？下のクチ？百合百合(レズレズ)？…？？？」

アイレスとサルノは、耳慣れない単語の洪水に圧倒されていた。ふたりとも、頭の中の整理が追いつかずに目をぱちくりさせている。

思春期真っ只中の少女ふたりを巻き込んだ、世にもセーサンな光景。それは、まさに地獄絵図としか言いようがなくー。

ー取り返しのつかない事になる前に、何としてでも盟友の娘の宗旨替(しゅうしが)えを阻止しなければならない。

酒の女神による、女神アイレスを説得する為の大演説。しかしながら、それはまさに下世話なワイ談そのもの。どこぞの国の総統閣下の如く、大袈裟な身振り手振りで女性陣に向かって唾を飛ばしながら捲し立てる最中、カルーナは何かに気づいたのか、ハッとした表情を浮かべた。そして、彼女は3人の男達の元につかつかと歩み寄っていった。

「ホラッ！あんた達、ここから先は男子禁制だよっ！！」

図らずも酒の女神の口から神々の性事情を聞かされて、先程とは違う意味で微妙な表情を浮かべ、そして困惑するゴメス、ゴルゴス、パゴスの3名。カルーナは、男達を半ば強引に小神殿の外へと押し出すと、ピシャリ！と扉を固く閉ざしたのであった。

「アイレスさ…。お手本、もっと身近にいるのに気が付いていないのかい？ほら、あんたの側に…」

カルーナは男達を追い出すと、アイレスの隣に視線を移した。銀髪の少女がそれを目で追ったその先には、顔を赤らめながらおずおずと手を挙げる、サルノの姿があったのだった—。

「…へ!?サルノ!?」

アイレスは、どういう事!?と、すっとんきょうな声を上げた。

「その娘も、『自慰』の常習者なんだよ」

カルーナが頭を掻きながら、アイレスに言う。

「あんた、一度寝ちゃったらなかなか起きないから気が付かなかったんだろうけど…。その娘のアエギ声、下まで響いてそりゃあスゴかったのなんの」

それこそ、サカリのついたメス猫みたいに、さ。酒の女神は苦笑しつつも、朗らかに言った。

「アイレス、私もね…」

エルフの王女は、まるで夕日のように顔を赤く赤く染めながら、白銀の女神に向かってポツリ、ポツリと語りだした。

「あなたの事、考えると…。あ…アソコが…、カッと熱くなって…。堪らなくなってしまうの…!!」

ーえ!?ええ…!?

驚愕し、困惑するアイレスに、サルノはさらに続けて言う。

「私…あなたの寝顔を見ながら。…あなたの…、その…顔の前で…、し…シちゃったの…。何度も、何度も…。ご、ごめんなさい！！」

何と、サルノは想い人ーアイレスが熟睡しているのを良い事に、事もあろうか彼女の寝顔の前で局部を晒し、自慰に耽っていたのだった。

「…こりゃあ、あの娘（こ）も相当なスキモノだよ…」

酒の女神が、まさかここまでとは…、と頭を振りながら知恵の女神に耳打ちする。

「…これも、『ヒトの性（サガ）』ですか…。神々（わたしたち）も、他人（ひと）の事言えた義理ではありませんが…」

ブーボーは困惑しながらも、それでも我が娘（こ）の選んだ相手ならばと、盟友カルーナに向かって、ふたりを見守りましょうと、囁いたのだった。

ーヘンタイだあ！？…じゃない、タイヘンだあ！？

サルノから、世にもあんまりな夜毎の秘め事を致していたと告白されたアイレス。白銀の女神はどう反応していいのか分からず、まるで石のように固まってしまった。

「えーと…。サ…サルノ…！？」

「アイレス…私…。私…！！」

サルノはそう言うと、アイレスににじり寄り、呼吸を荒げながら顔を寄せる。だが、その時。

グウゥゥゥゥゥゥゥゥゥッ！

まるで竜の唸り声のような音が、神殿内に鳴り響いた。

アイレスが、赤面しながら腹を抑えた。それは白銀の女神の、腹の虫が鳴いた音であった。

「…そういえば、お昼から何も食べてないや」

「…私も」

アイレスに続いて腹の虫を鳴らしたサルノが、腹を抑えながら呟いた。

無理も無い。

丁度昼食を摂ろうかというタイミングで、運悪くサルノの命を狙う刺客達の襲撃を受け、休む間もなく邪神デイオスの出現。

そして邪神との対決の末の、アイレスの敗北。デイオスによる淫らな拷問と陵辱とに屈する白銀の女神を目の当たりにし、絶望にうちひしがれるサルノ一行の前に突如現れた、不思議な白い梟。

彼女の助力により辛くも邪神を退け、気を失ったアイレスを背負いながら、この「シュニア大神殿」へと避難。

そして、辱しめの数々を受けた白銀の女神はようやく目を覚まし、白い梟（ふくろう）＝母ブーボーとの再会を果たす。エルフの王女は、後悔にうちひしがれ絶望の縁に立つ女神に秘めたる想いを告げる。銀髪の少女は、最愛の少女を始めとする大切な者達に支えられながら、ようやく立ち直ったー。

数時間ほどの間に、これだけの事が立て続けに起こった。アイレス達もサルノ一行も、食事を摂る暇など無かったのだ。

「酒だったら、すぐに提供できるんだけどねぇ…」

女神カルーナが、申し訳なさそうに情けなさそうに、一同に向かって言う。

「ああ、それでしたら…」

女神ブーボーが、用意してきておいて良かった、と呟きながら革の箱の中から小さな革袋を取り出した。革袋の中にはチーズのような、乳白色をした小さな丸い塊が幾つも入っていた。

「『アンブロシア』！？こんなに！？」

アイレスが、驚きの声を上げた。

ー神饌（しんせん）「アンブロシア」。一口食せばたちどころに餓えと渇きとが満たされる、神秘の食べ物である。この世の食べ物の中でも最高位の美食ともされ、神々ですらめったに口にする事ができない貴重品でもあった。

ー高かっただろうに…。

娘のために、惜し気無く大金をはたいて高価な貴重品を持参するー。アイレスは、改めて母、ブーボーの深い愛情を噛みしめたのだった。

アイレスは、母から渡された「アンブロシア」を1粒、口にした。蜜よりも甘くクリームよりも濃厚な、素晴らしい味と、この世の全ての果物よりも甘く豊潤な香りとが、白銀の女神の口内に広がる。それを咀嚼し飲み込むと、あっという間にお腹が一杯になった。

「あっ!?いけない!!」

「アンブロシア」を食べ終えたカルーナが、何かを思い出したように叫んだ。

「ブーボー、済まない!それ、もう3つもらえないかい?」

「ええ!」

ブーボーは、カルーナに快く「アンブロシア」を3粒渡した。

カルーナはそれを受け取ると、小神殿の扉を少しだけ開けて、外で身を寄せながら蹲る3人の男達ーゴメス、ゴルゴス、パゴスに声を掛けた。

「ホラッ、あんた達!手をお出し!」

カルーナはおずおずと差し出された男達の掌の上に、「アンブロシア」を1粒づつ載せていく。

「晩メシだよッ！！」

酒の女神は３人にそう言うと、再び神殿の扉をピシャリ！と固く、固く閉ざした。

ー晩メシ…？

後に残された３人の男達は、互いに顔を見合わせながら困惑の表情を浮かべた。そして掌に載せられた白い小さな塊を、しげしげと見つめるのだったー。

＊

「おいしかった…！！」

空腹が満たされたサルノは、おもむろに着ていた物を脱ぎ始めた。上着、スカート、そして、下着ー。そうしてクルールの王女は、一糸纏わぬ姿となった。

３柱の女神達の前に晒される、エルフの少女の美しい裸体。陶磁器のように白く滑らかな肌に、歳相応の、控えめな乳房と小さめの臀部。それは思春期の少女特有の、まだまだ成長の余地を残した体つきであった。

清楚さを感じさせる小ぶりな乳房の上に尖る、初々しい小さな桜色をした小さな乳首と乳輪。細めながらもメリハリのある、健康的な色気溢れる手脚。そして秘所には頭髪と同じ色合いの、陽光のような金色の叢(くさむら)が、控えめに生い茂っていた。

「…お腹もいっぱいになった事だし。ねえ…、アイレス…。…シ

よ？」
　サルノが息を荒げながら、甘い声でアイレスに囁く。
「お待ちなさい！！ふたりとも！！」
　実にケシカラン雰囲気に包まれるふたりの様子を見た女神ブーボーが、慌てて娘とその恋人を止める。
「それ」はまだ、貴女達には早過ぎる！！そう言おうとした知恵の女神を、酒の女神が制した。
「まあまあ。いいじゃないの、ブーボー。そうカタい事言わずに、さ」
「あ、貴女まで何を言っているのです！？ふたりは、まだ子ども…！！」
「そう思ってるのは、私らだけだよ。あの娘達、いつの間にかあんなに成長してたんだ…」
　皆に、そしてサルノに支えられながらも絶望の淵から這い上がってみせたアイレス。そして、皆の助けを借りながらも命懸けでアイレスを救い出し、恐ろしい邪神を撃退したサルノ。カルーナは、ふたりの健気で力強い姿を心から讃えるのだった。
「あの娘達も、もう大人になったんだ…。母親のあんたが、娘の成長を喜ばないでどうするんだい？」
　酒の女神は、知恵の女神の肩に手を掛けて、彼女を優しく諭した。

「…分かりました。ここは、あの娘達に任せましょう…」
ブーボーは、戸惑いながらもカルーナに同意したのだった。
「…ねえ、アイレス。こんなえっちな私、嫌…？」
サルノが、不安げな面持ちでアイレスに尋ねた。
銀髪の少女は、顔を赤らめながら無言で首を横に振ると金髪の少女を抱き寄せ、唇を重ねた。
「んっ…。んんっ…。んふぅっ…」
アイレスはサルノの唇を吸い上げながら、自分の舌を恋人の口内へと侵入させた。
ヌロォ…。チュロォ…。
アイレスが自分の舌をサルノの舌に絡ませ、サルノもまたそれに応じる。サルノがアイレスの舌を、唇をしゃぶり上げ、アイレスも相手の舌を、唇をしゃぶり上げる。先程よりも熱く濃厚な、そして官能的な口づけ。お互いの熱い吐息が、お互いの顔にかかる。ふたりの興奮が、高まっていく。
「ん…」
サルノが、そっとアイレスの唇から顔を離す。ふたりの舌の先端から、混じりあった唾液が糸を引く。魔法による灯りに照らされる銀色の糸が、キラキラと煌めきながらふたりを結んだ。

ふたりは、先程までアイレスが寝かされていた敷布の上に、ゆっくりと腰を下ろした。

「よーしッ！私も、ヒトハダ脱ごうかねッ！！」

カルーナは興奮しながらそう言うと、身に纏っていた橙色の布を脱ぎ出した。

「ちょ、ちょっと！カルーナ！？何も、本当に脱がなくても…！！」

盟友ブーボーが止めるのも省みず、カルーナはあっという間に全裸になってしまった。

酒と「良き酩酊」を司る女神、カルーナの裸体。血色の良い桃色がかった肌に覆われたそれは、肉付きの良いふくよかな、豊満で実に女性的な美しい肉体だった。

自重によるものなのか若干垂れ気味ながらも、まるで西瓜（スイカ）のように巨大な、そして張りのある乳房。その大きさに反して、ベージュ色の乳輪は小さく控えめであった。双丘の頂上＝彼女の乳首は、その中央の中に埋もれている、俗に「陥没乳首」と呼ばれる形であった。

むっちりとしながらもいわゆる寸胴ではない、女性らしいくびれのある腰回り。ごく僅かではあるが下腹が出ていて、それがまた成熟した健康的な女性特有の色香を漂わせている。安産型の大きく豊かな、張りのある臀部。突けばはち切れそうなほどみっちりと肉の付いた、それでいて適度に引き締まった太股。そして彼女の秘所に

は、髪と同じく蜂蜜色の、念入りに手入れのされた叢が生い茂っていた。

「大きくなったね、アイレス…」

生まれたままの姿になった酒の女神は、目を細めながら白銀の女神の背後に腰を下ろす。そして、後ろからそっと銀髪の少女を抱いた。

「お、おばちゃん!?」

「あんた…。私と初めて会った時は、あんなに小さかったのに。おチチも、おシリも、こんなに立派になって…」

カルーナはそう言いながら、アイレスの乳房と臀部に手を伸ばし、そっと撫でた。

「カルーナ!何て事を!?」

—ここは、母親の私が…!!

ブーボーは大きく息を飲むと、意を決して身に纏っていた空色の布を脱ぎ始めた。

—そうこなくっちゃ!!

酒の女神はそんな盟友の姿を、嬉しそうに眺めるのだった。

パサリ…。

布が冷たい石の床に落ちる音と共に、遂に知恵の女神の、清楚な裸体が露になった。

小柄で細身かつ華奢な、しかしながら日々の鍛練により引き締まったブーボーの、力強く美しい肉体ー。

＊

ーかつて、「巨大なる魔神」ガンジャ及びその子らであり配下でもある竜どもと、巨神達(タイタン)との間にて繰り広げられた戦いー「神竜大戦(じんりゅうたいせん)」にて、女神ブーボーは弓を武器に竜どもと戦った。百発百中の、彼女の比類なき腕前は巨神(タイタン)一の射手として、竜どもを大いに悩ませた。だが、竜どもの母ガンジャは際限なく大地との淫らな交接を行い、そして際限なく竜どもを産み落とす。際限なく兵を増やし続けるガンジャの軍勢の前に、ブーボー達神々(タイタン)は次第に圧され、劣勢を強いられていった。そして遂に、神々の多くが捕らえられ、生きながらにして竜どもの食糧にされるという恐怖と屈辱を与えられたー。

ーガンジャの魔手より辛うじて逃れた、僅かに残った巨神達(タイタン)ー主神オルディナの双子の姉、闇の女神フォーリスを筆頭とした数名の女神達は世界の片隅にある岩と砂ばかりの荒野へと逃れ、絶望の中で息を潜めるのであった。

ーそんな状況の中で、神々(タイタン)に転機が訪れる。フォーリス達と共に逃れた、最年少であった知恵の女神ブーボーが「ある事」に気付いたのだ。

ーあらゆる武器が通用せず、灼熱の炎にも極寒の冷気にもびくともしない、不死身のはずの魔神の肉体。だが魔神は、本来ならば必要無いはずの、肉体のほんの一部を覆い隠し、守るための防具を身

につけていたー。

ー魔神を討伐するための、最後の秘策。策を献じたブーボーは、単身で自ら竜どもがたむろする敵の本陣ーかつての住まいであった、聖なる山の大神殿へと乗り込んだ。そしてガンジャが大地と淫らな行為に耽る隙をついて、その類いまれなき腕前で魔神の唯一の弱みである小さな小さな的ー生身のままのガンジャの淫核を、薬を仕込んだ針で射抜いた。恐るべき魔神は一転して囚われの身となり、二度と世界を脅かす事ができぬよう、冥府の底へと幽閉された。

ー首魁を失った竜どもの軍勢は一気に総崩れとなり、その多くが巨神達（タイタン）の手により倒された。だが、一部の者どもは神々の追撃を逃れて地の奥深くや海の底へと身を潜めたー。

ーガンジャを倒しても、その忌むべき置き土産たる竜どもの一部はまだ生き残り、身を潜めて復讐の機会を窺っているー！ブーボーは、いずれ訪れるであろう残党の竜どもとの再戦に備えて、密かに鍛錬を続けていたのであったー。

＊

ブーボーのミルクのように滑らかな白い裸体は、思春期を迎えたばかりの幼い少女のように清らかであった。まるで小皿を伏せたかのように僅かに膨らんだ、白い小さな両の乳房。その先端には、淡い美しい桜色をした丸い小さな乳輪が広がり、先端部には小粒の何とも可愛らしい乳頭が鎮座している。

まるで柳の枝のように、細くしなやかな腕と脚。それらはどちらも華奢ながら、弓を取り扱うに相応しい筋肉を身につけていた。彼女はかつて、この細くも逞しい四肢から繰り出される腕力と脚力と

で戦場を駆け回り、弓を巧みにそして華麗に使いこなし、巨神(タイタン)随一の名射手として幾多の竜を討ち取ったのだった。

柳の幹のような、知恵の女神の腰回り。その括れは控えめであったが、かつて戦場にて彼女を支えた鋼の如き腹筋は健在だった。臍を中心に、彼女の腹部をうっすらと通る一本の縦線と、その両脇に薄く走る輪郭線。無駄な贅肉が一切無い、平らな引き締まった下腹ー。

小さいながらも丸みを帯びた、実に女性的なブーボーの臀部。束ねた絹糸のようにしなやかで鋼のように頑丈な筋肉の付いた両の尻たぶは、陶磁器のように白く滑らかな肌に覆われ、僅かながらえくぼが浮き出ているのだった。

ブーボーの、華奢ながら逞しく力強い下腹部から下を守るのは、豪快に生い茂る銀色の柔らかい叢だった。丁寧に手入れされた脇とは対象的に、ありのままに生えるに任せた彼女の陰毛は、見かけによらず濃い目であった。大切な子を成すための穴を中心に、そこを覆い隠すように群生し、ほんの数本ほどは排泄のための穴＝菊座の周囲にまで達してしまっていた。

「退いて下さいッ！！」

ブーボーはカルーナを押し退けると娘の背後に座り、アイレスの身体をそっと抱き締めた。

「乱暴だねぇ…。ま、いいけど」

酒の女神は苦笑しながら、しかしまんざらでもない様子で知恵の女神に場所を譲る。

「か、母さん！？」
勇気と武の女神は、突然の母の挙動に驚きそして戸惑った。
「ねえ、アイレス…」
エルフの王女が、アイレスの股間を覗き込みながら彼女に声を掛けた。
「毛が邪魔で、アイレスのがよく見えない…」
銀髪の少女の、母譲りの濃い体毛は「もう陵辱などさせるものか！」とばかりに、邪神の魔手により純潔を奪われてしまった少女の大切な秘部をすっぽりと包み、覆い隠してしまっていた。
「アイレス…！」
母、ブーボーがアイレスの耳元で優しく囁く。
「もっと、脚を広げてあげなさい」
「…え！？で、でも…」
恥ずかしいよ。母の言葉に、アイレスは顔を赤らめてためらう。
「このようにッ！！」
業を煮やしたブーボーが、娘＝アイレスの両脚に自分の両脚を絡ませるとグイッ！と一気に押し広げた。同時に自分の股関をアイレ

スの腰に押し付け、半ば強制的に前へと突き出させる。

「あ゛っ!?」

母に不意打ちを食らった銀髪の少女は、短い悲鳴を上げた。

女神ブーボーの手により、若き女神アイレスの可憐な秘部が、最愛の少女の目の前にさらけ出されてしまった—。

密宴　1　☆（後書き）

本パート、長くなりそうなので一旦区切ります。

※２０２３／１１／１２追記
先日、某シリーズの３０作目を視聴して参りました。
今作の「主役」のデザイン＆キャラクターと暴れっぷりも実に魅力的だったのですが、それと同じくらい心に残ったのが、強大で恐ろしい存在に対して持てる全ての武器と、そして知恵と勇気を振り絞って立ち向かおうとする人々の姿でした。
自分は主役である怪獣達だけでなく、その強大な怪獣達に果敢にも立ち向かう人間達にも魅せられて、この手の映画を観ていたのだという事を改めて実感しました。

さて、本作「女神アイレスの冒険」についてですが…。
本作はポルノ作品ではありますが、往年の国内外の特撮作品に向けたファン作品としても遜色ない作品を目指しております。
極めてニッチな内容のお話ですが、今後も「女神アイレスの冒険」をよろしくお願い致します。

密宴　2　☆

小さく愛らしいアイレスの大切な肉の蔷薇は、そこを健気にも守っていた白銀の陰毛とは裏腹に想い人との熱い情事へ向けてすっかり準備を整えてしまっていた。

桜色の小さな2枚の花弁は綻び、真珠色さの蜜を滲ませてしまっている。そして、肉蔷薇の頂きにちょこんと鎮座する小粒の可憐な雌しべは自身を守る肉の衣を押しのけ、薄桃色の顔を覗かせながらその小さな身を精一杯充血させて、想い人からの心地よい愛撫に晒されるのを、今か今かと待ち構えているのであった。

アイレスの桜色の蔷薇の下に咲き誇る、薄桃色をした雛菊もまた、サルノに視姦（み）られているという興奮により、恥ずかしそうに嬉しそうにヒクヒクと収縮を繰り返している。

「きれい…！」

サルノはそう呟くとアイレスの尻に顔を近づけ、銀色の体毛が薄く煙る美少女女神の雛菊に舌を這わせた。

「やッ！？ダメッッ！！」

白銀の女神は慌てて腰を引こうとするも、母・ブーボーにガッチリと押さえられてしまってどうする事もできない。

「…そこ…。きたなぁっっっ！！」

「どうして？」

アイレスの肛門を舐めるサルノが、上目遣いで白銀の女神の顔を見ながら尋ねる。

「…だって、そこ…。…ウンチの…」

白銀の女神は、消え入りそうな小さな声でエルフの王女に答えた。

「アイレスは、神様なんでしょ？」

「そ、そりゃそうだけど…」

「神様の身体に、汚いトコロなんてありませんッ！」

サルノはそう宣言すると、アイレスの雛菊への奉仕を続ける。

「…や…やぁっ…！？」

アイレスは、羞恥により身体を紅潮させながら若干の抵抗を試みるも、それも次第に弱々しくなっていく。

ヌロヌロ…。チロチロ…。

サルノの舌が、アイレスの菊座を優しく執拗に這い回る。皺の一本一本を丹念になぞり。皺が集中する真ん中を突き、グリグリとほじくり。

ー…ああ…。おシリ…。ムズムズして…。

「気持ちぃい？」

サルノが、肛門への奉仕を続けながらアイレスに尋ねた。銀髪の少女は空色の瞳を潤ませながら、無言で頷く。

「もっともっと、気持ちよくしてあげるね？」

金髪の少女は、舌を雛菊から桜色をした薔薇へと移動させた。

—……これが、アイレスのあそこ……！！

サルノは、肉薔薇の花弁を一枚づつ舌でなぞり、優しくゆっくりと口に含む。そして、チュッ！チュッ！と音を立てながらしゃぶった。

「……ああ……あぁ……あぁん……！？」

銀髪の美少女神は、恍惚に満ちた眼で自分の秘所がヒトの少女に蹂躙される様を見つめている。それはあの忌まわしい、彼女を穢し、辱しめ、身も心も屈伏させせんとした、デイオスの愛撫とは全くの別物であった。

—ただただ、アイレスを悦ばせてあげたい。最高に気持ちよくなってもらって、満足させてあげたい。

サルノの、アイレスへの思いやりに満ちた愛情のたっぷり籠った、優しい優しい優しい愛撫—。

「ひあ゛っっっ！？」

アイレスが、突如甘い悲鳴を上げた。

何と、彼女の横から酒の女神カルーナが、大きいながらも未だ発育途中の少女の乳房ーその片方にしゃぶりついたのだ。

「母乳（おっぱい）出るかなァ？」

カルーナは、好色そうな笑みをニヤニヤと浮かべながら、赤子になったようなつもりで盟友の娘の乳首を吸うのだった。

「やぁん！？で…でるわけ…！！」

チュウチュウ…。チュウッ…。

カルーナの唇が、アイレスの可憐な突起を甘く甘く吸い上げる。酒の女神の鼻息が、白銀の女神の白い柔肌をそよそよと優しくくすぐる。

「アイレスッ！！」

「ひあ゛ぁぁぁぁっっ！？」

アイレスが、再び悲鳴を上げた。

残る片方の乳房に尖る乳首を、母・ブーボーがキュッ！と摘まみ上げたのだ。

「乳首と陰部（ほと）とを吸われて、こんなに顔を惚けさせてしまうとは…。何とはしたない…！」

ブーボーは、アイレスの乳首を指先でクルクルと優しく撫で擦りながら叱責した。だが、その目は笑っていた。知恵の女神は、白銀の女神を本気で怒ってはいなかった。

ーこの子は私の娘…。カルーナ、サルノ…。私も、負けませんよ！？

何という事だろう。アイレスへの奉仕に、彼女の母親であるブーボーまで参戦してしまったのだ。

これまで幾多もの薬品や道具を発明し、創造してきたブーボーの手。巨神（タイタン）随一の器用さと繊細さを誇る知恵の女神の指先が、アイレスの胸に尖る敏感な突起を優しく巧みに按摩する。

スリスリ…。スリスリ…。

桜色の小ぶりな乳輪を繊細なタッチで撫で回し。

カリカリ…。カリカリ…。

ツンとおしゃまに尖る乳頭の先端を、爪で軽く柔らかく引っ掻く。

ーか、母さん！？そんな事で、サルノ達と張り合わないでぇ！？

娘の必死の囁きも、母の耳には届かない。

「あ゛はぁっっっ！？」

アイレスの上半身が弓のように仰け反った。

カルーナが、もう片方の乳首を甘噛みしたのだ。

コリコリ…。コリコリ…。

優しくも刺すような鋭い刺激が、愛撫される乳首から発せられ、アイレスの全身を駆け巡る。

ー…おっぱいだけで、イっちゃうよぉ！！

白銀の女神は切なげなため息を漏らしながら、両の胸を包む甘やかな刺激に瞳を潤ませ、石でできた天井を仰ぐのだった。

ー私だって！

アイレスの秘裂を舐(ねぶ)っていたサルノが、負けじとより激しく淫らに白銀の女神を責め始めた。彼女の大切な肉の穴＝膣口に、深々と舌を挿し入れたのだ。

ヌポッ…！ジュポッ…！

そのまま柔肉の味と食感を愉しみながら、顔を前後に揺すってアイレスの膣内(なか)を摩擦する。そして鼻先で最も敏感な、小さな小さな肉のベリーをグリグリと優しく押し潰し、摩擦してやるのだった。

「さ…、サルノぉ！？」

アイレスは堪らず、陰部(ほと)を責める想い人の名を呼んだ。

コリッ！！

ピンッ！！

「あ゛あ゛ぁぁぁぁぁっっっ！？」

アイレスがサルノの名を呼ぶのに呼応して、カルーナが片方の乳首をやや強めに噛み、ブーボーが残る片方を優しく弾く。

1人の王女と2柱の女神は、持てる技の全てを尽くして白銀の女神をもてなす。それは、まだあどけない美少女神の身に染み付いてしまった、邪神デイオスの穢れを祓うための浄めの儀。そして、果敢にも邪神に挑んで身体を張って人々を守ろうとした勇気と武の女神を労うための、秘密の宴(うたげ)であった。

「…やぁッ！？そんなに…されたら…、あたし…あたし…！！」

アイレスが、さんにんによる甘く濃厚なもてなしに空色の瞳を潤ませ、喘ぎながら息も絶え絶えに叫ぶ。

「されたら、どうなっちゃうの？」

「お…おかしく…なっちゃう…！！」

「どうして？」

サルノが、アイレスの膣から舌を引き抜く。そして一旦愛撫を中断させ、いたずらっ子のような笑みを浮かべながら上目遣いで恋人に尋ねた。

「きもち…あんっ！！…よすぎ…てぇ…はうぅぅっっ！！」

アイレスは快楽の中で喘ぎながら、サルノに答える。

「じゃあ、もっともっとおかしくしてあげるね！」

……くりっ！

「ひあ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ッッ！？」

突如もたらされた女陰からの強烈な衝撃に、銀髪の少女は甘い悲鳴を上げながら、ガクンっ！と腰を浮かせた。

金髪の少女が、アイレスの一番の泣き所ー小さな肉の突起を守る包皮を指先で巧みに剥き上げると、露出した過敏な中身をキュッ！と摘まみ上げたのだ。

「こりこりしてる……」

サルノはクリクリと親指の先端でアイレスの淫核を撫で回し、すっかり勃起してしまったそこの感触を愉しむのだった。

「……やっ……！？ら……め゛ぇっっ！！」

過敏な粘膜を直に刺激されるアイレスは、堪ったものではない。腰を前後左右に激しく振りたくってサルノの指による追撃から逃れようともするも、身体と四肢をブーボーとガッチリと抑え込まれてそれもままならない。そしてふたりの女神は少女の乳房を揉みし抱き、その上に尖る乳首を刺激してやる事で、アイレスを快楽という奈落へ引き摺り込もうと追い打ちを掛けるのだ。

「や゛あぁ……！！や゛あ゛ぁぁぁぁぁ！！」

焼けつくようような痺れるような、あまりにも強烈な刺激の前にアイレスはとうとう、頭を大きく振りたくりながら幼子のように泣きじゃくり始めてしまった。

「…ごめんね。じゃあ、こうしようか」

サルノは、アイレスの淫核に唇を寄せた。そしてその柔肉をそっと、銀髪の少女の敏感な肉の芽へと押し付けた。

「ああッッ！？」

小さいながらも神経の詰まった過敏な突起が、プリっとした柔らかな感触に包まれる。指とも違う初めて味わう刺激に、アイレスは堪らず天を仰いで嬌声を上げた。

スリスリ…スリスリ…。

「あっ…！…あぁぁ…！！」

サルノの唇がまるで羽のような繊細なタッチで、アイレスの淫核を摩擦する。銀髪の少女は砂糖菓子よりも甘やかな刺激に、悦びの声を上げるのだった。

「…それッ！！…い…いいよぉ…！！」

ーなら、もっとしてあげるね？

サルノは、上目遣いで微笑みながらアイレスに無言で訴えると、唇をすぼめてゆっくりと、優しく優しく銀髪の少女の小さな肉の突

起を啜り上げた。

ぬろぉ…。にゅるにゅる…。ちゅろぉ…。

「ふあぁぁぁぁぁぁっっっ！？」

金髪の少女はアイレスの淫核を唇で挟むと、柔らかな舌先で転がし、ねぶり始めた。ゆっくりと、じっくりと、アイレスの敏感な部分を甘く甘くもてなす。強過ぎず、弱過ぎず。それは、時間をたっぷり掛けながら想いびとを快楽で愉しませつつ至福の瞬間へと導く、愛と慈しみに満ちた奉仕であった。

クリクリクリクリ…。

ちゅっ…。ちゅうっ…。

アイレスを背後から支えるふたりの女神も負けじと、少女の両の胸に尖る敏感な２つの肉の突起を、甘く切なく責め立てる。さんにんによる慈しみに溢れた愛撫は、銀髪の少女を緩やかに、しかし確実に、悦びの頂きへと誘っていく。

ーはあ…はあ…！！

アイレスは甘い吐息を漏らしながら、空色の瞳を潤ませる。視線が宙を泳ぎ、顔を紅潮させる。そして、頭の中が7色に輝く悦びで満たされていく。

「…い…イっちゃ…！！」

身も心も限界を迎えつつある銀髪の少女は、さんにんに向かって

消え入るような小さな声で訴えた。

「良いのですよ？心のままに、果てなさい…」

母親のブーボーが、娘の耳元で甘く優しく囁いた。

こりっ！！

サルノが、ブーボーの言葉に合わせて止めとばかりにアイレスの淫核を甘噛みした。その時だった。

「…ッ！？…ぁ゛ッッッ！？…ひぁ゛ッッッ！？」

アイレスの身体が、四肢が、まるで釣り上げられた魚のようにビクン！ビクン！と激しく痙攣した。そしてぐったりと、ふたりの女神にしなだれかかった。

「はあ…はあ…。…あはぁっ…」

アイレスは実に幸せそうな笑みを浮かべて、白濁した淫水まみれになった女陰(ほと)と菊座を悦びでヒクつかせながら、絶頂の余韻に浸ったのだった—。

密宴 2 ☆（後書き）

「密宴」パート、もうちょっと続きます。